平成２５年度
西成区単身高齢生活保護受給者の
社会的つながりづくり事業

ひと花プロジェクト 報告書

2013

平成２５年度　ひと花プロジェクト報告書

もくじ

1 はじめに
～社会的つながりづくりから始まる小さな実験いっしょにひと花を咲かせましょう～

2 あいりん地域のあゆみ　～ひと花プロジェクトの背景～

8 ひと花プロジェクトについて

14 ひと花センター　プログラムレポート

38 座談会「あっこちゃんの会」 第１回 おしゃべり紹介！

42 地域のみなさんに聞いてみよう！

46 シンポジウム「みんなに会いに来ています」報告

50 インタビュー
看護、医療、健康の視点から 「つながり」「居場所」の意義・意味を考える

54 釜ヶ崎で学ぶ者が見た「ひと花センター」

56 まとめにかえて　～ひと花センターの日常から～

61 ひと花センターで生まれた作品

70 調査・論考

83 コラム　松繁さんと考える！あいりん地域の未来

85 ひと花新聞　１～９号

122 ひと花プロジェクト　掲載記事

127 参加者数・プログラム数　一覧

128 事業概要

はじめに　～社会的つながりづくりから始まる小さな実験 いっしょにひと花を咲かせましょう～

NPO法人釜ヶ崎支援機構 事務局長　松本裕文

これからの日本で、高齢者の暮らしをいかに支えるか。また、自分自身の老いをいかに迎えるか。この問いを誰もが不安とともに抱く時代になりました。会社･家族･地域･年金による支えが、土台から大きく揺らいでいます。どの地域も共通してこの課題に直面する未来に対して、私たちはどのように備えたらよいのでしょうか。

近年高齢化が急速に進む日雇労働者の街・釜ヶ崎（あいりん地域）でひとつの試みが始まりました。西成区単身高齢生活保護受給者の社会的つながりづくり事業（通称：ひと花プロジェクト）です。

地域では、建設現場の仕事に雇われなくなりホームレス状態での生活を余儀なくされる高齢の日雇労働者が、９０年代に急増しました。バブル経済が弾けた後に日雇労働求人が、急激に減少したためです。

以後２０１４年の今になっても、景気の回復とは関係なく「働く力はあるけれど雇われない年齢になっている」「きつい現場の仕事に身体がついていけない」等の理由から、野宿生活やシェルター暮らしを続ける方が多数存在しています。定年前後の年齢に至り地域で支えられずに釜ヶ崎へ流れ着く方も近年増えているようです。

病気や身体の衰えから生活保護に進む選択をすることがあります。働くことを望みながら働けなくなる時、仕事によって維持されていた社会とのつながりが失われます。自分を認めて評価できる基準がなくなってしまいます。単身者として暮らす場合には、社会とのつながりの喪失は、特に大きな影響を与えるでしょう。

生きるかぎり、人はつながりを探します。かかわりの度合いは人さまざまですが、人に働きかけ、社会に働きかけ、また働きかけられることを願います。その願いを社会の中でいかに実現するか。この課題は、世代を越え、地域を越え、貧富の階層を越えて、共通ではないでしょうか。

ひと花プロジェクトは、従来福祉のフレームの外に出た取組みとして計画されました。障がい福祉や介護サービスの対象とならなくても、生活保護を受けている６５歳以上の方であれば利用できます。金銭の預かり･服薬の見守り等の生活支援、清掃･農作業等の社会参加支援、居場所と職業体験の提供ができるようになりました。社会に貢献する活動を通して、釜ヶ崎（あいりん地域）の固定的なイメージを変え地域を活性化することをめざしています。

ひと花センターが結び目となって、６５歳以上の生活保護受給者と地域住民と行政とがつながっていきました。プロジェクトがまちの活性化の原動力のひとつになっていきます。その原動力の中心は、利用者（メンバー）が自ら表現し、選び、決めていくことです。地域に貢献するまちづくりの当事者になるということです。

ひと花プロジェクトでは、かかわる人がみな当事者になります。スタッフも地域の方も行政もそれぞれが当事者です。地域における当事者とは、地域の課題について利害の関係と意見とを持つ人のことですから、当然のこととしてさまざまな調整すべきことが生じます。違う考えを持つ人たちと向かい合う出会いの緊張感があります。諍（いさか）いもあります。だから、たっぷり話し合いをします。まちをつくる当事者であるためには、苦労やリスクを他人任せにせずに分かち合うことが重要だからです。

ひと花プロジェクトは従来の脱ホームレス支援のフレームからも飛び出て、外側へ育っていこうとしているのかもしれません。脱ホームレス支援においては、まず命をその次に権利を守ろうするのが基本ですが、命と権利が何でできているか、ふりかえることができる地点に私たちは期せずして辿り着いたようです。

ホームレス状態から畳の上にあがっても、孤立や生活の困難がすぐ解消するわけではありません。依存症や障がい等がある場合もあり、単身の元ホームレス経験者が生活費や家賃を支払い、最低限の生活を維持するだけでもトラブルが多発します。しかし、それらの人がそれぞれの生活の形において自信を得て活動できる場があれば、そうした困難は減っていくのではないでしょうか。

命は、弱まっていく時も、つながりあう豊かな可能性を持っています。

利用者（メンバー）の１人が重い病気のため、ひと花センターに通えなくなりました。ひと花利用者（メンバー）とスタッフが毎日部屋を訪問し、この利用者（メンバー）との時間を大切にしています。見守りのなかで新しいつながりが増えていきます。弱まっていく命がこの世界を去ろうとする中でひと花を咲かせ、周囲の人にさまざまなものを与えていきます。

命を弱めることにつながるひきこもりや自暴自棄の行動など負の方向へ向うことがあっても、周囲や社会に対して自分を表現していることにかわりはありません。行動の現れ方に囚われることなく、周りにいる者が、気付き・受け入れ・つながる姿勢を持ち続けることが大事です。

今ひと花につながる人たちは、まちづくり当事者としての経験を通じて、時代と社会の変動により形作られてきた地域への偏見やこのまちに累積する貧困･孤立のために人々の心に生じた、痛みやこだわりや恐れをも認めて包み込み、分かち合う力を培おうとしています。

命はいつも活動し、働きかけてきます。権利とは、自分自身の活動をもって社会に働きかけることができるということだと思います。

ひと花プロジェクトは、働きあうことができる社会を作っていくための小さな実験です。

この本を手にとっていただいたあなたと、いつかどこかで出会えることを願います。つながりができることを願います。

いっしょにひと花を咲かせましょう。

釜ヶ崎で、あなたの場所で、つながりのあるこの世界で。

あいりん地域の歩み
～ひと花プロジェクトの背景～

「このまちで 働いて働いて ひとりで生きてきた」

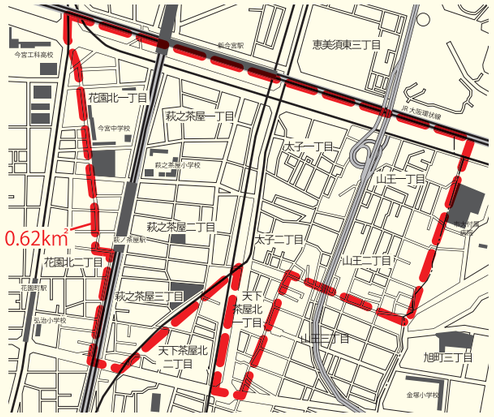


図１　「あいりん地域」の範囲

出典：『大阪府簡易宿泊所生活衛生同業組合50年誌』
大阪市立大学都市研究プラザ　2011年

「あいりん地域」の概要

大阪市西成区北東部に位置し、通称「釜ヶ崎」と呼ばれる（図1）。日雇労働者が仕事を求めて集まる「あいりん総合センター」がある。人口密度は日本一で、わずか0.62ｋ㎡の土地に「ドヤ」と呼ばれる簡易宿泊所が密集し、1960年代のピーク時には約3万人、現在も約2万人が住んでいる。

1960年代以降、日本の産業構造の転換にともない、高度経済成長を下支えする労働力の供給地として発展した。同時に人口に占める単身男性の割合が増えていく。1960年から1990年にかけて、世帯当たり平均人数は3.5人から1.2人に減少、総人口に占める男性の割合は53%から85%に増加した。

日雇労働は、一日単位で雇用契約を結ぶ雇用形態で、主に土木建設関係の肉体労働である（図2）。労働環境は過酷なことが多く、暴力行為や差別的な扱いも珍しくない。雇用は不安定で、景気の安全弁として不況のときには求人数が激減する。1990年に戦後最高の185万人を記録した求人数は、バブル崩壊後の1993年には89万人以下にまで落ち込んだ（図3）。十分な保障もなく、頼れる家族もいない労働者は、野宿生活を余儀なくされた。

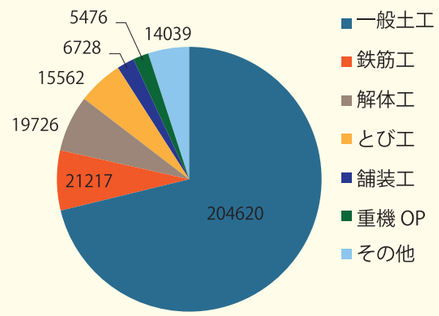


図２　西成労働福祉センターにおける
建設業の職種別日雇求人数（2013 年度）
単位：人日

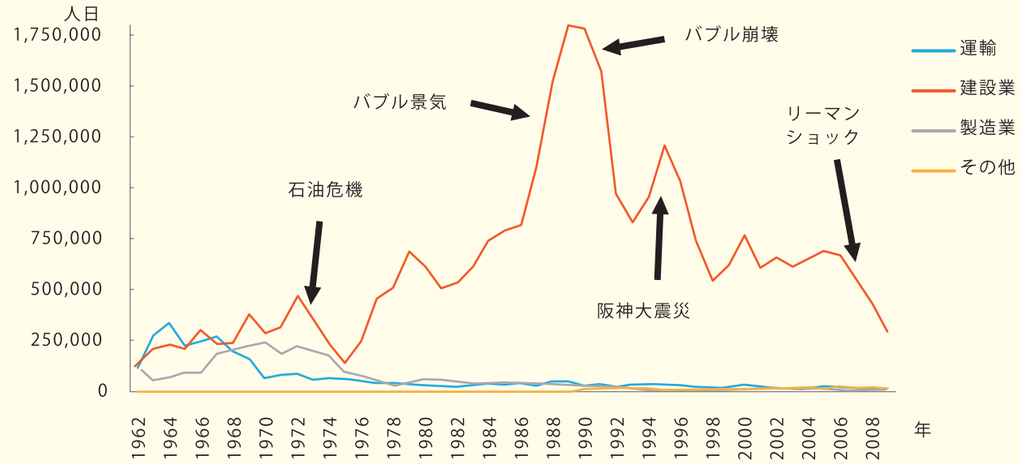


図３　西成労働福祉センターにおける業種別年間日雇求人数

生活保護

**あいりん地域では
高齢化が進み、
生活保護を
受給している人が
多くいます。**

**住居と生活費があっても、
時間を持て余してしまうこと、
関係から孤立してしまうこと、
アルコールやギャンブル依存など、
このまち特有の問題があります。**

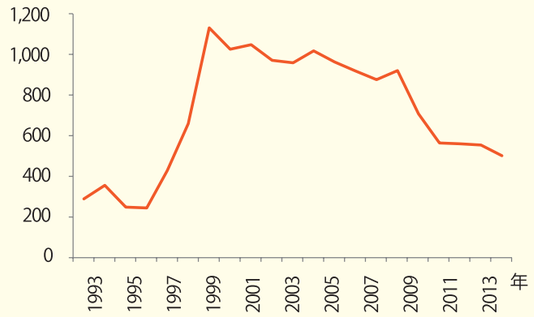


図4　釜ヶ崎における1日あたり野宿者数の推移
(2001 年以降はシェルター利用者含む)

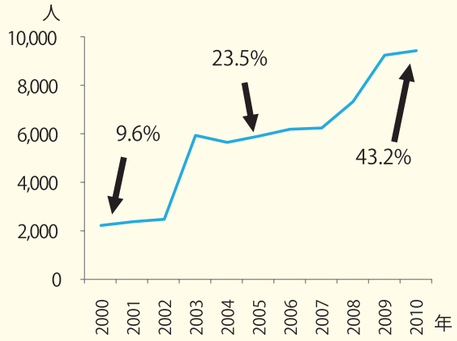


図5　「あいりん地域」における
生活保護受給者数と受給率の推移

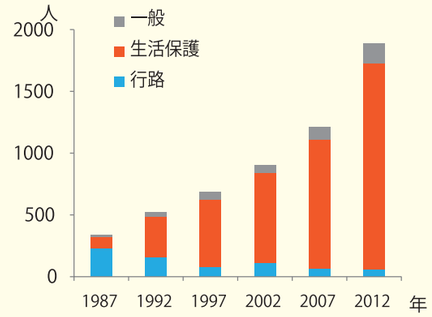


図6　大阪市無縁仏合祀件数

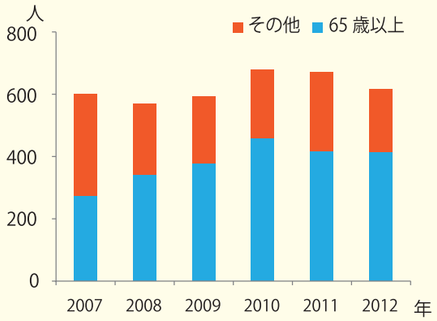


図7　西成警察署取り扱い変死者数

出所：白波瀬達也 (2014)「あいりん地域における単身
高齢生活と死ー弔いの実践を中心に」『現代宗教 2014』

労働者の多くは、高度経済成長期に職業を求めて集団就職した「団塊の世代」で、年齢を重ねたために働く意欲があっても働く場がなかったり、体力が衰えて建設現場では働けなくなったりと、慢性的な失業状態に陥った。1998年には大阪市内で8600人の路上生活者が確認され、その翌年には釜ヶ崎だけでも1000人以上が野宿していた（図4）。しかし、その数は2000年代半ばから減少し、かわりに生活保護受給者数が増加している（図5）。日雇労働者として働いてきた人々の高齢化や、他の地域で働いていたが高齢で就業できなくなった人々の流入もあり、この地域の生活保護受給率は上昇している。2010年は43.2%にも上り、大阪市全体の5%に比べて格段に高い。

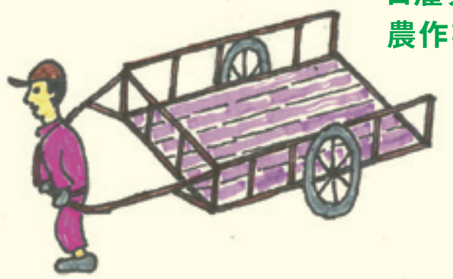
生活保護を受給した後の生活では「孤独」の問題が付きまとう。生活保護を受給できれば、路上生活に比べ、経済面、住居、医療など、基本的な生活は安定する。しかし、日雇労働という不安定な雇用形態の中で働き経済成長を支えてきた元労働者が、仕事という生きがいを失う。単身のため人と話す機会も少なく、生活保護を受給しているという負い目の中で、まちの中に居場所がなく、お酒を飲むかギャンブルをするという日常に陥るケースを多く見聞きする。

「孤立」は、しばしば「孤独死」という結果を招く。「あいりん地域」独自の統計がないため推察する他ないが、大阪市の無縁仏合祀件数の内訳を見ると、無縁で亡くなる方のうち特に生活保護受給者が急増している（図6）。また、西成警察署取扱い変死者数に占める高齢者の割合が増えている（図7）。いずれの変化も、単身高齢者の孤独死に帰因していると思われる。

この地域で、さまざまな地域課題に
取り組むNPO法人があります。

釜ヶ崎支援機構

仕事づくり
就労支援
生活相談



生活サポート釜ヶ崎

日雇労働者・野宿者の生活支援
農作業

まちづくり今宮

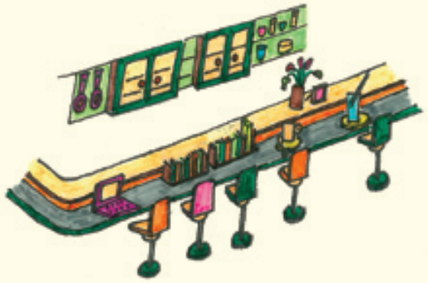
まちづくり
地域連携・地域活性化

ヘルスサポート HINATA

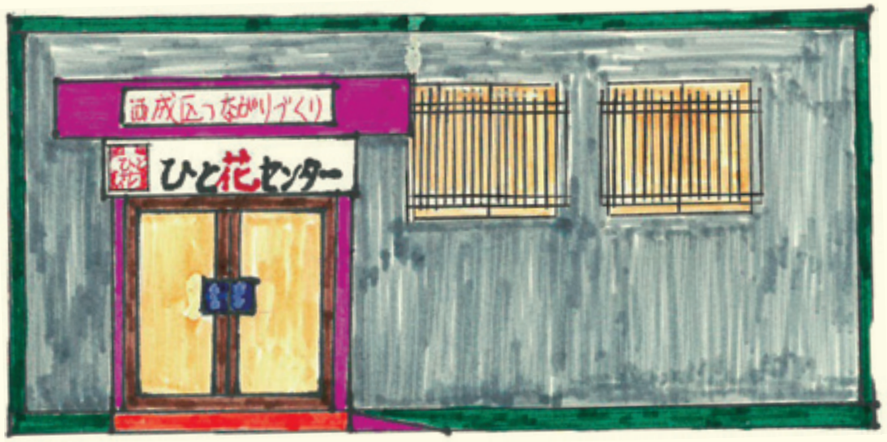
訪問看護
健康相談
見守り支援
居場所づくり

こえとことばとこころの部屋

表現の場づくり
居場所・交流



これら5つのNPO法人が連合して西成区が2013年度からスタートした「単身高齢生活保護受給者の社会的つながりづくり事業」を受託し「ひと花プロジェクト」がスタートしました。



2013年7月に、西成区花園に「ひと花センター」がオープンしました。
センターには登録した方がいつでもくることができ、地域清掃や、農作業、表現プログラムなどの活動に参加しています。
また、金銭管理や服薬サポートも行っています。

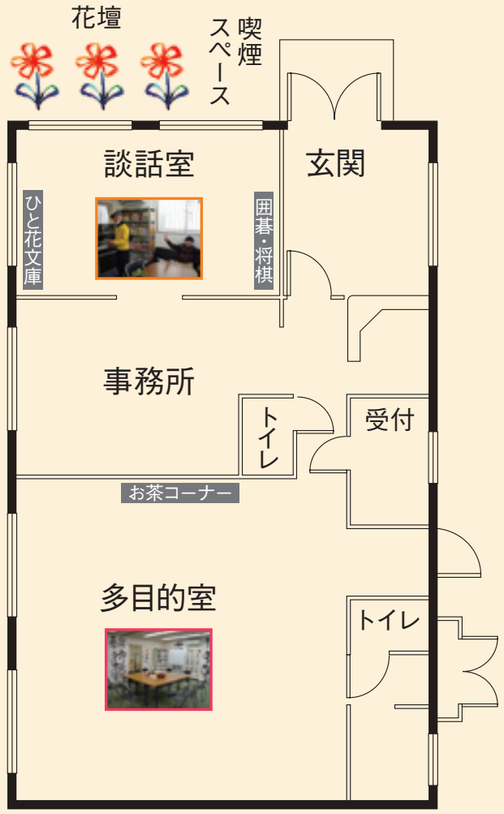
毎週、近くの学校や公園の清掃活動を行ったり、小学校の運動会の準備を手伝ったり、地域の文化祭に参加したり、劇団を結成してお芝居を発表したりと活動の場が広がっています。

ひと花プロジェクトについて

地域のお手伝い

ひと花センターの間取り

室内約112㎡



居場所

読書・コーヒー・まったり

囲碁・将棋

農作業

今宮ふれあい広場農作業地

健康教室

血圧測定

レクリエーション

ひと花カフェ

ひと花映画館

表現プログラム

書道

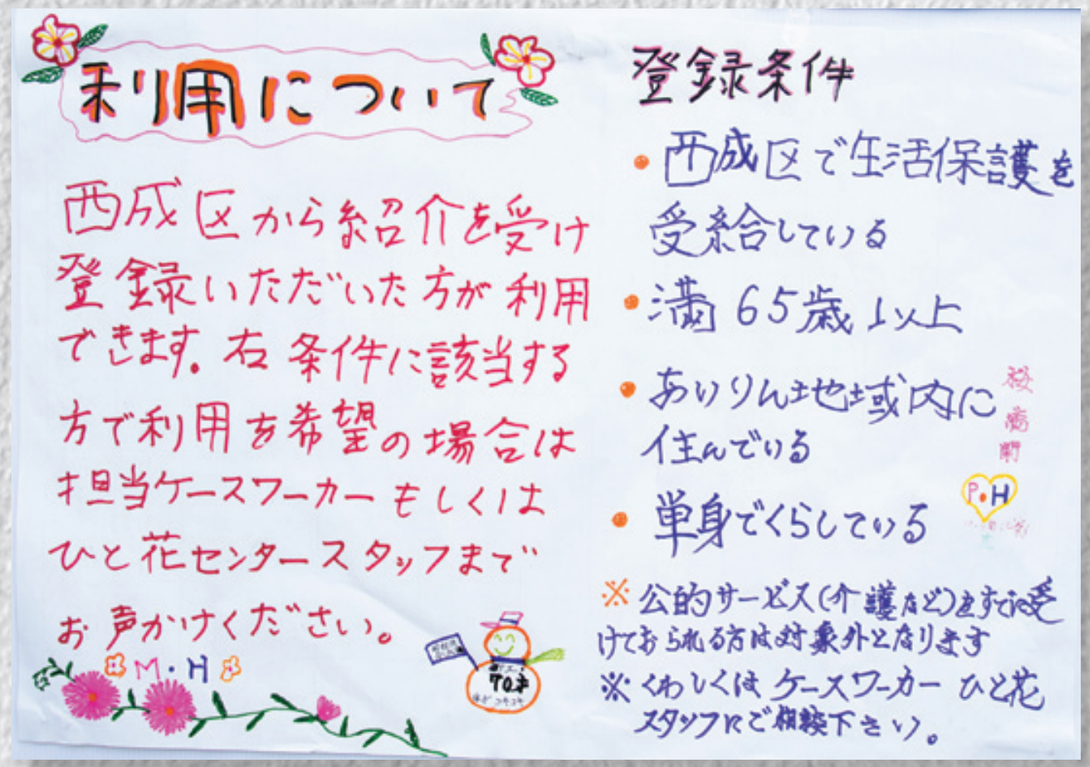
ヨガ

こんなことをしています。

ほっと一息、にっこり咲いて、このまちの、笑顔になろう

西成区単身高齢生活保護受給者の社会的つながりづくり事業

あいりん地域にて単身高齢で生活保護を受給しておられる方の社会参加、及び生活支援のプログラムを行う事業として2013年7月にスタートしました。プログラムを通して孤立を防ぎ、地域・社会とのつながりをつくり、ひとりひとりがいきいきと生きられるよう、またそれによって地域がいきいきとなるような活動をめざします。



利用について

西成区から紹介を受け登録いただいた方が利用できます。右条件に該当する方で利用を希望の場合は担当ケースワーカーもしくはひと花センタースタッフまでお声かけください。

M・H

登録条件

- 西成区で生活保護を受給している
- 満65歳以上
- あいりん地域内に住んでいる
- 単身でくらしている

※公的サービス(介護など)をすでに受けておられる方は対象外となります

※くわしくはケースワーカーひと花スタッフにご相談下さい。

表現プログラム

さまざまな表現で心と体の声を開く

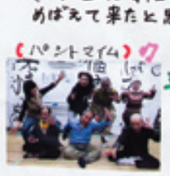
ダンス・演劇・詩・工作・美術・パントマイム・能・茶屋劇・哲学
など、さまざまな表現プログラムを行っています。
表現を通し他者と関わり、自分をみつめ、相手に伝える
ちからや社会と関わるちから、生きるちからを発見しています。

コーディネート：NPO法人 こえとことばとこころの劇場（ココルーム）

講師：岩橋由莉（出演）、上田陽奈代（詩）、エメスズキ（ダンス）
吉田麻衣（演劇）
木堂 陽一（パントマイム）、小手川 望（ヨガ・ストレッチ体操）
田面達摩（書道）、前川敬士（演出）、松本泰子（ヨガ）
三原 美奈子（工作）、能茶屋劇団すずが、石橋 友美（能茶屋劇）
西川 勝・菅本友介（哲学）、沖田 郁（演劇）

参加者の声

- センターに来るのに お酒の量が減りました
- 心のバランスがとても いい感じです
- 人と人の付き合いが楽しくなり世間の動きや なり立ちが少しわかる様になりました
- 酒の力で心開き 詩想湧き出て 俳句 詩を作り ダンス パントマイム リハビリで 体軽くなり 茶道 書道で 心のまま に遊び 戯れ……手も動くが 口はなほ 動く 楽しいよ
- 「ひと花笑劇団」と銘打って 茶と茶屋文化祭 で芝居を出す 参加のひと花センター3名がドラム(ダ)で 名作「人生賭ける」を出す。 名演上手が何百回 と演じた芝居には もちろん足下にも及ばないが、大海の先輩の香りを今しでも感じて 味わいながらの思いで 夢中になっての熱演です(A)
- 人は悲しい者です お酒にすがり、ギャンブルにおぼれしていた わたし今年は ひと花センターに出る様になったプログラムの中で 私自身の心と姿勢が少しづつ変わって来ているのでしょう。 お酒もひかえ、ギャンブルもひかえこのたびの表現プログラム でひと花劇団に出演する事になり少しは責任感が少しは めばえて来たと思っています。


（パントマイム）

（体ほぐし）

（リラックス体操）

楽しそう

ナニヤッテルノ？

体験学習

ミシンを使ったエコバックつくり

講師 高橋誠

かさの生地から エコバックを作ります 思わず欲しくなります

人つきあいの困りごとをみんなで考える会

講師 瀧尻明子

みんなでアイデアをだしあって練習します。

花の植え替え

まちのプランターに育てた苗を植えます。

話してためして問題共有

空手 護身術

講師 細谷憲一朗

初級空手をまなび 心身ともにきたえられます。

レクリエーション

利用者の声

映画鑑賞（邦・洋画の名作ズラリ!!）

散歩の会（大阪にこんな所があったんだ!!）

ひと花カフェ（料理をしてみんなで食べる）

ひと花句会（眠っていた知的感覚が蘇る）

絵本の読み合わせ会（逆還暦で私は5才）

囲碁将棋の日 など（ここは大阪 私は阪田三吉）

邦画 洋画に我その感じ だけれどなつかしい 映画は昔なつかしい映画のはなしまりと思いっきり「先(世代)」復習 してたもべやす

貧乏の食べ物は戦後直ぐの話 ほとんど見て食べられれど 若い人は 昔と 違った食べ物ばかりだったね

同時代を生きた人たち、それぞれの生き様を反映して楽しいひとときを共有しています。
君はいっぱしの家庭人
あなたはもしかしてナニワの料理人だ
私たちのレクリエーション ここに有り!!

今までやりたかったが、何とはなしに未体験だった句会。
実際に句をひねってみると想像以上に面白い。
やみつきになりそう（A）

農作業

参加者の声

土を耕して

◎土は手を加え、経年土は寝かせて 野菜を育てます。
天地返しと言う農法で土を耕すと、土の中に栄養と空気が混じり合い良い土になり、時間の経過に成ります。
植物は根が一番大事で酸素と栄養を植物全体に行きとどける役目をします。
葉と茎からは太陽光で光合成をして地球上に酸素を放出して地球温暖化の防止に一役かっています。

◎常時、土に触れることができるので 皆と一緒に作業していると、ストレス解消に成りありがたいです。

◎ヒト花センターで農作業に従事して、本当に、毎回、手をひまかけて、土をたがやし肥料、水やり、養生など、手間をかけてこそ美味しい大根、ニンジン、白菜が出来上って仲間と食べて良かったです。

ひと花センターから徒歩10分ほどの場所に有る今宮ふれあい広場。ここに畑をつくり農作業を行っています。
できた作物はメンバーとともに調理し食事をすることで孤食を防いだり、食事や健康について考えるきっかけとなったり、作物を調理して地域のお祭りに出店したりしています。

カブ

講師：NPO法人生活サポート釜ヶ崎

健康教室

月1回看護師栄養士。薬剤師などをお招きし。体の事について皆さんと考えます。お話の後は看護師による個別健康相談や血圧測定などを行います。
コーディネート：NPO法人HEALTH SUPPORT HINATA（訪問看護ステーションひなた）
常日頃の健康についてです!!

春は行楽花見と酒を飲む機会が多くなると思います。酒は百薬の長と思いますが適量に飲まないと脳が病に成りアルコール依存症に成り人生も終日にします。
アルコール依存症に成らない飲み方はありませんが、日本酒の場合一日一合～二合一週間に一日～二日の休肝日なら依存症に成る確率も低いと思います。
アルコールの害は脳にダメージを及ぼし、臓器も多大な害を及ぼします。薬物、ギャンブル、痴漢、万引も脳の病気で快楽を覚えているためでフラッシュバックを繰りかえしロボット同然の人格者に成ってゆきます。アルコール地獄からの生還
KAZU、池地

最後の健康ボケ防止について井上淳一
もうすぐ8月6日とオアセ地区となる事に気付いた。
[illegible]
[illegible]
[illegible]
今後とも宜しくお願いします。話し相手との会話を楽しむ事で脳を活性化出来ると思います。笑いヨガはCOCOカーム先生がいらっしゃいまして、ビックリ仰天ハイテクを片手にのりつっこみ、ビックリ仰天で楽しめる。
今後共宜しく　ブラボー　青春石才

看護師さんに足湯でゆっくり。

健康相談

ひと花センターを開放する日

"ひと花ゆめひろば"

ふだんは登録している方が利用するひと花センターですが、月に1度「ひと花ゆめひろば」として地域に開放する日を設けました。
この日は、どなたでもひと花センターにお越しいただけます。ゆめひろばの内容は、メンバーが自ら楽しみながら考え、皆さまを"おもてなし"します。

おじさんと子供たちと工作したり遊んだりしながら楽しい時間を過しています。

ワークショップ"読み合わせの会"のメンバーが中心に考えたお客さまに紙芝居を行っております。演じているメンバーも遠い昔の子供の時を思い出しながら演じているでしょう。お客さまも楽しんでいる様子でした。

地域のお手伝い

公園の草むしり、草刈り、道路清掃など地域から要望を受けた公共の場を きれいにする活動を行っています。その他にも地域のお祭りやイベント、小学校や保育園、学童施設の運動会や行事のお手伝いなどを行い、地域の行事に参加しています。家から外に出る一歩、地域とつながる機会をつくります。
地域の人手の必要なところ、ちょっとお手伝いが必要な場に出かけて行き、さまざまな人や地域とのつながりを作って行きます。

参加者の感想

「清掃作業に参加しました。楽しかったです。」(Fu)
「公園の草刈り、子供の里運動会準備などに、参加をさせてもらい、少しでもお役に立てたらうれしいです。」(Su)
少しでも地域の公園及び広場が清掃で皆様さんがより大くの人達が集まっていただけるように、心がけていきたいです。(Iwa)

お手伝い場所

- 荻之茶屋公園草むしり
- 花園公園草刈り
- 一本線公園草刈り
- 今宮地区清掃参加
- 荻之茶屋小学校運動会
- わかくさ保育園運動会準備
- こどもの里運動会準備
- 荻之茶屋文化祭準備
- 今宮工科高校周辺清掃

仕事体験

自転車リサイクル体験について

まずはかりたいして部品を油でそうじしてできたら油をふきとしてすてんはわっくをかけてこれを48間やすましてその後くみたてます
2日間でおわります
えしでしけんすんびをしましたでいてわと気まがきました

ご近所にあるインフォメイアプカフェココルームと自転車リサイクルプラザに仕事体験行っています。一日一名それぞれの場所でお手伝をしながら技能を身につけています

午前の時からシャッターを開け掃除準備
商店街の通をそうじ
掃き（お客様の掃き引き）
時間があればトイレそうじ
休憩は自分で

ココルーム
向かい側のバザーのお店

ひと花センタープログラムについて

ひと花センターでは、毎日いろいろなプログラムを実施してきました。
開所から9カ月間で実施したプログラム数はのべ807プログラム。

プログラムはひと花センターの内で行うもの、建物の外へ出て地域のさまざまな場所で行うもの、専門家の方に教えてもらうもの、メンバー同士が一緒に考えつくっていくものなど、幅広い内容です。
それらプログラムの企画については、ひと花プロジェクト連合体として集まった5つのNPOが、それぞれの分野の特色を生かして企画をもちよったり、外部の専門家やコーディネーターと協働することで、個々のメンバーの力を引き出す効果が生まれました。

以下のページでは平成25年度に実施した、プログラムをカテゴリーにわけ、活動報告を行います。

【表現プログラム】

ひと花センターでは、ダンス、演劇、詩、工作、美術、パントマイム、紙芝居劇、哲学など、さまざまな表現プログラムを行っています。参加者の多くは、これまでひとりで生きてきた人たちです。自分で解決を図り、乗り越えてきました。このプログラムでは、からだやこころをほぐし、素直に自分をひらいていくこと、他者との関係を豊かに耕すことを大切にしました。集中して取り組むことで新しい発見が起こりました。

講師：
岩橋由莉（出逢い）、上田假奈代（詩）、エメスズキ（ダンス）、木室陽一（パントマイム）、小手川望（リラックス体操）、田面遙華（書道）、前川紘士（美術）、松本典子（ヨガ）、三原美奈子（工作）、紙芝居劇むすび・石橋友美（紙芝居劇）、西川勝・宮本友介（哲学）、沖田都（演劇）、陸奥賢（まち歩き）

コーディネート：NPO法人こえとことばとこころの部屋（ココルーム）
西成・動物園前一番街にある喫茶店「ココルーム」とその向かいにある「カマン！メディアセンター」を運営しながら、様々なイベントやワークショップを開催。「表現と自立と仕事と社会」をテーマに活動をはじめ、アートと社会の接続点、世代や職業も飛び越えて、人々のつながりをつくる場所をめざしている。

① からだとこころをほぐすワークショップ
ゆったりとした気持ちで出会いましょう！

講師名　エメスズキ（ダンサー）
開催回数　15回

内　容
ひと花センターがオープンするにあたり、すべての利用者さんにまず体験してもらおうとはじまったプログラム。初めの頃は緊張を隠せなかった利用者のみなさんも、エメさんのやわらかな話し方と、ゆっくりと体をほぐしていくワークが進んでいくうちに、だんだんと混じり合い、笑い声やおしゃべりが現れてきた。二人・三人・四人・全員で…とグループでのワークも多く、ゆったりとした時間の中に、絶え間ないやりとりがあり、ひとりひとりのこころとからだをあたためる。

感　想
- こんな事はにがてな私ですがいつの間にか子供の様になっていて不思ギでした。耳が遠いのでも少し大きな声だといいですネ
- 日頃人との触れ合いが少ないので、楽しい時間を過ごさせて頂きました。ありがとうございました。体も何となく軽くなった気がします。
- 体とこころが気持よかったです

② 今日の「出逢い」を体験する

講師名　岩橋由莉（表現教育実践家）
開催回数　14回

内　容
ひと花センターがオープンするにあたり、すべての利用者さんにまず体験してもらおうとはじまった、もうひとつのプログラム。自己紹介にはじまり、いまの心持ちなどを自由に話す。利用者さんのこれまでの人生がどのようなものだったのか、これから何を大事に生きていきたいかなど、パーソナルなことに自然に踏み込んでいく。時には誰もしゃべらず黙ったままの時間が続くこともいとわない。ふいに笑い合ったり涙がこぼれたりしながら、一回一回を新鮮に過ごす。

感　想
- いろんな人達とあえて良かったです。
- このプログラムや他のプログラムのおかげで自分の考えが何とか言えるようになり感謝しています。
- みなさんの話をききげんきになりました。

③ あっこちゃんの会 アジール
呱々の声

講師名　西川勝（大阪大学CSCD 特任教授・哲学・看護師）、宮本友介（大阪大学CSCD）
開催回数　9回

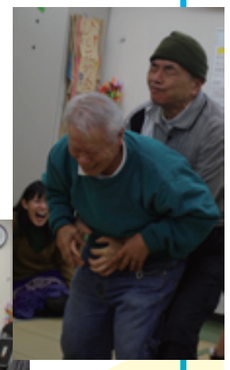
内　容
「死」「夢」「哲学とはなにか」などテーマを決めて、車座になって話す時間。テーマは集まったみなさんで決める。大きなテーマについて話すのだが、利用者さんの人生経験から、さまざまな着地点が見つかっていく。その日によって、話しの流れから、全員で歌を歌うことになる日や、食べ物や健康法について語り合う日もある。時にはテーマを決めずに、最近身近に起こった面白かったことを自由に話すこともある。哲学はどんな小さな出来事の中にも散りばめられており、集まった人で発見し合いながら、大いなる時間を共有する。大阪大学CSCDとの連携事業。

感　想
- 今日は死についてのお話でしたけど、最後はカラオケを唄って終わりました。楽しかったです。ありがとうございました。
- 今日は夢の話でしたが、夢はいつまでももっていたいものですね。
- 今日は恋の話をしました。いつものことですけど本当に聞いてくれてありがとうございました。

④ いくつになってもパントマイム！

講師名　木室陽一（舞踊家）
開催回数　8回

内　容
イメージから自分の身体と向き合う時間。パントマイムのテクニックを学ぶというよりも、イメージと身体を通したコミュニケーションにチャレンジするプログラム。例えば、「身体が粘土だったら」「地引網を引っ張る」「魚を捕まえる」「身体で円を描く」など。イメージを働かせると、自然に身体が反応することに気づかされる。また、ひとりのイメージが周りに連鎖して、いつの間にか全員でひとつの出来事を表現することへ繋がることもあり、劇的な瞬間となる。ワークを重ねるうちに、普通におしゃべりしている中で突然パントマイムが始まったり、「死にかけた経験」の雑談から「死ぬ瞬間」の表現へ発展させたりと、身体の柔軟性を高めていった。

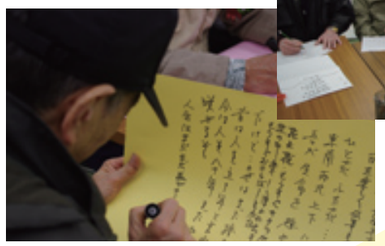


感　想
- パントマイム　3回目でなかなかむずかしいですがヤッタラおもしろかった
- パントマイム　表現力が弱いので余り皆さんに理解してもらえなかったのが心残りです。次回は表現力を増しがんばるぞ！
- 参加者の皆様、元気の良い人が多く、先生もあつかいに困るほどでは、と心配します。こりずにずっと続けてと願います。

⑤ 詩の時間
ことばにしよう、声にしよう。聴いてみよう。

講師名　上田假奈代（詩人）
開催回数　7回

内　容
集まった人で、順番に近況報告からはじめる。その後、詩をつくる。一節ずつ回して詩を紡いでいく「連詩」を作ってみたり、絵から詩をつくる「絵詩」や、二人一組になって互いを取材し、それを詩にしてみるなど、独りではなく多人数で創作していく。参加された方々の思い出や現在の思いが、詩をつくることで、独りだけのことでなくなり、予想しなかった表現へと広がりを見せる。出来上がった作品はどれもそれぞれに個性があり、一緒に過ごした思い出とともに、詩として残されていく。



感　想
- 文字を書くのがにがてで、手紙1本がやっとで詩を書くにはほどとおい事でさてどうなることやろ。
- 今日は大変楽しかったです。皆さんのすなおな気持もわかってきた様な気がします。
- 参加して非常に良かったと思う。自分の想いを思いっきりぶつける事が出来胸がスーッと致しました。仲々そういう機会が無いので有意義でした。

⑥ 書のワークショップ
カラダとココロで、“書”を書いてみましょう！

講師名　田面遙華（たづらようか）（書家）
開催回数　8回

内　容
書道に関心のある方が集まる時間。自分の筆を持ってくる方もいるなど関心の高さが伺えるプログラム。筆おろし、筆の持ち方、線のひき方からはじめる。毎回季節に因んだ文字をテーマに書いていく。黙々と書く時もあれば、わいわいとおしゃべりしながら書く時、書かずに見守るだけの人もある。最後には、今日のベスト作品を選び、先生が一言添えながら紹介。出来上がった作品は“ひと花”落款を押し、ひと花センターの壁に飾られる。

感　想
・書道ありがとう
・いやいやかきました、たのしくかきました。
・半世紀ぶりの習字。小学校時代を少し思い出しました。

⑦ ごろごろヨガ
ごろごろしながらカラダを整えよう！

講師名　松本典子
開催回数　9回

内　容
からだのつらいところ、しんどいところ、凝り固まっているところをほぐすプログラム。座ったままや寝転がっての体操。足～膝～股関節など下半身から、背中～肩～首へと上半身をほぐしていく。ヨガの色々なポーズをやってみながら、たくさん呼吸して、じんわりと身体があたたまっていく。痛いことはせず、無理のないようにゆっくりと進めていくので、いつの間にかすーっと眠りについてしまう方も多数。このような睡眠は10分間くらいの短い時間でも、身体にとって一番よい睡眠の状態をもたらし、リラックスさせてくれる。

感　想
・眠くなりましたよ。気分が落ち着いたね。このまま昼寝しよう。
・「ヨガ」と感じずに、終わったら身体がゆったり。
・体がやわらかくなった様に思います。よがをしてよかったです。

⑧ 紙芝居劇むすび
人生は75歳から　仲間とそだつ

講師名　紙芝居むすび
開催回数　2回

内　容
80歳代メンバー中心の紙芝居劇団による上演とマネージャーによるイントロダクション、観劇後には意見交換をする。上演演目は「おむすびころりん」。また、観るだけでなく実際にお面や小道具を使って演じてみることもある。イントロダクションでは、これまでの劇団活動について・劇団内のルール・仲間づくりについてなど、活動を持続させるための秘訣を、ざっくばらんにおしゃべりをする機会もあり、ひと花センターの今後の繋がりづくりに役立つ内容であった。

感　想
・演じることは快なり。世界が広がる。
・人数が一杯でいろいろな個性があり、おもしろかったです。
・1回1回、ここに来るたびに慣れてくる感じ。今日の紙芝居も少しだけど自分でできた

⑨ 工作の時間
空き箱で作ってみよう

講師名　三原美奈子（パッケージデザイナー）
開催回数　8回

内　容
空き箱や牛乳パック、お菓子についていた紐など、日常で使ったものの中から材料を持ち寄るなど、自由に工作をするプログラム。「貯金箱」や「写真フレーム」、季節にちなんで「クリスマスツリー」「節分のお面」「ひな飾り」「桜の木」を創作した。作業をはじめると、黙々と創作に耽り、ほとんどしゃべりもせずに続ける。何種類かを仕上げる人や、ひとつのものを丁寧に作り上げる人など、個性も十分に現れ、自由で愉快な作品がたくさん出来上がっている。

感　想
・何十年ぶりに小学生に戻った気分に成りました。
・気持が少しらくになりました。
・ツリーの本体が出来て飾り付けが終わるとすばらしいものになって居りました。スゴイな。

⑩ 美術の時間
描いてみよう、何ができるかな

講師名　前川紘士（美術家）
開催回数　7回

内　容
美術を通じて、自分や他者、表現というものをさまざまな角度から掘り下げて発見していくプログラム。何を描くか、どんなことをしたいか、集まった人で話をして決めていく。ひと花センターの白壁に絵を描くというアイデアが出たため、大きな紙を用意し、それにみんなで絵を描いていくことも始まる。ひとりだけで描いて完成ではなく、描いたものを隣の人に渡したり、全く違った雰囲気の絵と合体させたりなど、発想を混ぜ合わせていくことで、豊かで厚みのある作品ができあがっていく。講師に見てもらいたくて、これまで描いた作品を持ってくる人も。

感　想
- 一度も絵を描いたことがありませんでした。楽しくて且つ満足しました。
- 今日の図工の授業ははば広いテーマで今までに無い開放感で楽しい二時間でした。
- 皆さんと一緒でたのしかった！！

⑪ リラックス体操
ゆるやかなからだのうごきで、こころをひらく

講師名　小手川望
開催回数　7回

内　容
自分のからだに意識を向けて感じるためのプログラム。ストレッチや、小さな動きでからだを意識するワーク、バランスポールを使って相手に身体を支えてもらいながらバランスをとる練習などを行う。様々なワークによって、自分の心地よい位置を探っていく。また、呼吸のレッスンを行う。横になった状態で、自分の身体に空気がどのように入り、どのように出て行くのか感じてみる。終わった時には、呼吸が楽になり、身体の力が抜けた心地よい実感を得ることができた。

感　想
- 体が温かくなりました。肩がこっていました。
- ボール遊びがおもしろかった。肩揉みがきもちよかった。
- 体がリラックスするのが手に取るように判ってコンニャクになった気分。

⑫ 演劇ワークショップ
人の間にあるものは？

講師名　沖田都（俳優）
開催回数　9回

内　容
ひと花センターでは自主的に生まれた劇団があり、演劇に対して興味が高く、その基礎的な練習のためにはじまったプログラム。腹式呼吸・発声の練習・台詞の使い方・舞台の使い方についてのワークを行なう。また、これまでのいくつもの表現プログラムを経て、柔軟さと持ち前の発想力によって、即興的な創作を行う。演劇を通して自分と周りとの関係性を感じ、自分の言葉をどう使うか、相手の言葉をどう聞くかなど関係性のあり方を捉えていく。また、発表の場があれば、実際に客席の前で演じる機会となり、出演した方、関わった方々の自信へと繋がっていく。

感　想
- 言ばが聞き取りにくいと良く人に言われるので、これは役にたつと思う。
- 腹式呼吸は意識すればするほど難しいね。無意識でできればいいね。
- 芝いがうまくいくように出来るかぎり頑張って皆様と仲よくするようにしていきたいです。

⑬ 散歩の会
歩きながら考える

講師名　陸奥賢（観光家・コモンズデザイナー）
開催回数　1回

内　容
3月よりはじまった新しいプログラム。観光家であり、いくつものまち歩きプログラムを開発した講師ならではの視点で、普段から通っている道にたくさんの歴史が埋まっていることを発見する。統国寺に統一の象徴として、本物のベルリンの壁があることや四天王寺の歴史などに触れ、「こんなところがあったのか！」と驚きの連続で、たっぷり二時間を歩く。ほっとするひと時にもなり、歩きながらおしゃべりもはずむ。

感　想
- 今日の散歩の会は非常に有意義な散歩でした。ドイツのベルリンのかべに触れた事はかんげきでした。
- 近場でしょっちゅう歩いているところでも知らない所がけっこうあるものだと痛感しました。

【まとめ】

表現プログラムは、7月からスタートし、これまでに13種類のさまざまな講座を進めてきました。参加者のみなさんはこれまでの人生で、様々な経験をされてきた方々だからこそ、それだけこころとからだに多くの負担をかけている場合があります。また、ご自身の個性に知らず知らずに蓋をしていらっしゃる方もあります。自分の身体を見つめること、こころをとらえること、自由にイメージを膨らませ形にしていくこと、相手を感じ、見て、その関係性の中に自分がいることに気づくこと。からだ中心のものから、ことばを使うもの、使わないもの、手先の器用さをいかせるもの、ひらめきを形にするもの、さまざまなプログラムを用意しました。参加者のみなさんは、自分のペースに合わせて自由に選び、楽しく参加してくれたように感じます。先に参加していた方が知り合いに声をかけ、だんだん参加者数が増えていきました。みなさんが講師とのつきあいも大切にされていると感じられたので、講師の入れ替えはなるべく少なくし、講座を長く続けることにしました。また講座が終わったあとには感想カードを配り、毎回感じたことを記入していただくようにしました。最初はことばが少なかった方も、続けるうちに自分の気持ちをことばで表すことに慣れ、発語にもつながっていったように思われます。終了後に講師の感想コメントをもらうことで講座をよりよくすることに務めました。数ヶ月に一度は講師に声をかけ、スタッフとともに講師会議を開いて情報共有につとめ、ひと花センターにフィードバックしました。

このプログラムではひと花センターのスタッフやアルバイト、ボランティアも同席し、一緒に参加してもらいます。スタッフが素直に楽しんでいたり、参加者が普段話さないようなことを話す場面もあり、お互いの新しい面に出会ったり、支援する側／される側の関係がほぐれる瞬間もみられました。プログラムで盛り上がった気持ちが、みんなで片付けや掃除をしたりすることでクールダウンされたり、場への愛着となっているように思われました。場の転換・管理もみなさんの役割として定着しているようです。

最初は講師がリードしていた本プログラムは数ヶ月を経て、むしろ参加者のみなさんがダイナミックに場を作っているように感じられます。時には、みなさんのなかで気まずい出来事があったとしても、月に一回やってくる講師は巧みに空気をまぜて集中力を引き出します。気分がすっきりしたり、考えがほぐれたりして、また雰囲気が変わります。そうした積み重ねのなかで、みなさんの表情は和らぎ、笑顔が増えたようです。まるで級友のように親しく支え合いながら、ひと花センターを自分と仲間の居場所としてとらえている様子がうかがえます。

今後も新たに参加される方が増えることでしょう。風通しよく、関係性を豊かに紡ぎ、社会的つながりの実践へつないでいきたいと思います。

【体験学習プログラム】

ひと花センターでは、体験学習プログラムとして、農作業、健康教室、人づきあいの困りごとをみんなで考える会（SST）、ミシンをつかったエコバッグづくり、空手・護身術、園芸、防火訓練、お金講座、大掃除などさまざまな活動を行ってきました。

プログラムは単発のもの、毎月1回行われるもの、週に2回行われるもの、不定期に行われるものなど、それぞれにスタイルが異なり、内容も幅広くあります。

ここでは、それらプログラムのうち定期的に行われているプログラムを中心に、各プログラム講師やスタッフによる活動報告を掲載します。

農作業　講師レポート

岡井一郎（NPO法人　生活サポート釜ヶ崎）

NPO法人　生活サポート釜ヶ崎について

当法人は、2009年9月30日の設立総会の決定を受けて、大阪府に対して特定非営利活動法人（ＮＰＯ）の申請を行い、2010年2月16日にその認可が下りました。当初は、生活全般に関わる相談事業の具体化をめざし、当事者の視線にたった活動を進めることを目的として設立しました。事務所の開設に当たっては「NPO法人釜ヶ崎支援機構」や「社会福祉法人自彊館」の多大なご協力いただきました。

2010年9月に済生会の大阪府下の病院による特別清掃事業従事者健康診断が実施され、支援機構の一員として事業に参加しました。また、健康診断の結果をもとに、その中の要医療者をピックアップし、総合的・継続的にアフターフォローすることで、病気の悪化を防ぎ、野宿からぬけだし健康で安定した生活を提供することを目的とし次の3点を実施しました。

①約800人ものあいりん地域で生活する労働者や野宿生活者を対象とすること

②地域内外の複数の医療機関（無料低額診療施設）と複数のＮＰＯが連携すること

③野宿状態を維持しながらの健康相談、生活相談ではなく、野宿からぬけだし再び野宿にもどらないための生活支援を中心とした、総合的・継続的なアフターフォローを行うこと

2011年4月からは、事務所において、野宿生活をしている人や日雇労働者の方を対象に、生活全般にかかわる相談事業を行

っています。通院入院付き添い、生活保護申請のお手伝い、居宅生活者からの相談などを行いました。また、毎水曜日、西成市民館の3階会議室で健康相談会を実施しました。

その他、寝場所提供などの支援事業、居宅生活移行後の自立生活支援、居場所・生きがいづくり事業などを実施しました。同年7月からは、居場所・生きがいづくり事業として大阪狭山市で農作業を開始しました。2012年4月には、大阪狭山の農地（62平方m）が手狭になったため、地域の協力も得て山王3丁目に（32平方m）農地を借りることができました。農作物を利用して新たに「食事会」の事業を加え、月1回、相談者の居場所のひとつとしての食事会を実施しました。（2013年11月から中止）

ひと花プロジェクト（農作業）

2013年7月からは、ひと花プロジェクトに参加し、主に農作業の指導を行ってきました。

7月19日に農地の枠作りで始まり、同月23日真砂土を搬入し、天王寺動植物公園から、象の糞を提供してもらい、一部で畝作りを始め、同月31日西成区長を迎えて鍬入れ式を行い、小松菜種、干しネギ、ホーム玉ねぎ、人参、キャベツ、黒豆を植えました。

すべてに畝を作るには、耕運機が必要との結論となり、知人から借りて何とか農地らしくなりました。9月3日には、最初の収穫として小松菜を収穫しました。その後の栽培状況は、栽培記録表を参照してください。

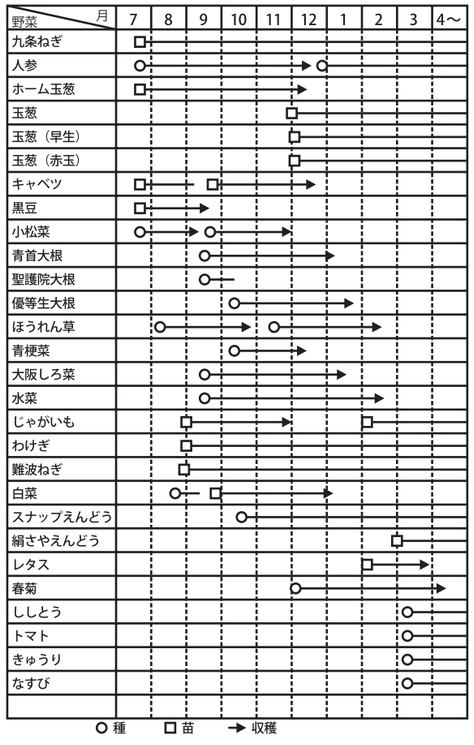
この一年間は、土作りに苦労させられましたが、少しずつですが、土壌改良を行ってきました。特に米屋さんから米ぬかの提供を受け、利用者の協力により、ボカシ肥料を作って畑に混ぜました。まだ、効果の程は、わかりませんが、今後もいろいろな方法を駆使して土壌改良を行っていきます。

9ヶ月に渡って農作業をしてきましたが、参加者の方達は鍬の使い方も少しずつ上手になり、苗の扱い方、特にポットから外すのに苦労していましたが、今では、スムーズに取り出すことができるようになり、安心して見ています。ポットを使っての苗作

りも、始めるようになりました。また、種の蒔き方については、まだ少し慣れるのに時間がかかる種類（特に種が小さい）のものも見受けられます。野菜を作る喜びは、自分達で苦労して作ったものを、美味しくいただくことであります。収穫物をみんなで料理したりして、ワイワイガヤガヤしながら食するのは、本当に楽しい時間だと感じています。収穫物を萩ノ茶屋文化祭に提供しましたが、すぐに完売となり来年は、もっとたくさんの野菜を提供できるようにみんなでがんばろうと思いました。今後は、バザー・区民まつりでも野菜の提供を行っていきたいと計画しています。また、地域の活動にも協力していきます。

4月からは、大阪府柏原市雁多尾畑（かりんどおばた）でも、農作業を始める事となりました。

栽培記録



プログラム情報
講師・コーディネート：NPO 法人生活サポート釜ヶ崎
場所：今宮ふれあいひろば（西成区萩之茶屋 3 丁目）
頻度：毎週 2 回程度
時間：1 時間程度
参加者数（のべ）：617 名
実施回数：68 回
＜感想＞
・野菜を育てて収穫することが楽しみ。外で動いている方が自分に合っている気がする。
・しろなの水洗い　手が冷たかったけど（内心鍬作業から逃げたくて）楽しかった。

健康教室　コーディネーターレポート

NPO法人HEALTH SUPPORT HINATAスタッフへのインタビューで構成

健康教室は第４水曜日13：00～15：00に健康に関するお話を、毎回異なるテーマを設定しておこなっています。

当法人は、地域福祉の推進を目的として設立し、地域住民の高齢者、障がい者等に対して、訪問看護や介護の相談、また健康づくり・見守り支援、地域住民相互のふれあいの場づくりに関する事業等を行っています。

健康教室は、前半は看護師や栄養士、薬剤師から病気を中心にしてテーマを選び、お話をしています。ひと花センターがオープンした2013年７月からスタートし、第1回目は「脱水」でした。夏だったので参加者の関心も高く「そういうことなんや」「勉強になった」という声が聞かれました。ひと花の利用者さんは、ご自身の健康に気をつけている方が多く、熱心に参加されています。テーマについてお話ししていてもその場ですぐに反応があり、ご自身の体験談や「こんなことに気をつけてる」といった健康法を披露してくれて、一方的な講義というよりは、わいわいとお喋りしながら健康への知識を深めたり、意見交換する場になっています。積極的な姿勢で参加してくださるので、担当する側もやりがいを感じ、取り組んでいます。

２回目以降は、「糖尿病」「ストレス」「アロマセラピー」「うつ病」「薬の飲み方」「食事の栄養」などをテーマとして取り上げました。ストレスや、うつ病がテーマの会では、簡易の診断チェックシートを活用しました。「自分はちょっと心配かもしれない」という結果だった場合、後半の健康相談で個別にお話して、不安に思っていることを聞く機会を設けます。また、「友だちがうつ病かもしれなくて心配なので、どんな症状か教えて欲しい」という相談もありました。ひと花スタッフの方も同席していますので、心配のある方に関して情報共有しながらサポートできればと考えています。

後半は個別に足浴をしたり、血圧測定などの健康チェック、健康アドバイスをしています。足浴は人気が高く、利用者の方も楽しみにしてくださっていると聞いていて、みなさんとコミュニケーションをしながら、関係を築く機会になっています。

血圧チェックや健康相談のときに、血圧が高かったりお腹が痛かったりと体の症状がある方には、その場で飲んでいる薬の種類や生活習慣について聞いたりして、すぐにアドバイスをすることができますが、その後に引き続きフォローしている方も何人かいます。おひとりは、ひと花に立ち寄ったときにたまたまれ違って「血圧高いのが気になっているんだけど…」と声をかけられて、病院を紹介しました。もうひとりの方は、道を歩いていて会ったときに、健康教室の看護師だということを覚えてくれていて「腎臓が悪いんだけど」という相談があったため、病院を紹介して、付き添いをしました。毎月の健康教室での関わりをきっかけにして、それ以外でも体に不安があるときには声をかけてくださる利用者さんがいらっしゃいます。

ひと花センターに通うことができる方は、生きることに対する意欲、積極性があり、健康に興味を持っています。野宿生活を長く続けている方やあいりん地域にお住まいの方で、健康相談で問題があって、病院受診を勧めても「もう俺、治療はせんでええねん」というように、治療に前向きになれないケースがままあります。しかし、ひと花センターに来ている利用者さんは、ご自身の健康管理に気を配っている方が多く「病院に行ってね」とアドバイスすれば受診してくれるので、そのあとの医療につなげやすいのです。

そして健康教室として今後の課題だと思っているのは、ひと花センターに定期的に通って来られていない利用者さんです。来られている方は、積極的な姿勢があり、健康にも気を配っていてひと花で仲間にも出会って、みなさん表情も明るくなっています。しかし、登録したものの通ってこられない方がどのように過ごしているか、健康について不安面などないか、相談を受けられる機会をつくりたいと考えています。どのように働きかけられるか、センターのスタッフの方とともに模索しています。

プログラム情報
講師・コーディネート：NPO法人 HEALTH　SUPPORT　HINATA
場所：ひと花センター　多目的室
頻度：毎月１回　第４水曜日
時間：１時間半
参加者数（のべ）：95名
実施回数：全９回
＜感想＞
- 糖尿病についての話、為に成ります。血圧も計りOKとの事。
- ストレスたまりすぎと分かり、納得です。笑えてきました。ので、まだ大丈夫なようです。

人づきあいの困りごとを考える会　講師レポート

瀧尻明子（大阪市立大学看護学科講師）

【SSTとは】

SSTとは“Social Skills Training”の略で「社会生活技能訓練」や「生活技能訓練」と呼ばれている。SSTは個人の社会的な対処技能に働きかけるものである。例えば、人に適切に挨拶したり、相手に自分の意思を伝えたり、何かを頼んだり、嫌なことを断るといった対人技能を参加者が一緒に訓練する。精神科医療の現場で用いられることの多い認知行動療法の１つで、近年その効果が認められてきているため、地域社会復帰施設、矯正施設、教育、一般企業などでも盛んに行われている。

【ひと花SSTプログラム実施の背景】

ひと花プロジェクトが始まる約１年前から、若年ホームレス経験者を対象に月に２回SSTを行っていた。毎回４～５名の参加者とともに、様々な日常の対人関係上の困り事について意見交換した。必ずしも問題を解決できるわけではないが、自分を表現する体験、話を聞いてもらい、認められる体験をする場をつくり、その場を継続することを目標の柱としていた。その結果、攻撃的な発言が目立っていた参加者からは少しずつ内省的な言葉や他者を尊重する意見が聞かれるようになった。閉じこもりがちだった別の参加者は緊張しながらも自己主張できるように変化していった。何らかの効果が期待できそうなこの活動を、高齢者にも提供したいというひと花プロジェクトの意向に従い、本プログラムが始まった。

【活動の実際】

平成25年８月より毎月隔週土曜日の16時から18時を目安に「人つきあいの困りごとをみんなで考える会」と命名して開催している。平均6.2名のひと花センターのメンバー（以下ひと花メンバー）に加え、ピアサポーター（以下ピア）としての若年ホームレス経験者、施設スタッフ、ボランティアなど総勢12～13名が参加し、様々な困り事の解決を図っている。メンバーは固定せず出入り自由とし、オープンで気楽な体制をとっている。

この会は、まずウォーミングアップから始まる。ひと花メンバーは高齢とはいえ元気な方が多く、身体を動かすゲームの人気は高い。ジェスチャーゲーム、頭の柔軟体操、サイコロトーキングなどその日のスタッフが趣向を凝らす。ピアがリーダーシップを取ることも多い。

ウォーミングアップ後は、SSTの流れやルールを毎回読み合わせる。ここでもピアが初めての参加者への説明をするなど、彼らが活躍できる場を意識的に作っている。

その後は参加者から出された困り事を取り上げて、解決に向けた話し合い（SST）をする。事前の打ち合わせが無くても、その場で「近隣住民の飼い犬への苦情を言う」「新聞の勧誘を断る」「少量の魚の処理を店員に依頼する」など、誰もが抱えそうなテーマが挙がる。ロールプレイに際して参加者は臆することなく大胆な演技を披露している。また対人関係以外の問題、例えば「スーパーでお金を遣いすぎる」「夜中のタバコ切れに困る」など、生活上直面する個人的なテーマについても皆で話し合う。参加者が自分の経験や価値観に基づいて出す意見は、当然ながら個々に異なるものであり、聞く側にとっては非常に新鮮に感じられるものも多い。逆に同じ意見であれば「みんな一緒だ」と安心感を得られる。

最後にその日の感想を言い合い、お茶やお菓子を囲んで談笑して終了。これが一連の流れである。

【今後に向けて】

ひと花メンバーの中には路上生活経験を経た方もおり、人付き合いが苦手だったり、柔軟な考え方ができず、生活のしづらさを抱えている可能性もある。そうした人々にSSTは非常に有効だと考えている。単に対人技能の向上だけでなく、世代を超えた他者との温かい交流が存在する場で自分が承認され自己効力感を得る、あるいは他者を尊重して多様性に気づき受け入れる機会となる。

またスタッフの認識にも少なからず影響していると考える。ここでのプラスの相互作用により、支援者・被支援者双方が人としてより成長していける場を維持していきたい。またセンターに足を運べない高齢者への支援のあり方も検討が必要である。

プログラム情報
講師・コーディネート：瀧尻明子（大阪市立大学看護学科講師）
場所：ひと花センター　多目的室　及び　大阪市立大学病院
頻度：毎月２回程度　だいたい第１、第３　土曜日
時間：２時間程度
参加者数（のべ）：74名
実施回数：13回
＜感想＞
- 久しぶりの困りごと相談、人にはなやみごと困りごと多かれ少なかれあると思います。一つづつかいけつしていきたいと思います。
- いろんな人と話が出来てとてもきちょうな一日でした。どうも有りがとうございました。

ミシンをつかったエコバッグづくり　講師レポート

高橋誠（ライフサポート路木）

印刷技術の発達により、昔に比べてカラフルで様々な模様の傘がつくられています。聞いた話によると、1年間に1億本もの傘がつくられ、その内の９千万本が捨てられているそうです。その廃棄された傘を活用したエコバックを作成、販売し、地域における新たな仕事づくりに取り組んでいる「ライフサポート路木（ろぎ）」があります。私が“路木”に行ったきっかけは、三角公園で「ミシンの出来る人はいませんか？」と愛徳姉妹会のシスターさんに声をかけられ、約40年前に神戸で、別誂（べつあつら）えの洋服を縫っていたので、「出来ます」とすぐに手を挙げました。それから５年６ヶ月、エコバックをつくってバザーに出店したり、愛徳姉妹会で行われていた「すそ直し」の事業を引き継いでやっています。2013年９月から「ひと花センター」でエコバック作りのプログラムを担当しています。参加者のみなさんは初めてなので、ミシンが上手く使えず苦労されていましたが、回数を重ねるたびに上達されています。一枚一枚の布が、立体的に“形”になっていくのは楽しいもので、知らず知らずに時間が経ってしまっています。

プログラム情報
講師：高橋誠（ライフサポート路木）
場所：ひと花センター　多目的室
頻度：毎月１回　水曜日
時間：2 時間
参加者数（のべ）：34 名
実施回数：全 7 回
＜感想＞
・ミシン、アイロンがけ何でも初めての経験。自分でものを作ることの楽しさをしりました。
・今日はミシンでエコバックの作り方で二日目　やっと出来上りましたただ感謝です　あり難うございました

園芸　スタッフレポート

廣谷賢（ひと花センター スタッフ）

植物を育てる楽しみは、なにも農作業で野菜を育てることに限りません。ひと花センターでは西成区の「種から育てる地域の花づくり事業」の一環で「ミニ花づくり広場」としての活動も行っています。花によって、まるで粉のような小さい種があります。購入して開封した際、袋の中に種が入ってないような錯覚さえ覚えます。そこでまず種が見当たらないとひと騒ぎが起こります。そして参加メンバーは老眼鏡をかけ震える手で、つまようじを使ってポロポロと種まきトレーに落としていきます。ざわついた場面もこのときばかりはみんな息をのみ、酸欠状態になります。そして苦労したかいがあってか発芽したときのみんなの喜びはひとしおです。今年度はあいりん寮の園芸クラブの皆さんと山王交差点のプランターに花を植えかえたり、今宮小学校の校庭に花壇を作りました。花と緑あるまちづくりを楽しみながら行っています。

プログラム情報
場所：ひと花センター 、西成区役所（西成区緑化リーダー講習受講）、今宮小学校、今宮ふれあいひろばなど
頻度：不定期
時間：1 時間～ 2 時間程度
参加者数（のべ）：48 名
実施回数：全 10 回
＜感想＞
・新世界の入口パチンコ大吉の前でプランタンに花の植かえをおしえていただきました。
・せっかくの「ひと花」なんやし花を育てたい。

空手・護身術　講師レポート

細谷憲一朗（NPO法人釜ヶ崎支援機構）

釜ヶ崎支援機構で空手道の指導を始めて約５年になります。当時は20代、30代の相談者も多く、中には腕っ節が強くまちで喧嘩をふっかけたり、利用者間で問題を起こす人が数人いました。その人たちの日頃の鬱憤のはけ口として何かないかと考えた結果が空手部を作ることでした。型の習得や呼吸法を身に付けることが、体力や気力を増進させ精神面の安定にも繋がります。また年齢に応じた稽古をすることで一生続けていくことも可能です。「ひと花センター」で空手のプログラムを担当して半年以上経ちますが、私が想像していたより、皆さん熱心に参加されています。特に護身術の稽古をしている時は、皆さん非常に生き生きとした表情になり「ああでもない、こうでもない」と熱心に研究されています。私がこれまで指導に関わってきた年齢層と違うことから逆にいろいろと学ばせていただくこともあります。月1回のプログラムで時間に限りがあるので、なかなか技の習得には至りませんが、継続することの大切さや日々のストレスの発散場所として利用していただき、いずれは一生できる型を一つでも覚えてもらえるように取り組んでいきたいと思います。

プログラム情報
講師：細谷憲一朗（NPO 法人釜ヶ崎支援機構）
場所：ひと花センター　多目的室
頻度：毎月１回　木曜日
時間：1 時間
参加者数（のべ）：26 名
実施回数：全 7 回
＜感想＞
・久しぶりの空手道いい汗をながしました。気持ち良かった。また次の回も楽しみに
・空手の動きがおぼつかない。2 回目なのに、毎回やらないとダメですね。血液の流れがよくなりました

その他

プログラム情報
防火訓練（講師：西成消防署）／ 不定期（2013 年度は 2 回）
お金講座（講師：SMBC コンシューマーファイナンス）／ 不定期（2013 年度は 1 回）
大掃除 ／ 12 月末に 1 回

【地域活動プログラム】

ひと花センターの目的の一つに、社会的につながりの薄い方々が、地域社会に参画し、生活及び社会的な自立を図っていくことがあげられます。

地域の方々のご協力もあり、多くの登録メンバーが地域社会に参画する機会を持つことができました。メンバーのみなさんからも、地域のとりくみに参加することで、日々の生活に張り合いを感じているという声を聞きます。

清掃活動

センターの活動として、地域からは、清掃や地域イベント等への参加を求める声が聞かれました。清掃活動は、萩之茶屋北公園（通称：仏現寺公園）の２周年まつりの準備として公園の草むしりを行ったのが始まりです。仏現寺公園の清掃は、以降、定期的に行っています。

山王地域では、商店街に面する南海軌道跡地の山王みどり公園のゴミや生い茂る雑草が課題でした。町会の方や公園管理者（大阪市）とも連携し定期的に清掃を行っています。

花園公園でも、雑木や雑草が生い茂り植え込みはさながらジャングルのようになっており、地域でも課題でありました。町会の方や公園管理者（大阪市）と連携し、また、釜ヶ崎支援機構が担う地域密着型就労自立支援事業と連携し清掃を行いました。今宮地域では、毎月地域の方々が清掃活動を行っていますが、11月から利用者も定期的に参加しています。

あいりん地域外ではありますが、隣接する今宮工科高校周囲の道路でも不法投棄をはじめとするゴミが問題となっており、地域の方も気にされていました。センターから近くでもあることから、毎週一回周辺の清掃活動を始めました。学校からも取組みに対し理解とお礼の言葉をいただき、ブラスバンド部の演奏会にお招きいただくなど、ほのぼのとした関係が構築されつつあります。

萩之茶屋北公園（通称：仏現寺公園）草むしり

花園公園草刈

地域のイベント

一方、地域では様々なイベントが行われています。「萩之茶屋文化祭」にはひと花センターとして参加し、屋外会場である仏現寺公園の清掃から屋内会場の設営などの準備作業を手伝いました。舞台では利用者が主体的に練習した劇を披露し、ひと花の作品展示を行い、農作業地で作った農作物やぜんざいを作って販売しました。

廣田神社のお祭りでは、神輿の引き回しをフォローする大人が年々少なくなり困っているという事情もあり、利用者とともにお手伝いしました。

年末から年始に、今宮地区で、まちを電飾で飾るイベント「イマナリエ」が開催されましたが、ふれあい広場の農作業地周りの電飾設置などを担うことができました。

学校などの行事でも、今宮小学校、萩之茶屋小学校、わかくさ保育園、こどもの里などの運動会にむけての準備や清掃、そして運動会などにご招待していただきました。

そのほか「覚せい剤撲滅パレード」への参加。三徳寮のコンサート、こどもの里のクリスマス会をはじめとした地域の祭りなど色々なイベントにお招きいただきました。

こども大運動会にて、借り物競走

こどもの里クリスマス会サンタ役

花づくり

区では、「種から育てる地域の花づくり事業」で花づくりの活動を行っていますが、ひと花センターもミニ花づくり広場としてその一端を担うことになりました。育てられた花の苗を農作業地のあるふれあい広場で預かり、山王交差点のプランターにあいりん寮の方とも連携して植え付けたり、今宮小学校の花壇への植え付けも行いました。

ゆめひろば

一方、地域の方々はひと花センターってどんなところ？何をしてるの？と思っていると聞きました。そこで地域の方々にセンターを開放する「ひと花ゆめひろば」を開催することとしました。利用者自らが企画し、どんな内容にするか事前に何回も会議を開いて話し合いで決め、準備も主体的に取り組みました。各町会をはじめ学校や保育所、市民館などの施設、各機関にもご案内しました。訪問していただいた方は決して大勢ではありませんが、近所の方が毎月来てくださるなど、徐々に地域に根差したものになっていると実感しています。３月には通常1日だったゆめひろばを1週間連続で行う「オープンウィーク」を実施し、普段のセンターを体験してもらうように工夫しました。

覚せい剤撲滅パレード

ひと花ゆめひろば

自発的な参画

そのほかにも、地域の高齢者が主要メンバーである紙芝居劇団の公演活動にメンバーが主体的に参加したり、町会で行っている囲碁の会に参加するようになったり、地域で暮らす身寄りのない人たちを見守る活動にも参加するなど、色々な角度で地域や社会とのつながりが構築されつつあります。引き続き地域活動を進め、自発的に地域社会に参画していくことができるような機会を今後も増やしていくこと、またメンバーの力を借りながら、地域がよりよいものになっていくような取組みを目指していきます。

平成25年度　地域活動（主なもの）

清掃活動など	地域のイベントなど	その他
萩之茶屋北公園（仏現寺公園） 花園公園 山王みどり公園 今宮げんきかーい 今宮工科高校周辺 今宮小学校	萩之茶屋北公園開園２周年 こどもたちと遊ぼう会 廣田神社お祭り（神輿の引き回し） 萩之茶屋小学校運動会 わかくさ保育園運動会 花園公園農作業 覚せい剤撲滅パレード こどもの里運動会 イマナリエ 萩之茶屋文化際	ひと花ゆめひろば（地域開放日） 三徳寮コンサート わたなべ歯科診療所クリスマス会 こどもの里クリスマス会 門松づくり（区役所等へ提供） 今宮フェスタ（今宮小学校）

【レクリエーション】

ひと花センターでは、さまざまな講師の方々とプログラムを実施していますが、スタッフと登録メンバーを中心にゆるやかに行うプログラムも実施しています。

「センターに足を運ぶきっかけに」ということを中心に、登録面談や普段の関わりのなかでみなさんの希望や趣味、日課をプログラムに反映しました。

お話を聞くと「昔の映画を見るのが好き」「散歩をするのが日課」「歌を歌うのが好き」「囲碁・将棋をよくする」「こどもと一緒にあそべるようになりたい」など、みなさんからいろいろな声があがりました。

― メンバーの声をプログラムに ―

映画

映画が見たいというリクエストに対しては、多目的室にスクリーンを設置しパイプ椅子で客席をつくり、「ひと花映画館」と題してさまざまな映画を上映しました。話すことが苦手でも「映画を見るだけだったら…」と来所する方もおられ、毎週1本の映画を上映してきました。映画からかつての思い出話が盛り上り、「次はこんな映画が見たい!」とリクエストが次々上がります。メンバーの生きた時代をスタッフやボランティアに来た若い世代も知るきっかけになるなど、世代を超えた交流の場になっています。

[感想]
・最近映画を見ていないのでおぼえていないですが、見ているうちに少しは思い出したところもあり楽しかったです。

ひと花映画館

散歩

「散歩をするのが日課」「散歩がしたい」というリクエストに対しては、みんなで歩く「散歩の会」を月に1回実施することにしました。だいたい2時間程度のコースで天王寺・山王界隈、天下茶屋界隈、今宮方面など近場の名所をゆっくりとしたペースで歩きました。普段は一人で散歩をすることが多いみなさんですが、大人数で歩くと、昔の思い出話が始まったり、その場所にまつわる歌を歌う人が現れたり、自然と関わりが深まりました。3月の1回は散歩プロデューサー陸奥さんを迎え表現プログラムとして実施しました。

[感想]
・西成の歴史を見てかんど（感動）しました。
・毎回散歩で新しい大阪の歴史を発見して大へんべんきょうになりました。散歩の回をもっと増やして欲しいと思います。

散歩の会

カラオケ

「歌が好き」という要望にどう答えていくか考えていたところ、登録メンバーの方から提案があり、釜ヶ崎夏祭りの「のど自慢」でアコーディオンをひいている杉本好弘さんに協力をお願いしようということになりました。そしてスタートしたのが、月一回のアコーディオン生伴奏つき「カラオケの時間」です。大きな声でなつかしのメロディーが響く1時間半は、古き良き時代にタイムスリップしたような雰囲気になります。カラオケ居酒屋に行かなくても歌えて、アルコールがなくてもたのしめる、貴重な場となっています。

カラオケの時間

[感想]
・古きなつかしい時代のうたで青春時代にかえた（返った）様でした
・今日は精いっぱい歌いました　スカっとしました　有難う御座居ました。

カラオケの時間

その他

みんなでおりがみをする「おりがみ同好会」、季節のことばで俳句をつくる「ひと花句会」、囲碁将棋をする日（毎週土曜日）、みんなで絵本を読み合わせる「絵本の読み合わせ会」、利用の少ない女性メンバーの居場所づくりとしての「女性のお茶会」、一発芸を発表し合う「さちの会」などさまざまなプログラムを行ってきました。

[感想]
・66才にして発句初体験。永き人世を送りながら思えば未経験のことの何と多き事か
・えほんをめくるのが大辺（大変）でよみあわせに時間がかかりたいへんでした。でも楽しく過ごしました。

おりがみ同好会

ひと花カフェ

ひと花センターに登録している方のほとんどは、単身で小さなアパートに住んでおられます。高齢かつ登録者の9割以上が男性で、もちろん自炊している方もおられますが、自分の部屋に台所設備がなく、3食すべてお弁当やカップラーメンという方も少なくありません。野菜やくだものを摂る機会が非常に少なく、食生活が偏りがちなうえに、ほとんど一人で食べているのが現状。

そのため毎週1回みんなで料理をつくって食べる会「ひと花カフェ」を行っています。初めは、つくるのが簡単な「ホットケーキ」や「白玉ぜんざい」「クレープ」「たこやき」などのおやつ系からスタートし、慣れてくると「ご飯が食べたい!」という声があがるようになり、「カレーライス」「ハンバーグ」などのご飯ものをつくるようになりました。

農作業で野菜が収穫できるようになると、自分たちでつくった野菜を使ってさまざまな料理に挑戦。一番人気メニューはカレーライス。今はつくるだけではなく、メニューを話し合って決めるところから、材料の買い出しやレシピ書きまでも登録メンバー中心で行うようになりました。

「みんなで食べると本当においしい」「1ヵ月分の野菜をここで食べている」という声が聞かれます。一方、歯がないために「噛めない」という声や、病気のために食べられないなど「年齢を重ねることと食」について考えさせられることの多いプログラムでした。

[感想]
・朝から食欲無かったですが、美味しく食べられました。
・ひと花カフェでつくてみて、ばん（晩）のおかずをつくります。

プログラム開催回数：142回
参加者数：1180人（のべ）

ひと花カフェ

【就業体験】

2014年2月、3月とひと花センター近くにある、2つの場所で就業体験を行いました。
登録しているメンバーのみなさんは65歳以上ですが、まだ仕事をしたい、技術を身につけたい、誰かや何かの役に立ちたいという意欲をもっている方がたくさんいらっしゃいます。仕事の体験を通じ様々な人や地域がつながり合う機会として、また元気なみなさんの力をお借りする場として、就業体験プログラムを企画ました。

本年度の就業体験受け入れ先は、ひと花プロジェクト連合体内の2つの組織、NPO法人こえとことばとこころの部屋、NPO法人釜ヶ崎支援機構自転車リサイクルプラザで行うこととし、それぞれの組織と受け入れについて話し合いを行いました。元気でやる気があるとは言え、みなさん65歳以上。体力面は大丈夫か、プログラムの仕組みを理解してもらえるかなどわからないことばかりでした。まずは受入先のみなさんに相談に乗っていただき、内容、受入人数、日程などを整理していきました。

次に、このプログラムに興味のあるメンバーで、体験受け入れ先へ訪問し、実際に体験の場を見学。各場所での仕事内容や注意点を伺い、メンバーはそれぞれ自分の興味関心や得意分野、体力や予定などを考慮して、体験場所と日程を選び参加しました。体験後には、毎回必ず感想文を書き、一日の振り返りをします。

みなさん、初めて体験へ行くまではとても不安な表情ですが、終わってセンターに戻ってくると晴れやかな表情で、「バザーでたくさんの品物を売った」「自転車が完成した！」など、いろいろな話を楽しそうにされます。

今後は、体験先をひろげ、プロジェクト連合体以外の組織でも体験を行っていきたいと考えています。また体験から就労へつなぐ経路も模索していきたいと考えています。

就業体験スケジュール：　2013年1月　体験先見学会
2013年2月～3月　体験実施

NPO法人　こえとことばとこころの部屋

受け入れ態勢：　毎日　10：00～14：00（うち1時間昼食）　1日1名の受け入れ
内容：　開店準備、バザー品出し、掃除、買い物、発送作業、バザー・カフェ接客、バザー品の整理、カフェ皿洗い・米炊きなど
受け入れ人数/受け入れ日数：　7名/46日間
受け入れをしての感想：　当法人では、ほぼ毎日インフォショップ・カフェ・ココルームと、カマン！メディアセンター（カマメ）をオープンしています。就業体験に来られた方にはカフェ周辺の商店街清掃や、バザーの品出しなど、日々の運営に関わる仕事をお願いしています。バザーは毎日大量の荷物を出し入れする力仕事ですが、元気に手伝っていただき、掃除や洗い物などの手順も覚えて、積極的にお仕事してくださいます。単身で住んでいる方が多い地域なので、バザーやカフェにくるお客さんとの会話も大事な仕事ですが、接客のときには、声かけいただいたり、時にはしっかりと話を聞いていただくなど、地域の方とも良いコミュニケーションが生まれています。
体験しての感想：　こんな商店で物を売るなんて初めてでしたが、なんでもけいけんする事もよい事だと感じました。昼の食事も大変おいしかったです。

NPO法人　釜ヶ崎支援機構自転車リサイクルプラザ

受け入れ態勢：　月曜日～土曜日(連続)　13：30～16：30　1日1名の受け入れ
内容：　自転車分解 → 各部品磨き → 部品塗装 → タイヤチューブ確認 → 車輪磨き → 自転車組み立て → 点検 → 完成
受け入れ人数/受け入れ日数：　5名/29日間
受入をしてひと言：　自転車リサイクル就業体験にこられた方は、みなさん「出来るやろうか？」と最初は自信なさげに始められますが、部品を1つ1つ分解していき、完全にバラバラになった時には、「こんなところまで分解したのは初めてや」とか、「自転車てこんだけの部品で出来てたんや」などと興味をもたれ、次の磨きで自転車がピカピカになり、そして慎重に組立を行い完成すると、「ひと花センターのスタッフに見せてくる」とか、「この自転車、自分で乗ろかな」と自転車ができた達成感やうれしさが伝わってきました。6日間の就労体験では、全部を覚えることは難しいので、体調やスケジュールを調整してまた参加してほしいです。
体験しての感想：　6日間がんばりました。手は油まみれ、自転車はキレイにできました。2/3～8まででカンセイしました。

【金銭管理・服薬サポート】

金銭管理

あいりん地域に暮らし単身高齢で生活保護を受給している方の多くは、身近に自分のことを支えてくれる家族がいません。そのため、毎日の生活にとって欠かすことのできない生活費の管理、家賃や水光熱費の支払い、銀行での引き落としや通帳・印鑑の管理など、こまごまとしたお金の諸手続きをすべて自分で行うことになります。しかし、加齢に伴う認知症の発症や病気の悪化などさまざまな状況の中で、自ら金銭の管理を行うことが難しくなることも少なくありません。

また、路上での生活から生活保護を受給するようになった場合、今まで路上生活では必要とされなかった金銭の管理、各種手続きなどを自ら行う必要が出てきます。しかし、長年それらを行うことなく年齢を重ねた場合、手続きや管理を1人で行うことが難しく、くらしが立ち行かなくなることもあります。

上記のような状況では、詐欺や貧困ビジネスに利用されたり、知人に保護費を搾取されたり、生活費の管理がうまくできずお金を借りる癖がついてしまったり、通帳や銀行印をたびたび紛失してしまうなど、さまざまな困難に直面することがあります。孤立し、周囲にサポーターがいない場合は、トラブルについて相談できるつながりがないことから問題がより深刻になります。

ひと花センターでは、自身での金銭管理に不安がある方や、大きな不安はなくとも生活のリズムをつくりたい方など、要望に応じて生活保護費をお預かりする金銭管理の取組みも行っています。内容は、一緒に計画を立て金銭の預かりと返金を行うこと、毎月の引き落としや支払いのサポート、通帳や印鑑の管理などです。

実際にどういったケースがあるか、右ページ上にひと花センターで行われた金銭管理の一部を紹介します。

金銭管理は生活に直結する業務であり、互いに信頼関係がなければ行うことができません。返金の金額、返金の周期、どの程度までサポートを行うかなどをよく話し合って決めていきます。本プロジェクトを通じて、ハードとしての「居場所」があり、つながりづくりの拠点を持つ事業の中で金銭管理を行うことには大きなメリットがあると感じるようになりました。

そのひとつは、金銭を預ける人がスタッフや講師・ボランティアや他の登録メンバーとの関わり中で、事業に信頼感をもち、緊張がほぐれてから金銭管理をスタートすることができる点です。ひと花センターは「金銭管理だけをする場所」ではないため、なにげない日常のおしゃべりを基礎にしながら、あくまで関係づくりをベースに徐々に暮らしのサポートをスタートすることができます。また、つながりづくりという抽象的な目的をもつ事業であるため、たとえば「就労支援事業＝働く場につなぐ」というような明確な目的・目標と達成期限がなく、自らの変化に応じて「預けてみたい」と思ったときに金銭の管理をはじめることができる時間的な緩やかさがあります。メンバーの中には、当初金銭の管理に不安を感じていた方でも、他者との関わりやつながりの中で、生活を安定させていきたいと思うようになり、金銭管理を始められた方もいます。また、金銭管理をサポートする側も、居場所やプログラムで日常的に情報交換をしていることで、金銭管理に関わる以外の情報も得ることができます。金銭の管理を行う前、または始めた後にも、一人一人に合ったサポートを考える手がかりを多く得ることができ、一緒に計画を練る作業に安心感をもって取り組むことができます。

一方であいりん地域の単身高齢者の生活においては、金銭の管理のみを行えば暮らしが安定するという事例はそれほど多くありません。前述したように、金銭の管理に不安を抱える方の中には、アルコールやギャンブルへの依存傾向、認知症の初期症状、病気を抱えている、障がいがあるなど、金銭の管理だけを行えばすべてが解決するという状況ではないことも多くあります。関わりの中で見えてきた複合的な課題に対し、医療や介護につなぐ・相談機関や行政と連携をとる、地域のさまざまな支援機関と情報交換をするなど多面的なサポートが必要になります。

一方、専門家だけにつなげば暮らしがよいものになるのかというと、そうではないということも事業を通してわかってきました。怪我をしたときに心配してくれる人がそばにいる、最近顔を見ないからと知人が家を訪ねて来てくれる、なんだか気分が晴れないときにもまちに出れば「おはよう」と声がかかる。既存の制度や枠組みではフォローしきれない日常の細やかな支え合いがあってこそ、専門機関の専門性が生かされ、いざというときのサポートができると感じています。

ベースとなる安心感がない状態では、たとえ専門機関につないでも、ささいなことでそのつながりが途切れてしまうことも多くあります。切れ目のない編み目の関係づくりにおいて、ひと花プロジェクトのような「つながりづくり」をベースにした事業の価値があると実感しています。

金銭管理　ケース例

Aさん
理　由：保護費が入金されると月初に使いすぎてしまうため、月末の食費を預けておきたい。
返　金：本人の必要に応じて返金
預かり：現金のみ預かり
その他：家賃・水光熱費の支払いサポートはなし

Bさん
理　由：路上生活から生活保護受給へ。金銭の管理全般をお願いしたい。
返　金：毎週1回返金
預かり：現金、銀行印、通帳預かり
その他：家賃・水光熱費の支払いサポート

Cさん
理　由：たびたび通帳、印鑑、現金の入ったバックを紛失。不安なため預かってほしい。
返　金：毎週1回返金
預かり：現金、銀行印、通帳預かり
その他：家賃・水光熱費の支払いは自身で行いたいとの希望から本人が行う。

服薬サポート

服薬のサポートは当初より本事業の業務のひとつでしたが、2013年度の希望者はゼロという状況でした。その原因のひとつとして、事業対象者を基本的に介護事業など他のサポートにつながらず、地域で孤立している方、としたことが考えられます。登録時にはすでに自身で薬の管理をしておられる方や、薬を飲んでいない状態の方がほとんどでした。登録後に服薬のサポートが必要になったようなケースでも、サポートが必要になった時点ですでに自らひと花センターまで来所することが難しい状態で、訪問看護のサポートを受け自宅で服薬の管理を看護師から受けていたため、本事業での服薬のサポートを利用する機会はありませんでした。

さらにもうひとつの原因として、事業の枠組みの問題があります。ひと花プロジェクトは医療や看護を行う専門機関ではないため、業務として行うことができるのは登録メンバーの方が薬を飲んだり薬を塗布したりすることを「見守る」、いわゆる「見守り支援」のみです。そのため、服薬サポートに登録した場合、その方には服薬の時間になったらひと花センターまで来ていただき、スタッフの見ている前でご自身で薬を飲んだり塗ったりすることになります。しかし、決まった時間にひと花センターまで来られる方であれば自宅で自分でも薬を飲むことが可能な事がほとんどです。また服薬は朝・昼・夕食後など一日何度も必要な場合が多く、365日、一日に何度もセンターに通う、もしくは長時間センターに居るということが必要になりますが、そのような状態は現実的ではありません。上記のような現状の中、服薬のサポートはアパートやマンションなど「暮らしの場」で行うことが有効であるとともに、居住空間から離れた別の場所で行うということの難しさを実感しました。

今後事業の改善とともに、専門機関やアパートなど服薬管理を実際に行っている現場と連携をとり、服薬管理の補助的役割を担っていくことで、メンバーのサポートを行っていくことができればと考えています。

ひと花座談会「あっこちゃんの会」

第1回　おしゃべり紹介！　2013.7.9

編集・構成　宮本友介（大阪大学CSCD）

表現プログラムのひとつとして、毎月1回行ってきた「あっこちゃんの会」（詳細は表現プログラムページへ）。
そのおしゃべりの内容の一部を掲載します。

アルファベット：　ひと花センター登録メンバー。この日は5名が参加。
西川：西川勝。あっこちゃんの会のマスター。大阪大学コミュニケーションデザインセンター特任教授。
オ：　オブザーバー。ひと花センター登録メンバーではなく、外部から見学や体験などにやってきた方。
この日は若い男性2名がオブザーバーとして参加。

あっこちゃんの謎

西川　この「あっこちゃん」の謎なんですけども。「アジール呱々（ここ）の声」って言ってもわけわかんないから誰も来ないだろうっていうことで。あっこちゃんの会って言ったら何かいいことがありそうな気がしません？（笑）
呱々の声っていうのは産声のことですけど、何かものすごく立派な人の話を要約するんじゃなくて、今ここで考えたこと、生まれたことが大事やって思っています。どこかで勉強してきて、それを相手が誰であろうと同じようにしゃべるというのが、いわゆる先生と呼ばれてる人たちです。そうじゃなくて、人の前で今話し合ってる中で、何か自分の中に沸いてきた思いとか考えたこととかを、全部が全部、周りに理解されなくてもいいんです。オギャアオギャアなんて最初のうち分からへんのですから。でも、オギャアオギャアという言葉も声も、一緒にいてる間に「これお腹空いてるのかな」「これおしめが濡れてんのかな」みたいな形で徐々に分かり合っていく。そういう人間関係が一番最初、みんなそうなんです。最初は呱々の声から始まってるわけで。僕なんかよりずっと年上の方ばっかりですけど、こういう新しい場所で新しい人間関係をつくるときには、今までのことはいったん置いといて。今ここで初めて感じることやとか、思うことなんかをですね、それなりにしゃべってみる。いきなり最初はわからなくていい。オギャアオギャアですから。でもオギャアオギャアっていうのを言い合ってるうちに、何か面白い隠れ家的な、素敵な仲間ができればいいなっていう、まあそういう気持ちで付けた会の名前です。
ずいぶん長くなりましたが、どうしましょう。皆さん、ここはどんなところかなあって思って来られたのか、ちらっと聞かしてもらえますか？

話すこと・聞くこと

Aさん　私は歳も七十。ここ来たらどうしても幼稚園の子どものお遊戯みたいで。この間も体操みたいなのをしたんですけど、バツ悪いし。喜怒哀楽を上手に表現すりゃあ、友達もできる。もめたりケンカしたりも話して分かる。でも年取るとどうしても頑固おやじになってしまう。

Bさん　お互いの言葉通じるの難しいんよね。初めて皆さんと顔合わしたときね、何から言っていいか…。お互いの心と心と触れ合わんと、うまくいかんし。だから一回、お互いの顔を合わせて。人っていろいろおるでしょう。考えることも違うし。

Cさん　今日ぼくがここに来たのは、聞き上手になりたいなと思って来ました。昔から付き合いのある社長さん、その会社が倒産したんですけどね、携帯電話をプレゼントしてくれて。仕事の話でもあるのかなと思ったら、何回掛かってきても愚痴なんですよ。昔はよかったなあとか、そういう話ばっかり。夜中に掛かってきてね、30分も40分も話してるわけですよ。僕としたら、最初のうちは、「今更言うてもしゃあないやないか」っていう気持ちがあったんですね。でも、僕も一人になって、話し相手もいなくなるいうのがわかってて、それじゃまずいなあって。元社長さんが電話かけてくる意味が段々分かってきたわけですね。それで、話し上手じゃなくて聞き上手になりたいので、参加させてもらいました。

西川　毎日掛けてくれるのは、ちゃんと聞いてくれるからじゃないですか。

Aさん　頼りにしてるんだよ。

Cさん　話変わりますけど、昔、母親がパーキンソン病で4年くらい、下の始末までして、介護してたことがあるんですよ。そのときに、聞いてやるということができなかったんですね…。生活も荒れる、家のローンもある。もう、うわーとなって。素直な気持ちで聞いてやれないんですね。今は良くなってるんですね。テレビとかでみたんですが、（※）痴呆になった方の介護しながら、訳が分からないこと言われてるんやけど、うなずいて聞いている。今振り返って、その当時にそうありたかったですよ。それでまあ、さっきの話に戻りますけど、社長さんの愚痴を聞いているうちに、聞き上手になりたいなあということで。

西川　ええ話でした…。

Cさん　すみません、自分勝手なことばかり言いまして。

西川　まぁ、ちらちらっと話を聞いてみて、どんな話をしようかな。みんなで一番考えたいことをできるだけみんなで考えるのがいいかな。

Bさん　「どういう生き方をしてみたらいい」と思います？

Cさん　これから先ね。僕らも考えることあります。

Dさん　死に方？死に方がどうなるんかな？墓も何もない状態やしね。

西川　生き方、死に方ね。どうです？…ちょっと若者にも聞いてみよう。

Bさん　みなさん若いから、今すぐにってことは。僕らもう生命力ないですからね、帰って寝て、テレビみて。

Cさん　誰にも看取られずにここで死ぬのかな…って考えますからね。

Bさん　みなさんは、まだ考えないですよね。

Cさん　その歳でそんなん考えしとったらおかしいよね。（笑）

西川　「自分はまだ死なない」って思ってますか？

オ　いや、でも僕は自分自身で「死ぬかな」っていうの経験が何回かあったんで…。ただ、いつも考えているわけではないですけど。ちょっとしんみりした話になりますけど、僕、ちょっとしたことがきっかけで、お腹を刺されたんですよ。で、まったく同じ日に、人を助けようとして強盗に腹刺されたという事件が起こって。運ばれた病院は違うんですけど、その方は人を助けようとして、僕より傷が浅いのに亡くなってしまったんです。自分はただ単に酒飲んで楽しむために浮かれてたときだったのに…。そのときに看護師さんに「あんたこのままでええと思ってる？」みたいなこと言われて。それで、僕は夜寝る前に「あー、今日は一日楽しかったなー」って思える生き方をしていきたいなと思ってます。

生活保護について

Cさん　僕らの場合、楽しみのエリアが小さいからね。遊ぶにしても体はついてこない、お金は続かない。どうしてもそうなりますからね。そうすると、今日は良かったなーって思えることは無くなってきますよね、必然的に。

西川　どんなことが一番無くなってきたんですか？

Cさん　うーん…。一番というのは、僕自身では生活保護を受けるようになったときですね。最後の扉を開けてしまったな、という気持ちはあったんですね。これから先開ける扉があったら、もう死ぬ時だけやって。そういう感覚になってしまったことかな。もう他に新しい仕事してどうのこうのっていう気持ちも無くなるし、開ける扉のない部屋に入ってしまったなという気があったんです、生活保護を受給するようになったときに。それまでには、まだ生活保護を受けるような身勝手なこと考えてたらあかんっていう気持ちがあって…。手続きしてなかったんですね。で、もうとことんダメになって、生活保護の手続きをしたときに、僕はそういう考えになりましたね。

西川　誰かに言われたりしましたか？そういう「最後の扉ですよ」って…。

Cさん　いやいや、人からは言われたことはない。いままでずっと、2年半くらいホームレスしてて、職務質問されたときに警察官の人が「なぜ生活保護を受けないのですか」という話をして。だけど僕は、自分勝手な生き方をしてきて…。まあ、月2万くらいありましたから、なんとか食べていけると。体の動くうちは申請する気はないんですいう話はしたんですけど。考え過ぎやと言われたらそうなんでしょうけど、一本のその線があったから生きているってね。

西川　そこからいろんな楽しみが消えていったんですか？

Cさん　そうですね。もう、先に夢をみないと、勝手に決めましたね、できないって。何かするにあたって、やる以上は生活保護を受けてたら悪い。仕事をするにあたっても、以前は1万5、6千円（1日）もらってましたよね。ちょっと働けば、生活保護を切られるんじゃないかと。そうなるとその仕事が続くという保証もありませんし、体力が続くかどうかも分かりません。それじゃ生活保護が切れたら困る。やめとこかという形になるんですね。僕らが偉そうにいうたら悪いですけど、働いて、生活保護を申請して一回受け取って、たとえば誰もいない時の弔電にするとか、遠いところからお骨をもらいにこられる方の旅費にするとかいった形で預かってもらったら、少しは考え方が変わるんじゃないですかね。

西川　自分で自分の稼ぎをしっかり持っているときには、いろんな夢も持てるし、可能性みたいなのも考えられるし、いろんなことで楽しんでいられるけど、それがないのにそう思えるか、どうですかね。

Dさん　63、4歳くらいまで普通に仕事できたんですけど、ある時から一気に体力が落ちてきて、体がしんどくなってしまい、いままでやってたことができなくなってきた。私、ちょっと蒸発してきた人間なんですけどね。30歳くらいで蒸発して、10年くらい神戸で港の仕事をしとって、いろいろ資格取るのに身分保証が要

るから、それがとれないもんだから西成へ逃げてきて、ここはあいりんセンターに立っとけば仕事いけるからね。20年くらいかな、立ちんぼと言うんかな、日雇い仕事して、63歳くらいまではできてたんですよ。お金をちょっと受け取って、後のことなんか全然考えてなかったね。働けなくなったらどうしよう、なんて。
65歳になったら、なんにも仕事に行かれへんし…。困ったなぁと。ちょうどそのころ、65歳を過ぎた人は申請すれば生活保護をくれると。それまでもわたしたちのころは、大変でしたからね。いろいろ証明もっていって、職安も10回以上通ってね、血圧が高い持病だからあちこち全部落とされて。それで、なんとか生活保護をもらえるようになって。それで、さっきおっしゃったようにね、生活保護もらって恥ずかしいとか深く考える余裕なくて助かったなぁ、と。自分の楽しみが無くなるなんてことなかったですね。その後、いろいろ生活を切り詰めて。そしたら結構余裕が出てくるものですね。ですから、いろいろテリトリーが増える、カメラ買ったりとか。いろんな不安もありますけどね。

西川　保証がないということと、楽しみがないということが、一緒にはなっていなかったと。

Dさん　せっかく生活保護もらって遊ばしてもらっとるんだから、なんかボランティアとか、おこがましいけれども、人の役に立つことをしたいなと思うてはいるんです。

西川　まあ同じような考え方ですね。別に自分の金にするために働くんじゃなく…。

Dさん　うん、人のためになって、お金にできたらいいんだけどね。

仕事について

西川　やっぱり仕事っていうのは、結構楽しみの根っこにあるのかな？

Bさん　仕事っていうのは、やっぱりありますね。うん、楽しい。俺、去年の9月まで、72歳までやっとったもんね。もうやめとけやめとけ言われたけど。面白い。でも考えることに体がついていかないといけない。俺、いままで習ったこと頭に入っているけれども、体がついていかない。若い子には教えるけどもね。

オ　今、居酒屋でバイトしてるんですけど、夕方5時から朝4時までで…。自分はボランティア活動とかアートを使ったワークショップに興味があって、いま少しずつ活動を始めているんですけど、仕事をしているとそっちに力が注げないなというのがあって、辞めたいなと思っているんですが。仕事が楽しいというふうに、イマイチ思えていない…。

Aさん　これっちゅう、飯食うのも忘れるほど惚れ込む仕事がまだ見つかってないんやな。

Bさん　まだ、これからや、ね。まだこれから、勉強やと思って…。

Dさん　継続してね、嫌なことでも、ずーっと一つのことを続けてやってたら、50、60歳になって、この仕事やっとって良かったな、誰にもこの仕事やったら負けん、そうなったら楽しくなるわ。

Cさん　そうですね、何事も一生懸命やるのがいいんじゃないですか。勉強も仕事も遊びも、悪さも。すべて一生懸命やらな、人間て面白くないんとちゃいますか。僕ら若い頃そうやって生きてきましたもん。

Dさん　わしら若い頃ね、選んどられんかったもん。何でもやらなあかんかった。今みたいに、何でもある時代じゃなかった。好きなことやれたら一番だと思うけどね。

Aさん　そら仕事に惚れてほしい。

Cさん　僕なんか、鉄骨とか造船とか、鉄ばかりいじって40何年。鉄は人間と違って、叩いても、穴開けても痛いと言わない。鉄板を溶接するにも、「この鉄板とくっつくのイヤや」なんて言わない。人間は言いますからね。あの子はイヤやとか…。

西川　あー、言いますよね。一緒になったくせに「イヤや」言いますもんね。

Cさん　そうそう。僕らの場合は、もの言わない物とずっと40年以上…。一番最初に建てたビルが、桜橋の南西側にある東洋ビル。それが、銘板みたら昭和40年ってなってましたからね。

西川　そういう仕事がまだ、今でも行けば見れるわけなんですね。僕は看護師でしたから…世話した患者は、もうまわりにいません。きれいに消えてなくなるからね。（笑）

Cさん　うん、僕は20年近く、国鉄の時代から、JRの仕事してきましたんで。電車で走ると、この駅もやったなぁ、このホームもやったなぁっていうのが出てくるんです。それが楽しいんですね。それと同じ気持ちを、さっき話した社長さんが残してはるんですね。ですから、聞いてやるべきだなと。夜中に電話かかってきて、くーっと思いながらも、「うんそやな、よかったな」と。やっと最近です、相づちが打てるようになったのは。
だから、僕が母親の介護することになったときでも…。パーキンソン病で歩行困難になった頃はまだ良かったんですよ。それから（※）痴呆になって、訳のわからんこと言い出して。病院は受け入れてくれない。ちょうどバブルはじけて仕事がなくなるし、自分のこと考える以前に生活が成り立っていかんかったんです。その当時、奈良にパーキンソン病のパイオニアの先生がおられまして、その先生に母親の状態を日記に書いてくださいと言われたんです。でも、それを書く時間があったら、図面の1枚でも描けば1万2、3千円になるから、夜中も寝ずに図面を描きますよね。朝起きてごはん食べさせて、あとはヘルパーさんに頼んで、っていう形になってきて、なんだかんだと自分が追いつめられて、終いには暴言吐いてましたね。「死ね」なんて言うてました。今思えば情けないなぁと思うんですけど、そのときはもう精一杯でした。近所の人にもそういう言葉が聞こえるんですね。「にいちゃん、あんなんいうたらあかんよ」って言われても、どうしようもないんです。
急に布団敷いてるから、何してるんやいうたら、「（叔父の）勝さんが来るから」って。はるか昔に死んでる人ですよ。仕事に行っていても、帰ったら家丸焼けになってるんちゃうかと心配してましたからね。仏壇のロウソクなんか、「僕がおらん時点けたらあかんぞ」っていうても、家出たとたんに点けてますから。それが、受け入れられなかったですね。今テレビとかで、そういう介護の方法とかやってるでしょ。となりで「そーか、そーか」と相づち受ってはる。ああいうのができなかったですから。

西川　僕、認知症の介護してはる家族の会に行ってるんです。いろんな話聞きますけど、今も一緒ですよ。ご主人が認知症になって、奥さん最初のうちは我慢してたけど、夜中に手をかけて、「もう…」って思ったけどやめた、みたいな話とか。「死ね」って言うどころか殺そうと思ったっていう。そんなに、テレビとかで見てる姿がずっとは続いていない。

Cさん　ああいうのは、言葉とか文字で説明してはりますよね。でも、言葉とかでは説明できないところがあるんですね、現実にやっている人間としては。

Aさん　お母さんやから、もともと子どもの頃から「お母ちゃん、お母ちゃん」って甘えてたのが、逆に甘えられるっていう？

Cさん　うーん、僕の場合、家がややこしくて…。小さい頃に施設に送られて、とことん母親を恨んでたんですよね。父親が小学二年生の時に死んで、ものの二ヶ月で背中じゅうに絵を描いたような男と一緒になった。それで、女性に対する不信感いうのはものすごいついてましたね。父親は事故で死んだので、労災のお金で家を建てて、小さい商売を始めたんですが、そこへまた、その男の本当の奥さんと子ども二人が来てね、もう笑い話ですよ。

Aさん　うちの旦那盗った、いう感じになったん？

Cさん　いや、その男は本当の奥さんをほったらかして生きてはった人です。まぁ悪さしてたんでしょう。それで生活が始まって、もう殴る蹴るされて。弟だけは何とかしたろ思っておばあちゃんのところへ養子にもらってくれと言って、もらってもらって。その男に、おかまのお湯ぶっかけて、とび出して、児童相談所送りの施設送りと。だから、母親が（※）痴呆症になったときでも、素直に「かわいそうに」という気持ちはもてなかった。

西川　いやでも言葉にするとね、「かわいそうだと思えなかった」っていっても、「あの時聞いてあげればよかった」ってね。なんか矛盾してしまうよね。

Cさん　そうなんですよ。それが、いつまでも抜けないんですね。いまでも思いますからね、ああしておけばよかったって。

西川　でも、聞き上手っていうのは、しゃべっているのをただ聞くだけじゃなくて、自分の目の前にいない人の話を聞くってことも、僕はあると思う。亡くなってしまった人、生きてる時には話聞かれへんかった人たち。でもね、そうやって思い出すでしょ。思い出してあの時はこう言いたかったんやろな、ああ言いたかったんやろな、って。聞いてるんですよ。僕、そう思うんですね。
生きてる時には話聞けなかった、そんなこといっぱいあるじゃないですか。おふくろやと思てるけど、いろんなこと思い出したらちょっと聞けんわ、みたいなね。それこそ、人に優しくできるほど自分が余裕ないときとか山ほどあるじゃないですか。でも、後になって、スカッとは忘れてない。お母さんが、もう亡くなってはる勝さんの布団敷いてたんも、その人の声を思いながらやってはったんやろうね。こうやって、生きてるもの同士が顔合わせてしゃべってるのとか、若い男女がデートでふんふんっていうてるとか、ちゃんと聞いてるかっていうたら、聞いてないような気がするよね。逆に、何にもしゃべられへんかったけれど、もうそいつのことが忘れられへんってこともある。社長の電話切ってからでも、「社長もつらいよなぁ」って、そこから聞き始めてるんちゃいますかね。

Dさん　話が下手な人っていうのかな、おんなじこと何回も何回も繰り返す人、しょうもないことを長々という人。そんな嫌な話ずーっと聞いとるのも、聞き上手かな？

西川　怒られて「くそー」って思てるのに「はいはい」っていうてるのが聞き上手かというたら、そうではないかもしれへんしね。何のために聞き上手になるのか。相手のために「辛かったやろな」、自分ももう少し自分が納得できるような接し方をしたかったな、そのためには聞けるようになりたいなと思ってる人と、とりあえず「言わすだけ言わしといたらいいか」って人もあるかもしれないですね。

Cさん　抽象的な話になるかもしれませんが、井戸の中へ落ちてもがいている人に、ロープを降ろしているとして。ロープ降ろしている人は、上から見るともう届いているふうに見えるんですね。介護問題や何やと言われていても、高いところから覗き込んで、「大丈夫か、はよロープ掴んで上がってこいや」と言うのが精一杯。それを掴んで上がる気力もないんですよ。僕らにとっては、「何を言うとるんや、こいつは。何もわからんと」っていう気がありましたね、母親の面倒見てる頃は。「本当に心配してるんだったら、ロープ垂らすだけじゃなく、そのロープで降りてきて担いで上がってくれ」って。そこまで考えてましたね。言葉でも文字でも、それで通じてると思てるんですね。

西川　はい。…1時間くらい経ってるんで、皆さんちょっとお茶飲みません？

（※）現在の表現は認知症ですが、話されている内容をそのまま掲載しました。

地域のみなさんに聞いてみよう！

小西勇儀（こにしいさよし）さん
山王町会　連合町会長

ひと花さんとの関わりは、2013年の9月ごろから。山王みどり公園の清掃をしてもらうようになってから。月に一回、たくさんの人があつまってくれて、掃除をしてくれている。これはありがたいことやと思う。みなさんすごいパワーだよね。よう活動してくれているなあと思う。おじさんたちは元々仕事をしているからだよね。

父がアパートの大家をしていたから、こどものころから4.5畳の部屋で暮らしてきた労働者の人たちをずっと見てきている。日雇いでもコツコツとお金を貯めていた人もいるし、パチンコしている人も見てきた。そういう皆さんが、年をとった時にどうしていくのがいいのか、ずっと考えている。手を差し伸べるとか、ああしましょう、こうしましょうとか言うよりも、その人たちの話を聞く方がいいと思っています。

これからは地域でもう少しつながりをもてたらいいなと思っていて。町会の仕事なんかも人が少なくなって、年齢層も高くなってみんないくつもの役職をかけもちしているからね。

それから山王みどり公園が広くなって、地域に開放されることもあるので、これからの関わりをまた考えていきたいなと思っています。

じろーさん
こどもの里　スタッフ

ひと花さんとの関わりは、萩之茶屋北公園2周年記念こどもたちとあそぼう会、三角公園こども大運動会、こどもの里（以下：里）のクリスマス会、萩之茶屋文化祭…いろいろありましたね。単純に言うと…助かってます。単純に人手として、準備や片付けなど助かっています（笑）。里の手伝いとかイベントに参加することが、おっちゃんたちの生きがいにもなっていると思ってます。

こどもの里に来ているこどもたちが、ひと花にも遊びに行っているのもすごいなあと思う。里に遊びに行くような感覚で、ふつうに（ひと花センターに）遊びに行っている。こどもたちが、人見知りしない性格というのもあるけれど、ひと花センターがおっちゃんたちの居場所だけじゃなくて地域の居場所になっているのかなと思います。こどもたちとおじさんたちのつながりができるのは良いことだなあと思います。

今までにもまちの中には「ふるさとの家」とかいろいろな居場所があるけど、おじさんたちの居場所はいくつあっても良いと思ってます。ただ、25年度でもひと花さんには約2400万円のお金がついていて、でもそういう場所が2年、3年限定で終わるものだったら、それはどうかと思う。もったいない。必要とされているのに、終わってしまうというのはもったいないと思いますので、続けていってほしいです。

今後も協力し合っていきたいなと思いますので、よろしくお願いします。

辻尾育功（つじおいくのり）さん
大阪府立今宮工科高等学校　教頭

学校周辺のゴミは風紀委員を中心にした「おはようクラブ」と先生たちが掃除を行っていますが、どうも学校前の国道がドライバーたちの休憩ポイントとなっているようでポイ捨てが多く、ゴミが絶えない状態で困っていました。そこにひと花センターの方々が毎週ゴミを片付けてくれるようになり非常にありがたく思っています。

先日、ブラスバンド部の演奏会に来ていただきました。普段から様々な施設へ演奏に行っていますのでお呼びしていただきましたらいつでも伺いますよ。今後も文化祭や体育祭に来ていただくなど交流を持てればと思っています。

核家族化が進み、今の子どもたちにはおじいちゃん、おばあちゃんとふれあう機会が少なくなっています。大家族の中で守られているといった雰囲気が今の生徒たちには必要だと思います。ひと花センターの方とふれあうことで多感な生徒たちも落ち着くことができるのではないでしょうか。

眞田實千代（さなだみちよ）さん
特定非営利活動法人まちづくり今宮　理事長

私たちは地域に密着してまちづくりを展開するために定期的にまちの清掃活動や1年間を通して様々なイベントを行っています。私たちの活動に多くの方が参加され、地域にしっかりと浸透してきています。今まであいりん地域とその他の地域とは距離があったような気がします。そこへひと花センターのメンバーが参加し始め、地域の人たちと交流をもつことで何か変わってきたのではないでしょうか。ひと花のメンバーと「クリーン作戦」でまちを清掃したり、「キラッと光る今宮」でイルミネーションの設営をしたり、「桜を観る会」で一緒に花見を楽しんだりしているとだんだんと距離が近づいていると感じられます。

私たちのめざす「みんな仲良く、安心、安全」という方向へ少しずつ変化している、そんな思いがします。

田中康夫（たなかやすお）さん
萩之茶屋社会福祉協議会　会長

ひと花センターを利用している人たちの表情が明るい、これが私の感じたことです。今まで高齢で生活保護を受給している人たちは生活できるだけで何もすることがない、食事もおいしくない、結局体が傷むのを待つだけでした。しかし現実は高齢になればなるほど仕事に就くことは困難になるわけです。皆何かをしたくて仕方がないのにどうしてよいのかわからない。彼らだけでは生きがいを見つけたくても見つけることができない。ひと花センターのメンバーの中には今まで培った素晴らしい技術を持っている人がいます。メンバーの中からリーダーになる人が現れ、活動が繰り広げられると将来何か新しいことが生まれるのではないか、そう期待しています。

西村保英（にしむらやすひで）さん
萩之茶屋第1町会会長　　西村米穀店店主

　ひと花さんとの関わりは、2013年廣田神社の夏祭り巡行で、人数が足らないところに参加してもらってから。あのときはほんまに助かった。町会の世話人は年齢層が高い。70歳になると、炎天下で一日祭を巡行するのは体力的に厳しいんです。町会で65歳以下は2人だけ。70歳以上が6割。なので60代はまだ若手。

　ひと花の取り組みで、今宮地区のイルミネーションの飾り付けをしたり、萩之茶屋のひろばで農作業をしたりしている、ああいうのはいいなあと思う。体を動かすような作業ができるのはいいね。

　西成で生活保護を受けている高齢の人たちと、どうやってつきあっていったらいいかというのはずっと考えてるんですよ。元々地域に住んで働いていた人だったらある程度わかるけれど、最近地域に越してこられた人に、急に町会の取組みに入ってもらうというのはやっぱり難しい。なかなか接点がないけれど、人は自分の興味があるものにだったら、集まってきますよね。町会の囲碁クラブとか地域のイベントとかを接点にして関わりがもてたらいいなと思っています。

河﨑洋充（かわさきひろみつ）さん
社会福祉法人 石井記念愛染園 西成市民館　館長

　わたしは、ひと花センターさんと西成市民館は良い意味でライバルというか、二つの台風の眼というか、お互いにリンクしてやっていきたいと思ってますね。市民館だけでは弱い部分もあるので、互いにオープンにしてつながり合って協力してやっていきたい。市民館が今まで居場所づくりや相談事業などで培ってきた資源やノウハウを、どんどんひと花さんにも使っていってほしいと思っています。資源を共有していきたいですね。

　事業では、おじさんたちがどう参加しているのか、本当に楽しんで参加しているのかというところをしっかり見てほしいなと思っています。それから固定化しないことが大切。新しい人と古い人とが、同じように利用できる環境をつくることが大事だと思います。

　ひと花ができて、地域でより幅広い層の人たちの人間性をとりもどすような活動ができるのではないかな、と期待しています。市民館も2期4年目の大阪市の指定管理を終えるので、今後はオール大阪を目指した活動をしていきたいと考えています。ひと花さんとも今後どう連携していくか、いい意味のライバル・仲間として頑張りましょう。

臣永正廣（とみながまさひろ）さん
西成区　区長

　故郷の徳島の田舎町で町長をしていましたが、平成の大合併で失職。ハローワークに行って正直に経歴を書いて相談すると、「元町長サンなんて雇うところはないでしょうね」。

　トホホの日々、やることがないので実家のネコの額ほどの畑を耕していました。機械を入れるまでもない広さの畑を鍬で耕していると、土のにおい、風のそよぎ、虫や鳥の動き、移り変る日の光と、狭いながらも自然に抱かれ心が穏やかになり、仕事探しや将来の不安などをひとときでも忘れられました。野菜や草花は世話を怠らなければ日々すくすく育ってくれます。その生命力あふれる成長はやるせない日々の無聊を慰めてくれました。

　西成区長となってひと花センターの畑の鍬入れ式で耕していると、ギャラリーから「なかなか上手じゃないか」とお褒めの言葉が飛びました。これでも一応は元セミプロですからね…年末の門松づくりでもみなさん生き生きとしており、手仕事のよさを改めて実感しました。

　西成区内には、幸か不幸か活用していない未利用地がまだまだ残されています。勤労、自立に意欲のある人もたくさんいます。その方々のほとんどが、人づきあいも限られ孤立した生活を送っている状況にあります。そこで、社会的つながりがない単身高齢生活保護受給者に、身近な社会的居場所を提供し、孤立を防ぎ、健康で安定した生活を送ることができるよう、ゆくゆくは既存の地域コミュニティにも参加できるようにと本事業を開始しました。これは西成特区構想に係る事業の一つとなっています。

　米が年に2度収穫できる2期作や裏作に野菜を作る2毛作のように、人生もまた環境とチャレンジ次第で豊かにできる可能性があるはず。西成でもうひと花もふた花も咲かせ、全国に先駆けた高齢化社会モデルとしてぜひとも羽ばたいていただきたいものです。

石橋友美（いしばしともみ）さん
紙芝居劇むすび*　マネージャー

　ひと花センターができて、紙芝居劇むすび（以下むすび）はかなり大きな変化をいただいています。むすびのメンバーの人数が少なくなってきたときに、人との出会いを大事にできるおじさんたちがひと花センターから来てくれたという。ちょうど前の世代のおじさんたちとの世代交代のようなタイミングで、本当に仲間になるような人が紙芝居を見てくれて、実際に仲間になってくれて。運命的なものを感じていますね。

　ひと花との関わりは2013年7月にひと花センターのプログラムで紙芝居劇をしてから。それからまず、ひと花メンバーのYさんが近所に住んでいるからと、むすびの事務所へ来てくれるようになりました。それからYさんがまた仲間を連れて来てくれて。今はひと花メンバーが半分以上を占める公演もあります。

　最近は、わたしの西成でのつながりを、おじさんたちがつくってくれていますね。いろいろな情報をもってきてくれて、細やかに話をしてくれたりして。

　むすびとひと花を行き来しているみなさんは、2つの場所が相乗効果になっているんじゃないかなあと思います。みんな生き生きしていますよね。

　生活保護を受給して高齢単身の方との関わりをどうつくっていくか、というところは、まずみなさんに部屋から出てきてもらうことからだと思います。そこは民間の力だけではむずかしい。区役所やケースワーカーさんからはじめのひと声を掛けてもらう、その説得力というのはやっぱり大きいです。まず部屋から出てきてもらえないと出会えないので。将来的に規模や事業内容が変わることがあっても、おじさんたちを部屋から引き出す機能の部分は残してほしいなと思います。

　これからのことについては、お互いの関係を発展させていくというよりは、ご近所さんのような関係を、細く長く続けていきたいです。おじさんたちの居場所は1つでも多くあればいいなあと思うので。誰かやどこかが、へコんでも、どこか（の居場所）にはひっかかるというように。そういう居場所がネットワークをもって情報を共有できることも大切だなと思いますね。

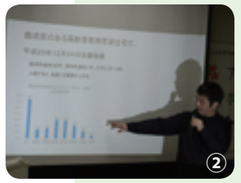
*紙芝居劇むすび：大阪・西成にある釜ヶ崎に暮らすおじさんたちが繰り出す紙芝居「劇」。ほのぼのとした語りと斬新な小道具や歌などが飛び出すしかけ。紙芝居活動はもちろんのこと、メンバー同士の助け合いの場となっている。初期メンバーを少しずつ見送り現在は60代を中心に第2期がスタートしている。
ブログhttp://musubiproj.exblog.jp/

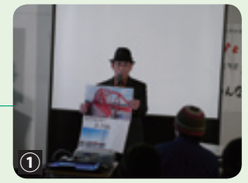
2014年3月16日　ひと花プロジェクト2013年度　シンポジウム

みんなに会いに来ています　報告

会場：西成プラザ

シンポジウムスケジュール


②


①

第１部

10：00　オープニングパフォーマンス（写真①）
10：15　あいさつ
10：20　地域の現在・プロジェクトの背景（写真②）
（松本裕文：NPO 法人釜ヶ崎支援機構事務局長）
10：45　ひと花プロジェクトの報告
（廣谷賢：NPO 法人釜ヶ崎支援機構ひと花センター）
11：25　ひと花イタリア仮面劇発表（写真③④）
（フラテルナル劇団：イタリア仮面劇 ＋ ひと花メンバー）
11：50　　－　お昼休憩　メンバーてづくりカレー（写真⑤⑥）

③

⑤

④

⑥

第２部

13：00　ひと花笑劇団　劇「人生双六」上演（写真⑦⑧）
（ひと花笑劇団：ひと花センター）
13：25 ※地域の活動拠点のお話　地域８団体（写真⑨）
14：40　休憩
14：50　北九州ホームレス支援機構での取り組み
（鈴木しもん：NPO 法人北九州ホームレス支援機構）
15：30　ひと花メンバー　座談会（写真⑩）
（西川勝：大阪大学 CSCD　特任教授 ＋ ひと花メンバー）
16：00　体ほぐしと会場全体でお話（写真⑪⑫）
（岩橋由莉：表現教育）
16：30　まとめ
（西川勝：大阪大学 CSCD　特任教授）

⑨

⑦

⑧

⑩

⑪

⑫

※［地域の拠点紹介］
紙芝居劇むすび　／石橋友美
社会福祉法人 大阪自彊館 三徳寮　／織田隆之
社会福祉法人 聖フランシスコ会ふるさとの家　／吉岡政子
NPO法人 こえとことばとこころの部屋　／上田假奈代
NPO法人 サポーティブハウス連絡協議会　／山田尚実
NPO法人 生活サポート釜ヶ崎　／岡井一郎
NPO法人 HEALTH SUPPORT HINATA　／梅田道子
NPO法人 まちづくり今宮　／眞田實千代

ひと花シンポジウム　鈴木しもんさんのお話
「北九州ホームレス支援機構での取り組み」より

鈴木しもん（すずき しもん）
大阪府出身。1995年阪神大震災を経験。被災者支援活動と路上生活者支援活動に参加する。2000年５月より北九州越冬実行委員会（現NPO法人北九州ホームレス支援機構）の専従スタッフとなる。NPO法人北九州ホームレス支援機構の事業拡大に伴い、ホームレス巡回相談事業、八幡事務所総務部、サポートセンター事業部、パーソナルサポートサービスモデル事業に携わる。2012年４月より地域生活定着支援センター長として勤務中。累犯障害者や高齢者の矯正施設からの出所に伴う自立支援を主たる業務としている。

わたしたちの組織では３つのスローガンを柱としています。

・ひとりの路上死も出さない
・ひとりでも多く、一日でも早く路上からの脱出を
・ホームレスを生まない社会を創造する

前身の団体を含めると、26年間活動しています。

一番困っているときに関係をつなぐのが大事かと思うので、炊き出しから、自立後支援までをひとつの団体でやるのは大切なことだと思っています。

僕は北九州で活動して5年になりますが、当時会った人は、僕はそんなつもりじゃなくても命の恩人のように扱ってくれるんですね。部屋を訪ねると、普段は使わないような座布団をだしてくれたりする。なんでそこまでしてくれるんだろう、と思うと「あの日、もうどうしようもないと思ってベンチに座ってた時に、話しかけてくれたのが鈴木さんだったんです」と言われたりする。それを聞くと、僕は泣きそうになるんですよね。

その人に初めて声をかけた時は、僕もドキドキしながら話しかけたんです。もしこの人が野宿していなかったらどうしよう、と思って。一般市民が、酔っ払って家に帰る前に休憩しているだけだったら「こんばんは」と声をかけて、「北九州でホームレスの支援をしている団体です」と名乗ってしまうと「オレがホームレスやと言うんか！」と怒鳴られた経験が何回もあるので。それで、僕たちも勉強して「おれがホームレスやって言うんか！」と言われたら「いやいや違いますよ、この公園で野宿している人がいると聞いたので、さがしているんです。見かけませんでしたか？あなたのことではないんですよ、そうですか、いないですか。ありがとうございました、じゃあ」と言って、じーとみていると、その人がごろんと横になったりする。そこでまた、さっきとは違う人間が話しかけるんです。

「こんばんは、ホームレスを支援している団体のものですけど、お弁当いりませんか？」というと、今度はもらってくれたりするんです。最初は受け取ってくれなくて、怒鳴られたりしても、重ねていくと受け取ってもらえることもある。

「もちろんあなたはそんなことないと思いますけど」と言いながら接しているドキドキの瞬間を、相手もすごく覚えてくれる。ファーストコンタクトはとても重要。その時の経験を喜びに変えていく体験を重ねていって新しい出発をされて、あの時のきつい時期の後に喜びが重なって今はこういう生活をしているという変化を一緒に喜べる。

“伴走型”と僕らは呼んでいるのですが、寄り添い形でずっといけるのは、一つの団体が炊き出しから支援後までを担っていることの良さかなと思っています。当事者の方には、良い面も悪い面もあるだろうと思います。過去を知られていることの嬉しさと迷惑さがある。でも僕らは、いい面を生かしていこうということで、ひとつなぎでやっていこうとしています。

支援を受けられる本人が中心にいたら、その人と同じ目線、同じ立場で北九州ホームレス支援機構のスタッフが寄り添っていく。そこには、その人を中心にいろいろな社会との関わりが必ずあるはずで、もしなかったらつないでいく。家族、友人、ボランティアはもちろん、町内会や民生委員、医療機関、ハローワーク、地域包括支援センター、そういった所ともつながっていくんですが、個別の関係はそれぞれできても、横につ

ながりにくい。

例えば、体の悪い人に医者は「お酒をやめなさい」と言っても、本人は友達に病院に行っていることをなかなか言えない。知っていたら誘わないのに、医者から酒を止められていることを知らなくて、その友達は「飲みに行こう！」と誘ってしまうことがままあるんです。だったら、友達も一緒に病院の話ができる関係をつくるしかないのじゃないか。自分のことを客観的にオープンにできるようなつながりをつくるにはどうしたらいいのだろうかと考え始めて、本人の了解を得たうえで、周りの関係者をひとつなぎにしてご本人の新しい生き方をどうつくっていくのか話し合えないかと考えました。役所と病院だけだったら、ケース会議ができますが、そうじゃないところも入れる。これは難しいことなのですが、ケースによっては3か所、4か所と広げていかなきゃいけないし、それが最終的に役に立つだろうと。（中略）

誰にも相談できないと、抱え込んで人にも言えなくなってしまう。先ほどの話ではないですが、医者にあと半年の命と言われたのに、友達に言えずにお酒を飲んでしまって、その半年をどんどん短くしてしまうということのないように、「まず相談できる場所である」ということを第一に掲げています。だから、何でも受け止める。そして僕らが受け止めきって全部終わりじゃなくて、聞いた者として、次に何ができるのか、その先につなぐのが大事だと思います。その先の人とつなぐことで、その人の生活がより豊かになるように支援する。民間サービスや老人介護、地域の関係者、いろんなところにつないでいく。

「受け止めて、つないで」またえらそうなことを言いますけど、「共に生きる」。でも、なかなかできることでないんです。同じ地域で生活するものとして、互いに尊重しながら支えあっていくことが、ホームレスを生まない社会の原動力になっていくのではないでしょうか。

ひと花シンポジウム　西川勝さんのお話
「シンポジウムのまとめ」より抜粋

西川 勝（にしかわ まさる）
（大阪大学CSCD　特任教授）
精神科病棟での見習い看護師を皮切りに、人工血液透析、老人介護施設と職場を移しつつ、二十数年にわたって臨床の現場での経験を積む。その一方で、関西大学の二部、大阪大学大学院文学研究科にて哲学を学び、看護の実際に即してケアのあり方をめぐる哲学的考察をおこなう。現在は「認知症ケア」に関わる コミュニケーションの研究・実践を進行中。

僕は、先ほどの「あっこちゃんの会」（注）の中でも「同じにおいがする」と言われていたけど、僕にとってはこのあたりの釜ヶ崎、西成っていうのは、さみしいとき、つらいときに結構来てた場所なんですよ。

それこそ、妻が病気をして、経済的に非常なとき…まあ、借金まみれになって、離婚が目前に近づいてきて、離れないといけない3歳の娘をつれて、天王寺動物園に行って。娘をつれて、動物園行っている訳ですから、楽しいはずじゃないですか。娘は娘でそれなりに笑っている訳ですけど、僕は笑えない。まもなく売りに出す家にも帰る気がしなくて、ちょうど動物園前商店街のところに入って、娘は小さい子どもでしたから、すぐ寝始めて、そこで1人で酒飲んでたときに、隣で飲んでたおじさんとかが話をしてくれる訳ですよ。いろいろ話しかけてくれたんです。特段、助けになるようなことを言ってくれる訳ではないですけど、そういうことがあって以来、自分は辛いことがあると、このあたりを歩くっていうのが、自分の人生を支えてきたという風に思っています。

いわゆる、西成・あいりん地区・釜ヶ崎で、一人暮らしをしてる、そういう人たちが社会につながりを求めていく、という風に思われるかもしれないけども、おそらく違う。今日も若い人がここに来ていますけど、今の社会の方がもっとつながりが少ない。もっと居場所がない。もっとさみしいんですよ。東京にはビルが一杯建っています、大阪にも一杯建っている。行けるところが一杯あるように思うけど、関係ないところには入れてくれないですよ。大学、学校だってそうだし、会社だってそうです。自分の組織じゃないものは、入れてくれないですよ。都会に行けば行くほど、本当に自分の居場所がありません。それこそ、何かの組織に入るときには、評価される、試験される。「お前は入っていいよ、お前はダメだ」というように、常に評価される。自分の気持ちじゃなくて、誰かが、お前は入っていいよ、お前はダメだよというふうに常にされてしまう。

そんな都会の中で、やっぱり自分はどこかに属しているような気がしているけど、いつはじき出されるかもしれない。実際に運が悪ければ、はじき出されてしまう訳です。そのときに、自分はつながっていたと思っても、ちっともつながってなかった訳です。

そのときに、僕は釜ヶ崎に来たときに、だれかに慰めてもらいたいと思って来てない訳です。ところが、今日のシンポジウムもそうですけど、なぜかつながっていくというか、自分が迎えられていくというか、さっきのあっこちゃんの会もそうですけど、徐々に自分が愛されてきていると感じます。この間、TV局の人が来て、「こういう事業には、どういう意味があると思いますか？　こういう人達の居場所をつくっているんですか？」と言われて、「いや、そうじゃなくて、僕がだんだんと居心地がよくなってきています」と。僕が何かをするよりも、本当にここに来れば、こういう形での人とのつながり方があるんだって、素直に信じることが出来ると思っています。わずか、7月からはじめて、一年にも満たない間にひと花プロジェクトは様々のことを起こしてきています。

その中の一番大きなというか、これから渦巻きを起こしていくのは、釜ヶ崎が社会につながるというよりも、バラバラにされている社会が、釜ヶ崎に来て本当の意味での人のつながりとは何なのか、実感していく拠点になると思う。「高齢単身生活保護受給者「の」社会的つながり」っていいますけど、「の」じゃなくて「が」社会をつないでいく。

本当に、一瞬にして切られてしまうような危うい社会の中の、機械的な組織の中の一員みたいなところから、そうじゃない、本当に人と人がつらいとき、うれしいときを共にすごすっていう作法が、生きる時の作法が、この地域でものすごく長い歴史の中で、苦しいこともあり、悲しいこともあり、つらいこともありながら、形作られてきた。そこをどんどん社会のために開いていく。このひと花プロジェクトはまだまだするべきことがある気がしています。ということで、まとめじゃなくて、もっともっと、この世の中、社会の寂しさに対して、釜ヶ崎の優しさだとか、明るさだとか、辛いときに一緒に辛がってくれるという、その力をもっともっと広げていけたらなあと思いました。以上簡単ですけど、僕の感想です。

（注）「あっこちゃんの会」は、ひと花センターで月一回開催されている「アジール呱々の声」の通称。大阪大学コミュニケーションデザイン・センターの西川勝さんと、宮本友介さんが進行役を務める。

看護、医療、健康の視点から

「つながり」「居場所」の意義・意味を考える

ひと花プロジェクトの取り組んでいる「高齢生活保護受給者の社会的つながりづくり事業」は、「居場所づくり」「つながりづくり」に対して全額公的資金助成がなされている、全国でも珍しく先駆的な取り組みと言われています。また、事業の対象者が生活保護受給者に絞られており、すでに衣食住のサポートを受けている人に対しての「社会的つながりづくり」を目的とした稀有な事業でもあります。この全国的にも珍しい事業形態は、日雇い労働者のまちである本地域が長期に渡り取り組んできた課題を反映したものですが、全国的に少子高齢化や高齢単身世帯の増加と孤立などの課題が噴出する中、避けて通ることのできないものです。しかしながら、本事業の取組は地域や社会からの理解を得にくい部分もあり、疑問の声をいただくこともあります。

ここからのページでは「居場所づくり」、「地域社会とのつながりづくり」が具体的に人が生きていく上でどのような意味や意義を持ち得るのか、地域社会にとってどのような可能性があるのかを、健康面や医療面を切り口に考えていきます。

今回お話を伺ったのは、本事業を受託する連合体のメンバーでもあるNPO法人HEALTH SUPPORT HINATAの梅田道子看護師。看護や医療の現場から見える、居場所やつながりづくりの意義・意味について伺いました。

ひなたについて
ー集めたのではなく、集まってきたー

ひと花：まず、NPO法人HEALTH SUPPORT HINATA(注1)と訪問看護ステーションひなたの開設までのお話を聞かせていただけますか？

梅田：以前、訪問看護ステーション鶴見橋（以下鶴見橋）に勤めていた時、同時にヘルスサポート大阪（以下ＨＥＳＯ）(注2)で、見守り支援を行っていました。鶴見橋に勤めながら、見守り支援をＨＥＳＯから請け負ってやっていたのですね。鶴見橋は株式会社でしたので、私は健康相談を重要に感じていたこともあり他にも構想があったので鶴見橋を退職することにしました。

そのころ同じように、松田光恵さん（現在訪問看護ステーションひなたのメンバー）がＨＥＳＯでドッツ事業(注3)をされていました。ドッツ事業も今年度限りということもあり、「ＨＥＳＯでのドッツ事業が終わっても釜ヶ崎に住む高齢の一人暮らしの人のことが気になるし、見守り支援も続けたいよね」と継続の必要性を感じていました。

それで、２人で何かしようかということになって、訪問看護しようか！と、冗談とも本気ともとれるようなことを言っていたのが2011年の11月です。

その後、様々なところから一緒に活動したいと言ってくださる看護師のメンバーが集まってくれて、全部で5人のメンバーが集まりました。それで2012年３月に、西成市民館を借りて、今後わたしたちに何ができるかと話しあって「やっぱり私たちにできることは、訪問看護しかないよね」と。地域に理解していただきながら展開するにはＮＰＯ法人が良いのではないかと考えました。

出会いがあり、人も集まり訪問看護ステーション立ち上げから、見守り支援、居場所づくり、お見舞い支援などの活動が実現でき、自分の居場所もできたことになりました。集まってきてくれた看護師はそれぞれに、病院という枠を超えてなにか人の役に立ちたいと考えていて、活動の場が必要でした。それが「ひなた」なのだと思っています。

生活保護と医療費　ーバッシングについてー

ひと花：先日あるシンポジウムでひと花センターの取り組みを発表したのですが、会場から「生活保護を受給している人は医療費が無料で、そのうえ公費でつながりづくりの事業をするなんて過保護すぎる」という意見があったのですが…。

梅田：医療費が無料であるということについて、これは政策の問題なのでわたしからのコメントはむずかしいのですが、この地域の人や生活保護を受けている人に特に手厚い、過保護、ということはないと思っています。

医療費は、この「ひと花」のような事業があったりするから逆に抑えられていて、結果的に税金の使用が抑えられるとわたしは思っています。それはなぜかというと、生活保護受給者の多くは、日本の高度経済成長期から肉体労働を担ってきたという誇りを持って生きてきており、仕事にあぶれ、生活保護を受けなければ生きていけない現実に対し、「お国の世話になってまで生きたくない」と自尊感情が傷つき、気持ちが閉鎖的になり孤立している現状があります。

そして、「生きがいがない、生きる張り合いがない」ことから、閉じこもりやアルコール依存症などのさまざまな健康問題に繋がっていると思うのです。

それでは、「就職活動をしたらいいのではないか」とか、「働く気になったらなんでもある」と言う人がいたり、区役所では、「ハローワークに行ってください」と言われるようですが、15～6歳ごろから、しんどい肉体労働を担ってきて、その仕事一筋にやってきた人達にバブル崩壊とともに仕事にあぶれたからといって、急にパソコンを使いなさいと言われてもできない。急にお店の店員さんやってと言われてもむずかしいです。

そういう状況の中で、生活保護も本当にくやしいけれど受けなければいけないという経緯がある。その心情をまず皆が感じとっていかないと変わらないですよね。ひと花があったり、見守り支援があることで、むしろ社会の経費を無駄に使わないことにつながっていると言うことを知ってほしいです。

ー医療費は無料でないといけないー

梅田：おじさんたちは、一生懸命働いてきて、「自分の稼いだ金で飯食いたい」と思っているけれど、生活保護をとらないといけない状況になってくやしい思いをして、閉じこもっている。そういうしんどい状況のなかで生きてきて「もう死んだっていいや」って反面思っている人も多くいます。「病院になんて行くか」とか、「このまま死んだってええんや」とか「国の世話になりたくない」とかたくなになっている。そういう人たちが、いろんな人との関わりやいろんな支援を受けて、みんなと出会って、励まし合ってやっと「もうすこし生きてみようかな」と思えるようになる。

今ひと花に来ている人たちは、「自分のため」というよりも、たとえば「○○さんに心配かけないために、病院に行くねん」とかね。そういう気持ちになっているのではないかなと思います。その結果、病気が重症化する前に治療することができる。医療費の抑制につながるわけです。

ひと花：今のお話はとてもよくわかります。自分のことが「どうでもいい」と思わざるをえない状況がつくられてきた背景があって。そういう方が、「どうでもよくはない」と思えるために、なかまをつくったり、他の人から「からだ大丈夫？」とか言われる経験を積んでいく。そうして、自分のからだやこころを自分でも大事にできるようになる。そのために居場所やつながりが大切だと…

梅田：そう、それが必要なんです。医療費、医療費ってみんな言うけれど、早くに病院に行けば医療費はとても安い金額で済むのですよ。ずっと放置しておいて、重症になって救急車で運ばれて、頭の先から足の先まで検査して、延命処置をする。意識を失っても心臓が強かったらずっとその状態で生き続ける。そうなったら、本人の苦痛は当然ですが、ものすごく膨大な医療費がかかるのです。早くに病院に行って、早期に病気を発見して、早めに治療していけば医療費は軽減される。「俺はころっと死ぬからええねん」と言う方も結構いるけれど、現実はそんなに簡単ではなくて、意識を失って自分のわからないところで措置が行われたりする。

だから、医療費削減のためにも、ひと花のような事業が必要なのです。多くの人が、いろいろなプログラムなんかに参加して、からだの変化に気づいたり、自分のからだのケアの仕方を知ったりして、病気を早く発見できれば医療費は低く済むし、人間関係も豊かになる。そうなってきたら、この地域が特別悪く言われなくて済むじゃないですか。この地域が良くなれば、日本全体も良くなるんじゃないかなって思っています。

それから、健康で長生きする、ということが医療費を少なくする。健康で長生きしている方の中にはね、「いただきます」と言ってお茶わんをもったまま亡くなったという方の話を聞いたことありますが、最高ですよね。

ー弱いもの同士のけんかにならないためにー

梅田：国民年金で生活している人たちの収入は月5～6万しかないと聞いています。健康保険料や介護保険料が引かれたら手取りはもう本当に少ない。少ない年金で暮らしている人から「生活保護の人だけ、なんでそんなに手厚いのだ」という声があがってきてしまう。弱いもの同士がけんかし合う構造になってしまう。

わたしが、健康相談に行っている場所に、年金をもらっている人で手取りが少なくて家賃が払えないけれど食べるだけならなんとかなるから、ということで家を出られて野宿をしている人がいます。しんどくても病院にいけないので不安だと言ってます。

ひと花：そういう方は、年金と生活保護の併用はされないのでしょうか。

梅田：併用はできますし、手続きを一緒にしてくれる支援者を紹介できると伝えるのですが、「お世話掛けたくない」とか「生活保護をもらったらいろいろ言われるやろ」と言い「わしは元気だから、もうちょっとこのままいくわ」って断るケースが多い。

今、生活保護をもらっている人は、肩身の狭い思いをしているようにみえる。いくら「権利だ」と言っても、みんなうつむいている。年をとっても安心して生活できる社会であってほしいですよね。平等に生活できる社会保障の在り方はないものでしょうか…

ー死についてー

ひと花：ひと花センターでも、健康教室や料理の時間、ヨガや散歩の会など体について考えるようないろいろなプログラムを行っていますが、病気になる前、元気なうちに、体を整えることの重要さについて教えていただけますか。

梅田：自分で判断できるうちに、生き方とか死に方とかを考

えておくといいかなと思っています。生あるものは平等に死も与えられているので、生きている間は心身ともに自分を大切にして健康で死にたいものです。

ひと花：西成の高齢単身の方の看護ということで、ターミナルケアをする機会も多いと思うのですが、その際心掛けていることは何かありますか。

梅田：死に方は、10人いれば10人それぞれの死があると思うのです。心がけていることは、その人の生き方に合わせるということだけです。それは、その人の死に方に合わせるということにもなるので、看護師としてこうしたいということは基本的にはないと思っています。その人がどうしたいかに合わせる。それ以外はないです。

ひと花：そのために、その方の話を聞くことが大事なのですね。

梅田：共感的理解と傾聴しかないかもしれない。わたしは、必ずしも在宅死が良いと思っているわけではないんです。本人の想い、意思を大事にしたいと思っています。本当はこの地域の中に、ターミナルケアの病院があればいいな、とも思っています。

ひと花：釜ヶ崎の激しい高齢化と向き合って感じることはありますか？

梅田：そういう時代なのかな、と思っています。労働者のまちが福祉のまちになってきたのかな、と。わたしはまだこのまちに来て10数年なので、特別なことは言えないのですが。一生懸命働いてきたおじさんたちが、病気を抱えながら日々生きていくことに、または死を迎えることに寄り添えたらと思っています。

このまちは労働者のまちだから、今までのように「活気のある労働者のまち」を望む人も多いと思いますが、日本全体が高齢化してきてますので、おじさんたちがこの地域で死をむかえる、「終の棲家を釜ヶ崎で」という人に寄り添っていけたらな、と思っています。

ー孤独死　生き方は死に方ー

ひと花：この地域で高齢・単身でくらしてらっしゃって、訪問看護ステーションひなたのようなサポートにつながらなかった方や、いろいろなつながりから孤立している方はどうされていると推測されますか

梅田：以前ある雑誌にも書いたのですが、ある患者の訪問看護に伺った時のこと、多量の蠅がたかり悪臭がしていました。患者さんが退院直後だったので、あわてて入院した際の残飯や他の物の臭いと思って掃除をしたのですが、それでも悪臭が続き疑問に思っていたら翌日警察がきて隣人の死後1か月の遺体が発見されたと知らされたいう経験があります。一つの現実です。

ひと花：孤独死ですね。自宅で亡くなってしばらく発見されないという。

梅田：そうです。そういう状況では、死んでいくその人自身ももちろん孤独だろうけれども、たとえば隣の部屋の人やアパート全体、地域全体に「そういう状況の中に、今自分もいる」という不安が広がるのではないか、と思います。周りの人も「ああ、自分もああなっていくのかもしれない」と不安になる。

ひと花：ひと花でもみなさん、そういったことがあると報告してくれます。「きのう同じアパートの人が死んどって、3日経ってたらしいわ」とか。そういう報告を、誰かにせずにいられない。行き場のない不安な気持ちになりますね。

梅田：ひと花にも通っているＴさん。Ｔさんは「梅田さん、1週間に1回で良いから見に来てほしい」と言ってますね。「死んだまま、1ヶ月も経ってたら蠅がたかってえらいことになるやろ。1週間ならまだましやろ」って、だから1週間に1回見に来てほしいと言われています。

ひと花：ひと花でも、金銭管理をさせていただいている方で、週に1度お金を受け取りに来られる方がいるのですが、その方が「もし週1回の金銭管理日に自分が現われなかったら、家に見に来てほしい」とおっしゃっています。ひとりで死んで、周りに迷惑かけるのが心配なんですよね。

梅田：死ぬことで周りの人を困らせてはいけない、と思っている。

ひと花：ひと花センターが開所してから、テレビ取材の依頼がたくさんあるのですが、「孤独死と高齢化」を切り口にした番組がとても多いです。社会問題として大きく問題視されていることがうかがえますが、高齢者の孤独死について現実的にどうしていったらいいと思われますか？

梅田：地域を巡回したり、コミュニティーをしっかりしたりしていくしかないと思っています。人の世話というのは人しかできないと思うのです。なので、歩く、訪ねる。管理人さんがアパートにいるところであれば、ある程度「あの部屋の人は弱っているな」とわかると思うのですが、管理人さんがいないところも多い。釜ヶ崎の場合は生活保護受給の方が多いので生活保護担当者から地域の民間の支援者に情報提供をしていくなどの方法があるのではないかと思うのです。ひと花のような居場所などもたくさん必要だと感じています。

看護師という仕事柄「しんどい」という人に会うと、なにかしなくては！という気持ちを常にもっているのですね。路木(注4)で訪問看護開始時、管理人さんから「住人の方が風邪をこじらせたようなので見てほしい」と依頼がありその人を病院に紹介したり点滴をしたり、お粥を作ったりなど張り切ったのですが、本人から「余計なことしないでほしい」とおしかりを受けた。おせっかいだったのです。

ひと花：一人にしておいてほしい、ということなのでしょうか。

梅田：必要以上なおせっかいだったのでしょう。反省しました。どこまで関わっていくか線引きなどないので難しいし、放っておいたら孤独死もある。生き方は死に方にも通じるのかと、悩みながらもおせっかいを続けています。

たとえばひと花のＦさん(注5)は「みんなに会えて嬉しい」と多くの人を受け入れて関わっておられますが、そうすると多くの人が集まってくる。いろんな人が関わっていける。

Ｆさんは、「みんなにすまない、すまない」といつも言うので「Ｆさん、これお互い様やと思う。みんなも、Ｆさんからもらってるものがある。だから、フェアなんだよ。」と言うと満面の笑顔で「そうか～」って。

ひと花：そうですね。もらっているものがたくさんあります。この事業をしていて、いつも思うことですね。「自分が悪くて保護をもらうようになったのに、また迷惑かけて申し訳ない」と言われる方もおられますけれど、ここで働いてわたしはみなさんの人生の物語やことば、他者への態度などから多くを学び、励まされてきました。与え合い、還し合い、ですね。今日はお話ありがとうございました。

（注1）NPO法人HEALTH　SUPPORT　HINATA
看護職が中心的な会員となったNPO法人で、訪問看護や、健康づくり（健康相談、保健指導等）の事業を行うことにより、活動拠点となる西成区、浪速区の地域住民の健康保持に役立つことが目的。介護保険法、障害者自立支援法その他の医療保険法に基づく訪問看護事業、高齢単身者に対する健康相談、見守り支援事業、お見舞い支援事業、コミュニケーションを図るためのふれあい居場所づくり（1階のサロン）等を行う。NPO法人での設立ということで、単なる営利目的の福祉産業への参入ではなく、透明性のある運営を行い、多くの人々の参加、協力が得られるような組織づくりを行う。

（注2）NPO法人ヘルスサポート大阪（以下ＨＥＳＯ）
大都市に多く暮らす、ホームレスに代表されるような、保健・医療・福祉の谷間に残されて諸施策の手が届きにくい人々の生活を支え、命を守る為に健康支援活動の推進と、地域の関係機関･団体の協力を得て研修･人材養成並びに調査･研究を行い、これらを通して市民が健康で安心して暮らせる社会の創造に寄与することを目的として2006年11月に設立されたNPO法人。

（注3）ドッツ事業
DOTS　(Directly Observed Treatment　Short Course)　とはWHOが提唱している結核抑圧のための戦略。喀痰塗沫陽性患者の服薬を第三者が確認し、治療中断、結核菌の耐性化を防ぎ確実な治癒とします。その結果、新たな結核罹患率を低下させ、結核の撲滅を目指します。

（注4）支援ハウス路木
大阪西成区萩之茶屋に位置するワンルームマンション。高齢者や生活困窮者、生活保護受給者の支援を行っている。マンション内にNPO法人ライフサポート路木、NPO法人HEALTH　SUPPORT　HINATAなどの活動拠点があり、1階にはマンション住民や地域住民に開放されている「おしゃべりサロンHESO」がある。

（注5）Ｆさん：2013年7月ひと花センターに登録。「あっこちゃんの会」に毎月1回顔を出すようになるが、末期の癌とわかり余命宣告を受けられる。その後ひなたの事務所のある支援ハウス路木へ引っ越し、訪問看護と往診での治療をされる。ひと花での関わりから、まざまな人が自宅に訪問し、買い物やごはんづくり、話し相手や見守りをするようになる。Ｆさんは「毎日いろいろな人が訪ねてくれるから、死んでる暇がない」と笑われる。

梅田道子（NPO法人HEALTH　SUPPORT　HINATA　訪問看護師）
2003年佛教大学社会福祉学部卒業。釜ヶ崎の某病院に勤務し、野宿を余儀なくされた患者たちと出会う。ここで聞き取り調査にかかわり、約600人の患者の健康調査を行い、「現状に至る話」を聞き、野宿に至る原因はさまざまな要因により社会的に生み出されたものと気づく。佛教大学で福祉を学び、福祉系の法人に就職し、「健康相談」を通してかかわりを継続。2012年NPO法人HEALTH　SUPPORT　HINATAを設立（理事）。同年、訪問看護ステーションひなた開設（所長）、現在に至る。2013年よりひと花プロジェクト連合体メンバー。趣味は音楽鑑賞、ダンス。

釜ヶ崎で学ぶ者が見た「ひと花センター」

綱島洋之（神戸大学都市安全研究センター）

1.「社会的つながりづくり事業」の背景と意義

本報告書の内容から明らかなように、本事業がさまざまなプログラムや居場所を提供することにより、利用者同士がつながり合い、地域社会の中に居場所を獲得しつつある。これまでの市民活動レベルの取組みと比較すると、行政との協働事業であるため、区役所から提供された情報をもとに登録希望者や地域に効率よくアウトリーチを行える。しかし、多数の利用者を偏りなく受け入れなければならないことに伴う課題は多く、生活保護受給者の居場所を小規模で数多く地域内に開拓するという中長期的な取組みが必要になる。すると、ハコモノや資金の確保という技術的な問題を避けて通ることはできない。このような将来を見据えるのであれば、今のうちに本事業の意義を明確にしておくことが重要になる。本稿では、近年の釜ヶ崎における社会福祉の展開に照らして考えてみたい。

多くの人は、生活保護の申請や受給に伴い、負い目や劣等感などの自己否定感を抱え込んでしまう。この自己否定感を解消するための配慮が、日本の生活保護行政に欠けていると指摘されてきた（注1）。国連社会権規約委員会も勧告を出している。しかし、この問題を放置することにより、日本の生活保護行政は受給者数を抑制してきたようにも見える。国会議員が「生活保護というのは日本の文化からすれば恥です」などと発言しても、全く咎められないどころか喝采を浴びたことからも明らかである。

ある裁判を契機に、釜ヶ崎における生活保護制度の運用が改善され、居宅保護の門戸が拡大された。とは言え、受給者の多くは単身で高齢化したまま年金もない。困窮状態から抜け出す見込みのない受給者が増加したことに、一般市民やマスコミは苛立ちを隠さず、自己責任論に基づくバッシングを加えている。その結果、受給者は近隣住民や地域社会からも孤立を余儀なくされ、時として飲酒や賭博に依存してしまい、さらにバッシングの材料を増やすという悪循環に陥る。このような現状を肌で感じ取り、高齢でも生活保護を受けずに野宿生活を続ける方や路上生活に戻り生活保護を廃止された方も少なくない。NPO法人「自立生活サポートセンターもやい」の稲葉剛氏は、バッシングが自己否定感を強化し、受給者や困窮者の孤独死につながりかねないと警告する（注2）。もちろん「憲法で保障されている生存権の行使なのだから恥じる必要がない」と支援者が客観的に論すことは可能である。しかし、このような観念論を、生活保護を受給したり申請しようとしたりしている当人たちが、どれだけ心から信頼することができるだろうか。バッシングを恐れ、受ければ傷付くのが生身の人間ではないのか。その弱さを前提とした仕組みを作ることはできないだろうか。

この10数年間、野宿状態から居宅保護に移行した人の孤立を防ぐ実践も積み重ねられてきた。釜ヶ崎の「まちづくり」から生まれた「サポーティブハウス」は、常駐の職員が生活相談に応じ、入居者どうしが交流し入居者と地域社会の接点をつくるスペースを設けた（注3）。当事者の主体的な動きも見逃せない。自由な時間を獲得し、「自分はいろいろな人に助けられたから、今度は自分が仲間を助ける番だ」と奮起して他の野宿者のために活動する人が現れた。生活スタイルの変化に伴う困りごとについて相談し合う自助グループが生まれた。いくつかの公園テント村では、元住人の生活保護受給者が、テント村のイベントに参加したりカンパを持参したりしながら、現役住人や若者などテント村に集う仲間たちと交流を続けた。夏祭りや餅つきなど季節ごとのイベントを開催することはもちろん、みんなで栽培した野菜を地域住民に廉価で提供したり、時として元テント村住人が現役や若者とともに芝居や音楽を上演したりと、多様な活動が行われていた。ココルームや「紙芝居劇団むすび」のように、芸術活動を通じて社会関係を再構築する試みも生まれた。

高齢単身者の多くが生活保護を受給した途端、仕事等のやるべきことを失い時間を持て余してしまうと言われてきた（注4）。仲間に出会えないと自己否定感を一人で背負い込むことになり、さらなる孤立を余儀なくされる。その悪循環の結果として「やること」を失うと考えられる。そのとき、多くの人は自己の存在を肯定することに困難を覚える。逆に、仲間とともに社会と関わろうとするとき「やること」は自然と生まれ、弱くても自分の存在に自信を持つことができる。立場を同じくする仲間がいるからこそ自分自身の生存権を信じられるということを、かれら元野宿者たちは明らかにしている。

鈴木亘編『西成特区構想有識者座談会報告書』によれば、西成特区の生活保護改革は、高齢単身者の居場所、仕事および生きがいづくりを中心に考えるべきであるという。「北風的」ではなく「太陽的」な対策を考えるべきであるという記述に、自己否定感の解消という目的意識を見ることができる。そうであるならば「社会的つながりづくり事業」は、仲間と一緒に「やること」を受給者に提供しようという試みであり、事実上、行政機関が既存の市民活動レベルの取組みを継承し始めたという点において画期的である。

2. 課題と展望―居場所から社会へ

スタッフたちは利用者が自己否定感から解放されて主体性を回復していくという変化を実感していたという。西成特区構想が期待していたような、「地域の課題解決に貢献する」ことにより「誇りを取り戻す」、「健康的に時間を使う」ことにより「生活保護費の節約につながる」など、一石二鳥を超える成果も既に現れているが、それらだけにとどまらない可能性が感じられる。

利用者が主体性を回復した先に、どのような展望が開けるのか。実は、本事業の未来形は既に他所で提示されている。例えば、長居公園テント村の活動に端を発した「オシテルヤ」では、生活保護受給者のみならず、現役野宿者や若者が入り混じる居場所が運営され、高齢者の生きる知恵が次世代に継承されようとしている。他にもココルームなど随所で同様の取組みが行われてきた。周囲の人間が教わる姿勢を示しさえすれば、かれら高齢者は教える側に立つことになる。このとき、教える内容は既に蓄積されているから、その人の主体性は自ずと発揮される。本事業が利用者の主体性を社会的に活用しようとするならば、世代を超えて集うことのできる場を築くことが有効であることを、これらの前例は示唆している。行政の委託事業であるがゆえに、予め対象者を限定せざるを得ないことは止むを得ないが、若年者向け就労対策事業と連携を図るなど、対象外の利用希望者に場を開くことが有効であると考えられる。

日本社会を底辺から支え続けた労働者のまちで本事業が実施されているにもかかわらず、プログラムの呼称として「社会参加」や「就業体験」という言葉が使われていることに、私は違和感を覚えていた。しかし利用者は一言も不満を漏らすことなく、新しい「社会」や「就業」を楽しんでいるようである。このような場こそ、基準外の利用希望者、例えば、生きづらさや働きにくさを抱える若者の「社会参加」や「就業体験」の場としてふさわしい。かれらから見れば、利用者は一緒に学んでくれる先生である。例えば、現在、建設労働現場における人材確保や技術継承が社会的課題とされているが、元労働者たちは自らが蓄積してきた技能や知恵を持て余している一方で、経験不足のために建設現場で働く自信がない若者がいる。これら両者を結び付ける場として、ひと花センターのような場所は今後ますます求められるであろう。基本的な身体や工具の使い方から、仕事の覚え方や教わり方、組仕事で相方に配慮すべきこと、職人に怒鳴られたときの気分の切り替え方、昼寝、労働災害など法的トラブルの対処法まで、釜ヶ崎は建設労働のノウハウの宝庫である。もちろん他の分野でも利用者が若者に伝授できることはたくさんある。

このような方向性は、これまでのプログラムの内容を深化することにもつながる。例えば、いわゆる芸術作品のみならず、「地域活動」や「農作業」の中で活用されている知恵や技能、身体の動き自体を、表現として受け止めることは可能である。つまり、何を表現として受け止めるか、表現として受け止めるとはどういうことかを再考することにより、作業と表現の境界は曖昧なものになる。「地域活動」や「農作業」など作業系プログラムと「表現プログラム」のいずれかに苦手意識を持つ利用者に、新たな関心を喚起する可能性がある。また、もし就労に困難をきたしている若者が利用者の身体の動きを表現として受け止めれば、見よう見まねで利用者と一緒に作業しているうちに、いつの間にか自身の身体を動かせるようになるかも知れない。このようにして成功体験を積み重ねることは、若者向けの就労支援において特に重視されている。釜ヶ崎の高齢者は、労働者を引退した後も、表現することを通して社会を支え続ける存在である。

釜ヶ崎の単身高齢者を対象とする施策は、単なる社会福祉の範疇に収まりきるものではない。むしろ、この地域で先進的な社会教育が展開されてきたことに目が向けられてよい。外部から来た人の学習の場としての位置付けが、釜ヶ崎越冬闘争や夏祭りには与えられていた。私事であるが、釜ヶ崎の労働者運動は私自身に突き付けられた闘いであると感じた。そのおかげで、支援活動を自己批判的に省察することを経て、労働者と一緒に農作業で汗を流すことができていると思う。私は釜ヶ崎で「社会参加」や「就業体験」の機会をいただくことができた。また、私が釜ヶ崎を案内した学生は、「貧困や排除を自分自身の問題として考えることを学んだ」「釜ヶ崎は価値観を揺さぶるまちである」「釜ヶ崎の労働者は支援の対象ではなく同じ社会を生きる先輩である。変えるべきは社会である。」などという感想を記している。釜ヶ崎は確実に人間を変えてきた。

釜ヶ崎に蓄積されてきた知恵や実践が、次世代や外部の「社会参加」や「就業体験」に結びつくような場所があれば、釜ヶ崎のまちづくりは豊かになる。そのような場所に発展していく可能性が、ひと花センターには十分に秘められている。

注1）松岡是伸2007「日本の公的扶助における『濫給防止』とスティグマ―生活保護行政のスティグマに対する配慮の有無」『名寄市立大学紀要』vol. 1.
注2）『マガジン9』2012「この人に聞きたい―稲葉剛さんに聞いた（その1）現場から見た『生活保護』バッシングの背景」http://www.magazine9.jp/interv/inaba/index1.php
注3）釜ヶ崎のまち再生フォーラム2003「生活保護による生活再建とサポーティブハウスの役割―サポーティブハウス居住者調査の概要」http://www.kamagasaki-forum.com/ja/sapohouse/sapo-house.pdf
注4）鈴木亘2012（編）『西成特区構想有識者座談会報告書』

まとめにかえて ひと花センターの日常から

聞き手・構成：綱島洋之（神戸大学都市安全研究センター）・原田麻以（ひと花センタースタッフ）

本報告書で紹介されているように、本事業は多数のプログラムから構成されている。発注段階で既定の「職場体験」および「農作業」、「地域活動」、「金銭管理」、「服薬管理」に、連合事業体が考案した「表現プログラム」や「健康教室」などが新たに加わり、さらに、本事業開始後、スタッフや登録メンバーの意向に応じて生まれたプログラムもある。また、それらのプログラムの拠点のみならず、メンバーの居場所としても機能してきた「ひと花センター」の運営自体も重要な業務である。本稿では、各プログラムやひと花センターの運営をスタッフの視点から振り返り、現時点における「ひと花プロジェクト」の成果と課題を明らかにする。そのために、開所時より専従スタッフを務めてきた4名それぞれに、各自が特に重視しているプログラムなどについてヒアリングを実施し、その結果を再構成した。

1. 各プログラムの成果と課題

(1) 地域活動

「西成特区構想有識者座談会」（注1）の時点から言及されていた清掃活動を中心とするプログラムである。清掃や草刈りなどの他にも、小学校や保育園、児童館の運動会の準備、地域の祭りの準備、子供向けイベント開催時の遊具の設営など、地域のニーズに応じて多種多様な活動が展開された。この地域活動プログラムは1回のプログラムあたりの平均参加者数が最も多く、西成特区構想での提言が的を射ていたことを物語る。行政が事業主管であるため、公共の場での作業依頼も多く積極的に活動を展開することができた。

実際に登録メンバーが作業している様子を見ると、生活保護の負い目を払拭したいから、あるいはケースワーカーにやれと言われているからという理由ではなく、やりがいや心地よい疲労感を求めて主体的に参加していることが伺える。他のプログラムと比較すると、清掃作業は屋外で個人の作業空間を確保しながら行うことができるので、社交的に振る舞うことが苦手な人でも気軽に参加することができる。作業した瞬間に成果が見えることがやりがいに結び付く。建設労働や高齢者特別清掃事業（注2）で働いた経験があるメンバーには、違和感なくできる作業である。現役時代ほどではないにしても体力自慢の人も多く、登録メンバーの人たちの「何かをしたい」という欲求が自然な形で地域の中で活かされている。

結果的に「ひと花センターに登録しているメンバー（65歳以上の生活保護受給者）にもこれだけの力がある」という事実が地域の中で知られるようになり、町会や地域で活動する団体などから反響がある。町会の役員の中にも、受給者との接点を作りまちづくりに結びつけたいと考えている方がいる。そういった町会のみなさんと、「何かをしたい」と思いながら活動との接点がなかった単身高齢生活保護受者がつながる接点として本事業は位置づいている。事業が開始され、地域のまちづくりの会議にスタッフが出席すると、町会役員から「ひと花さんありがとう」「また頼むわ」と言われる。メンバーと地域住民の間で直接おしゃべりがはずむという程ではないが、ひと花センターがハブになり、普段接点の少ない単身高齢生活保護受給者とその他地域住民との関わりの場面ができる。顔と名前を覚え合うことができると、自分の存在が認識されていると実感できるようになり、地域で暮らす安心につながる。

今後の目標は、このプログラムを通してつくられたメンバーと地域の組織や個人との接点を手がかりとして、新たな活動が生まれたり、既存の活動が活性化されたり、また地域でくらす単身高齢生活保護受給者と他の住民など地域の当事者自身がそれぞれのもつ技術や力を生かし合い、生きがいをもって暮らすことができるような場が増えていくことである。町会などを代表とする地域側のニーズと、実際には地域住民の多くを占めている高齢生活保護受給者の得意とすることがうまくマッチし、やりがいを求めて多様な人が集まる状況が生まれることが理想的である。

開所当時の面談で、多くの登録希望者が「こんな自分にもできることがあれば何でもしたい」「（区役所や地域に）お世話になっているから何か返したい」「パソコンはできないけれど、体は元気だから掃除や農作業はできます」などということを話していた。「つながり」や「居場所」が欲しい、というよりも「自分でもできることがあればしたい」「ボランティアをしたい」という意見が多く、その声からは「小さなことでも役目を持って生きたい」という生への希求が見えた。そこには「怠けている」「保護費をギャンブルやお酒につぎ込んでいる」といったバッシングとは大きく異なる受給者の姿があった。人は「自分にもやることがある」「自分の役割がある」「自分がここに居ても良い」という環境の中で、自然とつながりや居場所を見つけていくのかもしれない。

(2) 農作業

このプログラムも地域活動と同様、開所以前から決められていた。屋外で体を動かすという点において、前述の地域活動と共通している。農工具を使用する機会があり、肉体労働経験者の知識や技能が活きることも重要な特徴である。さらに、収穫物をみんなで調理して食べたり、地域の児童施設にお裾分けしたり、地域の祭りでふるまって好評を博したりというように、農作業ならではの醍醐味がある。土や作物に触れることでメンバー同士に関わりが生まれたり、メンバーと地域との間のコミュニケーションを図るという当初の目標は、ある程度達成されている。

一方で、生き物を扱うことの難しさは無視できない。決して単純作業ではなく、相応の知識や技能が要求されるので、上手く作業できる人とできない人が出てくる。失敗が怖くておどおどして、作業についていくことに困難を感じている人もいるかも知れない。毎回作業量が一定しているわけではないので、期待して来たものの手持ち無沙汰になることもある。また、清掃作業などとは異なり、その日の作業の成果が後日にならないと実感できない。そのため、つまらないと感じるメンバーもいるはずで、開所時に比べてトーンダウンしている部分もある。改善すべき点として、もう少し作業量を一定させ、なおかつ作業内容を分かりやすくしたい。また、参加メンバーが職業や生活の中で獲得してきた知識や技能を、スタッフの側が十分に引き出せているとは言えず、改善の余地がある。単に講師の指示通りに作業するだけでなく、人間の働きかけに応じて作物が育つ姿を知覚したときの感動を分かち合うなど、「表現プログラム」の要素を取り入れることにより、学ぶ喜びを実感できるプログラムへ発展させていきたい。

(3) 表現

連合体の構成組織であるアートNPO法人ココルーム（p15参照）が、地域で蓄積してきたノウハウに基づいて提供しているプログラム。さまざまなジャンルのワークショップが開催されている。いずれも、登録メンバーが幼いときにはやっていたが、大人になってからはやらなくなった内容ばかりである。「気になっていたことだからやってみようか」と始めてみる人も少なくない。講師は各分野の専門家であり、参加者が飽きないよう、またそれぞれの表現の力が発揮されるようプログラムの進行にも趣向を凝らしている。シンポジウムや地域の文化祭など発表の場も用意されていて、自分たちの作品が好評を博すことで、やりがいを実感することができる。「地域活動」と連動しながら新しい生きがいになりつつある。

「表現プログラム」では、声、絵、字、工作、動作などの形で、メンバーの隠れた個性や才能が表出する。登録メンバーの中には学歴などの面において劣等感を抱えている人もおり、はじめのうちは「絵なんてヘタクソで描けない」「ダンスなんて…」という人もいたが、講師やスタッフが本心から素晴らしいと思える作品が数多く生まれている。これはココルームの活動の中でも経験されてきたことである。「これがああいうふうに見えたのか」というピカソのような絵、色使いが斬新で他にはないような絵、なかなか読めないような個性的な文字、今までの仕事の動作や身体性が活かされたパントマイムなど、登録メンバーの身体性やこころのありようがそのまま表現として現れる。例えば、一般の書道教室であれば修正されるような筆跡を「この文字を直してしまうのはもったいない。」と魅力的な独自性を評価する講師もいる。それでも初めのうちは自信が持てず「それはほめ殺しではないのか」と疑うメンバーもいた。

日常的にスタッフや講師はメンバーの表現を受け止め、またスタッフやボランティアに訪れる人も自分の表現をメンバーに受け止められるという、相互に関わり合う場となった。自分の内にあるものを安心して表現できる状況は、人が人とつながりをもち、関係を築いていく上で土台となると考える。メンバーの中には、自分の体の不具合について、感じているように伝えられなかったり、気を使って症状を隠したりする人もいる。あるいは、日常の中でうまくコミュニケーションが取れ

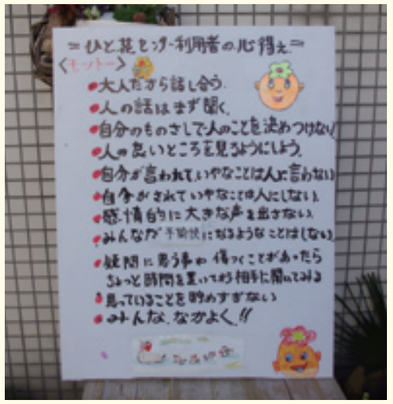
ず、相手の言うことを誤解してしまったり、置かれた状況がわからず混乱したりする人もいた。「わからない」や「不快に感じている」ということをうまく表現できない中で、イライラがつのって感情的になる人、黙ってその場を去る人もいた。しかし、感じていることをことばにしたり、さなざまなかたちで表現する機会を重ねることで、日常的に他の人に自分のきもちを伝えることができるようになったという人もいた。

やがて、「初めてのことで自信はないけれど新聞の記事を書いてみよう」と自発的に思えるようになったり、プロジェクトの説明のための掲示物を自分たちで作成し装飾してみたり、自分たちでつくった芝居を演じてみたりと、活動の幅が急速に広がっていった。表現の機会が少なかったメンバーの潜在能力が自然な形で発揮され、講師や身近なメンバーがそれらを「おもしろい」「良い」と評したこと、またシンポジウムや文化祭などへの参加を通して地域社会にも受け入れられ評価されたことは、メンバーにとって大きな変化であると同時に、ひと花プロジェクトの活動を活発にする大きな原動力であった。体と心が萎縮すると主体性はそがれ、活き活きとした活動は生まれない。だからこそ、体とこころをほぐし、自らを表現していくこのプログラムは必要とされている。また、参加しているメンバーの方が講師よりも年上で人生経験も豊富なため、講師の方が参加者に学ぶところも大きい。「おじさんたちに世界を元気づけてもらおう」とは、ある講師の言葉である。

(4) ゆめひろば・考える会

地域活動や表現プログラム、農作業などさまざまなプログラムを通して、登録メンバー同士で仲間ができたり、関係性もできてきた2013年10月、ひと花センターを地域に開放する日「ひと花ゆめひろば」を開催することにした。「ひと花ゆめひろば」は、月1回1日だけひと花センターを地域に開放し、普段は登録メンバーのみが利用できる場所であるセンターに誰でも来所でき、一緒にたのしむことができるというプログラムだ。ひと花センターとはどんな場所か、どんなことをしていて、どんな人達が活動しているのかを地域の方に知ってもらうという主旨もある。この「ひと花ゆめひろば」は会の名前も内容もメンバーとスタッフが一緒になって考え、メンバーが主役になってつくるプログラムとした。当初は月に2～3回「ひと花考える会」という会の中で「ゆめひろば」の内容を決めたり、準備を行ったりしていた。

そのうち、「ひと花ゆめひろば」だけでなく、ひと花センター全体のことが議題に上るようになり、メンバーの主体性がセンターを変えていくという運営スタイルが確立されている。例えば、「萩之茶屋文化祭」に出演する団体の話題になったときに、メンバーから「自分たちで芝居をつくって参加したい」という意見が出されたことに端を発して、「ひと花笑劇団」の公演が実現した。その後、さらに演技に磨きをかけようということで、「表現プログラム」に「演劇ワークショップ」が付け加えられた。メンバーの新しいニーズに応じてプログラムが多様化するというサイクルが形成されている。また、メンバー間でトラブルが起きた際には、「ひと花考える会」に集まった人で意見を出し合い、センターの「モットー」「目標」をつくった。「禁止事項」や「規則」を貼りだすという意見も出たが、一方で命令形や否定のことばをつかったものが張り出されていると場に緊張感が生まれる、という意見も出た。そこで他のメンバーが、「規則」ではなく名前を「モットー」と「目標」とするのはどうかと提案し、「人の良いところを見つける」「大人だから話し合う」など、前向きに課題に取り組んでいくことば選びをメンバー自身で行なった。ここで決めた「モットー」と「目標」はメンバーがたのしい絵と共にプラダンに書き出し、センター内に張り出してある。



今後は、ミーティングの司会者を登録メンバーで行うなど、さらなる主体性が発揮されていくことで、プロジェクトがより活発になっていくことが予想される。

一方課題として、こうした話合いの出席者が特定のメンバーに固定されがちであることがあげられる。これは本事業全体に共通することなので、後で再び取り上げる。

(5) まとめ

以上で述べてきたプログラムは、それぞれが相補い合う関係にあることが分かる。屋外で体を動かすプログラムには、登録メンバーが狭い部屋から解放されるだけで、既に大きな意味がある。さらに、参加者どうしで手をつないだり対面して詩を詠んだりするなどの他者と関わる行為が苦手なため「表現」のような室内のプログラムに参加しにくいメンバーでも、気兼ねなく参加できる。

一方、「表現プログラム」の成果は、作品として発表することができたり、「ゆめひろば」開催時に来所者と一緒に楽しんだりすることができる。各プログラムに優劣をつける必要はなく、飽くまでバランスが重要である。様々な形で、生活保護受給者や地域住民が参加できるような場があることが望まれる。

2. 「ひと花センター」運営上の成果と課題

上で述べてきたプログラムがない時間帯も、ひと花センターは開所していて、いつでも来所することができる。また、プログラムが進められている傍らで、それに参加せずに別の部屋で寛いでいても構わない。プログラムを仕事や社会貢献活動と考えがちな登録メンバーの中には、何もせずにお茶だけ飲んでいることは敷居が高く感じる人もいる。しかし、以前はプログラムがないと来所する口実がなくてバツが悪いと考えていたが、今はプログラムがなくてもコーヒーを飲みに来ているメンバーもいる。このような単なる居場所としての機能も重要である。行政による財政的支援がありスタッフが常駐する時間が長いため、「ひと花センターに行けば必ず誰かがいる」という安心感を醸成することができている。その一方で、本プロジェクトには大きな課題がある。それは登録者の数とその定着率についてである。本事業では発注段階で「『社会参加』のための支援が必要な者に対する」プログラム、すなわち「金銭・服薬管理」以外のプログラムの登録者数が190名程度と見込まれていた。しかし、実際には2013年度末で登録者数は110名、そのうち定着しているメンバーは40名程度である。現在、しばらく来所していない登録者に対しては、定期的にひと花新聞および月刊スケジュールに手紙を添えて送付しているが、訪問して話を聞くなどの取組みはできていない。

この定着の悪さには、いくつかの理由が考えられる。第一に、現在のひと花センターの物理的容量が限界に達していることである。同時に40人が入れば寿司詰めになる狭小な建物である。登録者数が現時点のままでも、全員が利用できるようにするためには何らかの工夫が必要である。プログラム実施場所を増やしたり、登録メンバーをグループ分けして利用時間帯を分散させたりなど、アイデアはあるものの現在のスタッフ数やプロジェクトの枠組みの中では難しい部分が多い。

第二に、ソフト面における相性の問題である。登録した全ての人の定着をはかることは努力目標ではあるが現実的には困難である。全員に居心地の良い場所や活躍できる機会を提供するためには、さらに多様かつ数多くのプログラムが求められる。また、ひと花センターの出口として地域のさまざまな居場所とつながっていくことが重要であり、これまでにも、「就業体験」や「地域活動」、「表現」などのプログラムを通して、ココルームで寛いだり、町会の囲碁クラブに参加したり、「紙芝居劇団むすび」(p45参照)に加入したりというように、ひと花センター以外にも居場所をもち、日常的に地域の他の場所や組織で活動するメンバーは少なくない。さらに多くの居場所を地域内で開拓することが今後の課題である。

第三に、一度仲の良いグループができてしまうと、それ以外の人が入りづらい雰囲気ができてしまう。ここに居場所づくりの本質的な難しさがある。他者との関わりが得意ではないが、生きがいを必要としている人に提供できるプログラムを考えていく必要がある。登録者の中には、寡黙で集団が苦手な人も多いと感じられる。登録面談のときに「たくさん人がいるところに入るのは…」と遠慮気味で、それ以降に来所しなかった人もいる。また、女性の登録メンバーの中には、男性ばかりの集団の中に入ることに対し躊躇する人があった。他人としゃべることに自信がないために、集団の中に入ることを尻込みしてしまう人も多い。センターが開所した当初は「からだとこころをほぐすワー

クショップ」と「今日の出逢いを体験する」の2つのプログラムを「全員参加プログラム」とし、人との関わりが苦手な人も、そうでない人も一様に他者と関わるプログラムに参加した。

その中で関わりにしんどさを感じたメンバーもいたかもしれないが、一方でプログラムを通して他者との関係をつくり、仲間をつくっていくメンバーもいた。個別の作業が得意なメンバー、たくさんの仲間をつくるメンバー、幅広いプログラムに参加するメンバー、気の合う仲間との関わりや気に入ったプログラムのみに参加するメンバーなど、関わり方は多様だ。それらに優劣や良し悪しはない。人の数だけ場との関わり方があり、その関わり方の幅が担保されていたからこそ、9カ月の間に幅広い展開が生まれたと言える。本年度は、登録メンバーそれぞれが自分に合っていると思える他者との関わりの頻度や度合い、場との関わり方を模索してきた時間であったように感じる。運営側ももちろん手探りの状態でメンバーに負担をかけたてきたが、模索しながらわかってきたことは、つながりづくりの場には多様な人（や生き物たち）との関わりの在り方を固定せず、多様なメンバーの声を聞き話し合い、迷いながらプロジェクトの方向性を見つけていく重要性だった。

但し、多様な関わりを担保するには、ひとりになりたいときになれる場所として喫茶店の個室のような部屋があることや、空間が広く逃げ場があるなど、ハード面での多様さも重要なポイントのひとつであると感じる。また、今よりも多く野外で作業ができるフィールドを開拓していくなどの努力も必要である。さらに、メンバーに対するスタッフの関わり方や、メンバー同士の関係にスタッフがどこまで関与すべきかなどについては、日々模索しながら過ごしている。関係を閉じずに、様々な人と相談し合いながら関係をつむいでいきたい。

居場所づくりがめざすべきは、あくまで集団が苦手でも居られる場所であり、決して集団生活に適応するよう迫ることではない。しかし、人との関わりをそれほど苦に感じていないメンバーのほうが、プロジェクト参加の定着率が高いと思われる現状がある。裏を返せば、人との関わりに苦手意識があり、地域の中でも孤立しがちな人のほうが本事業に定着しにくいと言える。「社会的つながりづくり事業」の役目の大きなひとつが、文字通り「孤立しがちな人」が地域や社会とつながる拠点になることである点を考えると、目的に対してまだまだ力不足を感じる。

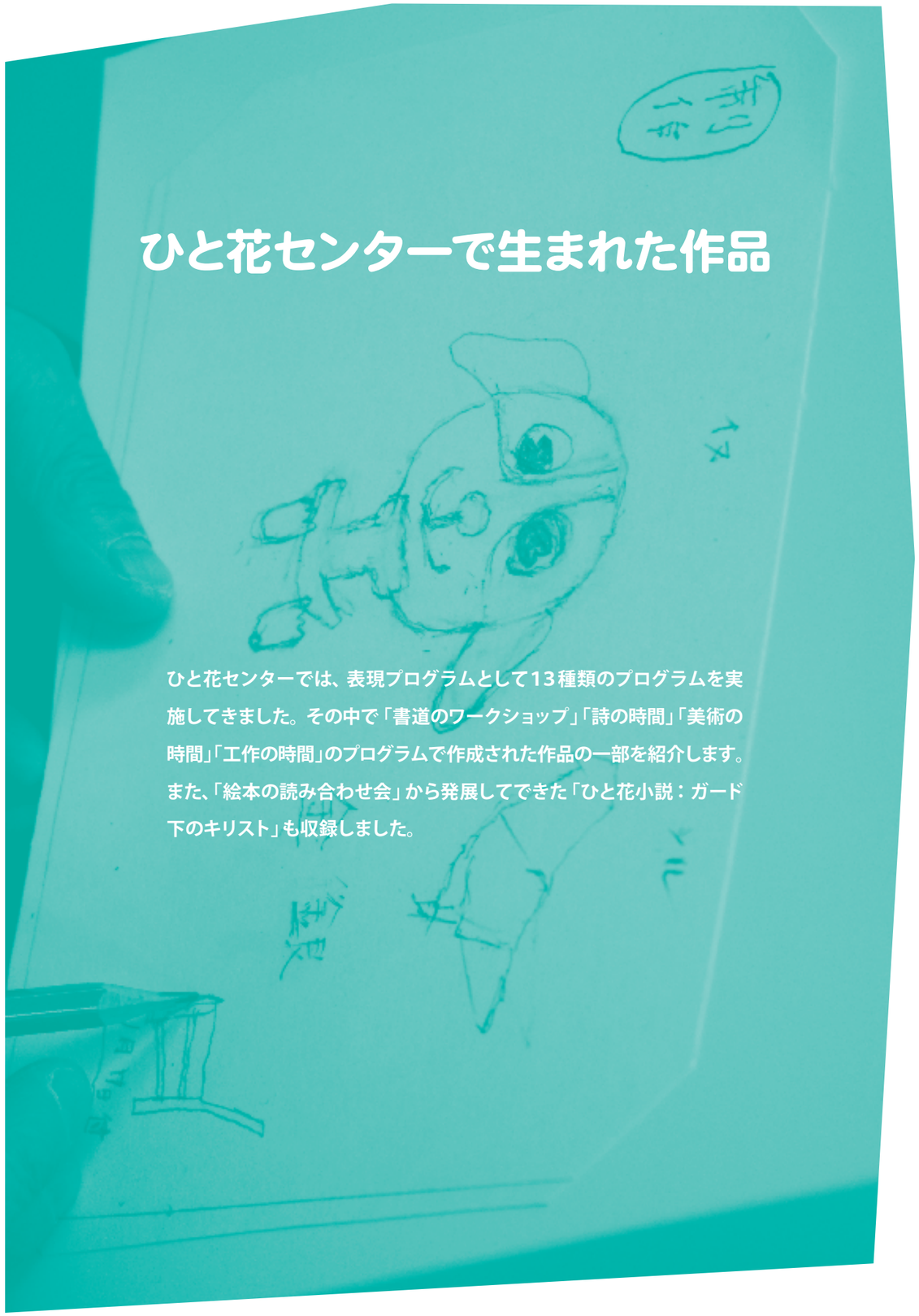
来所が途絶えているメンバーの来所しない理由が何かということは、定かではなく調査を要するが、多くの人が今も近所に居住していることは予想される。さらに多くの登録者の定着を図ることができたのではないかと悔まれる部分もあるが、現在は定着しているメンバーとともに前例をつくり、場を盛り上げ、地域・社会とのつながりを少しずつつくっている段階である。しかし、現在来所が途絶えているメンバーとのつながりづくりに関しても、今後再度の来所をしてもらえるよう訪問を行うなど働きかけと聞き取りを行いたい。さらに、新しいメンバーを迎え入れていく努力を行うと同時に、あらためて再来所につながったメンバーも楽しめるように工夫していきたい。

また、別の課題として、利用を希望するが西成区が定めた基準に該当しない人が多くいるという問題がある。たとえば、「65歳に満たない」「高齢であるが生活保護を受給していない」「西成区に居住していない」などの理由で本プロジェクトに登録・利用できない人がいる。この問題を登録メンバーは他人事で済ませず、どのようにしたら基準外の利用希望者を受け入れられるかを真剣に考えている。確かに基準を決めるのは行政であるが、このようなメンバーの主体性こそ、居場所を持続的に運営するうえで最も大切にしなければならないものではないだろうか。

末筆ながら、このような類の居場所は、これまで各地でボランティアベースの取組みが運営してきた。それらにも行政の支援が始まることを願うと同時に、各現場の担い手と交流していきたいと望んでいる。

（注1）全国的に見てもあいりん地域をはじめ生活保護率が非常に高く、また他の区と比べ特に高齢化が進み、子育て層である若い世代が少ないなどの西成区に存在する多様な課題を解決するために、教育・子育て支援・環境改善・治安・住宅など、各種の支援や優遇措置など、24区一律の施策ではなく、西成区に特に有効な施策を検討し実施・推進する構想。西成特区構想の具体化を進めるため、「西成特区構想有識者座談会」を実施し、目前にある困難な課題に対する短期集中的な対策、将来に向けた中長期的な対策、将来のための投資的プロジェクトや大規模事業の3つの段階にわたり8分野56項目の具体的提言がされた。本事業はこの中の福祉分野で提言され、着手された項目のひとつである。

（注2）釜ヶ崎（あいりん地域）の55歳以上の日雇労働者を雇用して、大阪市内及び府下の施設や道路などの除草・清掃や、保育所の遊具のペンキ塗りなどの作業を実施し、野宿を余儀なくされる高齢労働者に、働いて収入を得られる就労機会の提供する。1994年から始まった大阪府及び大阪市の事業。



ひと花センターで生まれた作品

ひと花センターでは、表現プログラムとして13種類のプログラムを実施してきました。その中で「書道のワークショップ」「詩の時間」「美術の時間」「工作の時間」のプログラムで作成された作品の一部を紹介します。また、「絵本の読み合わせ会」から発展してできた「ひと花小説：ガード下のキリスト」も収録しました。

詩の時間

テーマにそった絵を描いたあと、ふたり一組になってお互いに取材を7分づつおこないます。そのあと15分間で聞いたことを詩にして、相手の絵のそばに添えます。

オモイデのふるさと

バナナの畑を見ながら
石ころの坂道を上ると
わらぶきの我が家。

山ぎわの岩の下で妹と
遊んだ思い出多い我が家。

幼い頃に両親が亡くなり
妹は金持の家に預けられ
幸になり良かったなー
おれは少し苦労もしたが
充分幸になったぞ。
いろいろあったけどな、
まだまだいけるぞ。

（詩）　鈴木　俊夫
（絵と話）亀谷　長孝

ちょうちょう

いなかの畑で
いつも楽しく
ちょうちょとりで
むちうになり
のつぼにはまり
びっくりした、
思いでがある。

（詩）　安田さん
（絵と話）桃太郎侍

自転車二人旅

あれは去年の夏だった
西成を出たのは老兵二人
むこうは四国、ここは淡路島
右に見えるは　サンセットラインに
浮かぶ貨物船
左にあるは　誰が造ったのか竹の家
老兵にはいささかきつい山坂だが
二人でならば心もはずむ
なあ相棒よ、今夜の野宿は海岸にしよう
二泊三日は楽しい旅に
自転車だってはずんでる
今年も来いよ　夏の日よ
なあ相棒よ　行こうよ
あの日の自転車といっしょに

（詩）　浅やん
（絵と話）イケダ

夏の終わり

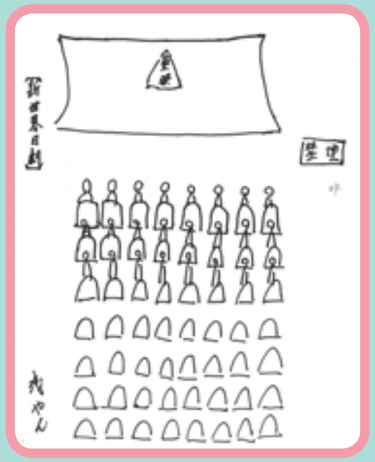
波の華　砕け散り
白き涙の頬伝ふ
吾れ独り波打際で
顔を知らぬ親偲ぶ
初秋の風に松さわぎ
名も知らぬ白き鳥
吾と遊べよ
吾れを彼方へと
連れてっておくれ

（詩）　赤鬼
（絵と話）鹿島

新世界日劇

映画館三度の飯より好きな僕ですが
若かりしころの思いでなつかしい
おたがいに東映のスクリーンに
夢中でしたね。

（詩）　歌人
（絵と話）浅やん



おもいで

よくあそんだ
いなかの
景色
すみれ、たんぽぽ
れんげの花が
心の中にも咲きみだれ
春になれば
桜の花や
想い出の
村の一本松
なつかしいナ、古里。

（詩）　伊賀　末吉
（絵と話）岡村　武蔵

美術の時間　作品紹介　2013年9月～2014年3月

第1回の大きな絵の部分。最初は「まる」や「さんかく」といったかたちを指示の通りに描くところから始め、次第にお互いに指示を出し合い、最終的に自由に画面を埋めて行った。

「美術の時間」の作品紹介

ここでは、ひと花センターの表現プログラム「美術の時間」の作品紹介を行います。

「美術の時間」は、2013年9月より始まり、現在(2014年3月)までに7回のワークショップを行ってきました。この約半年間は、ひと花センターという場所とこの機会で出来ることを探るため、多くの参加者にとって入りやすい「絵を描くこと」を軸に、いろいろな進め方を取って探り探り、プログラムを進めてきました。今回は、「作品紹介」ではあるのですが、これまでに出来た60点以上の作品を個別に見せていくのではなく、これまでの制作の流れを中心に紹介して行こうと思います。

第1回　大きな紙に乗って全員で描く

初回は、参加者、講師、スタッフというその場にいる人のお互いの「感じ」が少しでも掴みやすいよう、「一つの大きな紙の上に参加者全員で乗り、そこにかたちや線を描いていく」ことを行いました。最初はこちらの方から、描いて欲しい単純なかたちや線をゆっくり指示を出していき、それに従って参加者の方に、自分の乗った紙の上に線やかたちを描いていってもらいました。例えば、「自分を囲む丸い線を描いて下さい」「大きい三角を描いて下さい」といった指示を出すのですが、一人一人の受け止め方や解釈によって、異なる線が紙の上に現れてきます。場合によって(特に進んでいくに従って)、自分の描く線と他の人の線や体が干渉することも出てきます。そうやって、体を動かすこと、かたちや色を出すこと、それらが変化したりお互いに関わることに慣れてもらうことを目的に設定しました。次第に指示を出すのを、参加者の方にまかせ、順にお互いの出した指示に反応していくというかたちで進め、最後は時間いっぱいまで自由に描きあげて行きました。

第2、3回 大きな紙に描く／第4回 リレードローイング

次の回では2回連続して、今度は個別に大きな紙を渡し、最初の線を引くきっかけを出して、あとは画面全体を埋めることを目標にして、自由に絵を描いてもらいました。個人で描くことで、それぞれの参加者の特徴が何かしら見えてくるのでは、という期待から設定しました。半切サイズの比較的大きな紙だったのですが、それぞれの集中力や体力、アイディアや工夫の仕方が垣間みられて、それぞれの特徴が次第に見えてきました。その次では逆に、参加者全員でゲームの様に絵を書き進めていきました。描くものを参加者の方に順に提案してもらい、制限時間の中で描き、終わると次の人に回すという方法で進めました。話しながらゲームの様に進めていくので、出てくる「財布を拾った時の気持ち」「生まれ変わったらなりたい動物」といったお題を、それに反応した会話と共に進めていくことが面白かったです。会話の流れややりとりの端々に、それぞれの人生経験や、お互いへの気遣いなどがちらほら見えて来ました。

第5回～現在　室内壁画を描いてみる

2013年内に、個人での制作、複数人での即興的なやりとりをしながらの制作を行うことが出来ていたので、年明けからは少し時間をかけて、「室内壁画の制作」というものを、いくつかの段階に分けて進めていくことに挑戦しています。

参加者は初回に、壁画を描く予定の壁を画用紙の上に自分で描き、そこに自分の思いつく壁画のアイディアを描いていきました。またそれ以降は、自分以外の人の絵を2つ、自分なりに組み合わせて、新しいアイディアを作ります。他の人の描いた絵の一部のウネウネしたかたちが、もう一つ別の絵の富士山と隣合うことで色を変えて琵琶湖になったり、他の人の花畑の描き方を試すうちに、新しい描き方が画面全体に広がっていったり、同じ元の絵を使っていても人により全く雰囲気の異なる絵になって出てきたり、次第に参加者全員の中で壁画のアイディアが発酵していきます。それらの集まりを元に、一つの作品を作っていくということを、いろいろ試しながら進めていっています。たばこ休憩に外へ出ていたおじさんが部屋に戻ってくるなり、「うわー、ここは明るいなぁ、目がチカチカするわ」と話されていた事がありました。確かに、皆さんが部屋の中のブルーシートの上のあちらこちらでうずくまり、黙々と華やかな色の絵を描いている姿や、その中で賑やかに過ごす時間には、街が外に纏っているイメージと反応を起こしてか、なんとも言えない不思議な感覚になることがあります。ひと花センターを出て、地下鉄に乗るまでの道での街やすれ違う人たちへの印象も、行きと帰りでは違った想像力が働きます。

半年過ぎたとはいえ、まだまだここで生まれるものの全貌は見えてきません。今後も「美術の時間」から出てくる作品や体験が、どう展開し、どんな想像や感覚をその周りに生み出していくのか、楽しみにしています。

(2014.3.30　前川紘士)

①第1回。様子を見るために、大きな紙の上に乗って全員で絵を描いた。2時間でどれくらい進むのか分からないまま始めたが、結局時間内に約3x3mの大きなパステル画が完成した。 ②③第2回、3回。一人一人が大きな紙に、最初に内と外を分ける枠を描き、その後内と外を自由に描いた絵。 ④⑤第3回。前回の絵の続きを描いた時に、前回不在だった人は半分のサイズの絵を描いた。参加者は固定では無いため、その都度柔軟に対応して進める。⑥⑦絵を描くのはこどもの頃以来、と言われる方も沢山。⑧第4回。リレードローイング。参加者が順に「お題」を出し、その「お題」に対応したモチーフを各自の手持ちの紙に描き、順番に次の人へ回すことを繰り返し完成した絵。テーマは「お通じ／川、宝物、仕事道具、椅子、好きな場所の風景、車、財布を拾った時の気持ち、今度生まれ変わった時になりたい生き物、嫌いな食べ物、モデル、星」など。 ⑨⑩第5回。こ

の回からしばらく、1回で完結するのではなく、少し長い期間をかけて一つの作品を作っていくことに挑戦。ひと花センターの室内の一面の壁に、全員で一つの「壁画」を描いてみる。その為の最初の回は、一人一人が個別に、壁画のアイディアを描いていく。 思わぬイメージが飛び出してきて面白い。⑩明治政府に処刑にあった江藤新平。彼にまつわるエピソードも教えて下さる。絵はこの時点ではまだ未完成。⑪⑫⑬⑭⑮第6回、7回。自分「以外」の人が出した壁画のアイディアを2つ選び、その絵を元に、2つの絵を「合成」した新しい絵を描いてみる。人の絵を元に、自分の感性で新しい絵を作り出す。⑯次第に部屋に絵が増え、空間を変えて行く。描かれた絵は、可能な限りストックしていく。

書のワークショップ

月一回の墨の時間。毎回テーマを作って作品制作を行います。葉書に書いたり大きな紙に三人で一文字づつ書いてみたり。身体をつかい、こころを動かす時間です。

工作の時間

8月　貯金箱

9月　宝箱

10月　写真立て

11月　クリスマス飾り

12月　クリスマスツリー

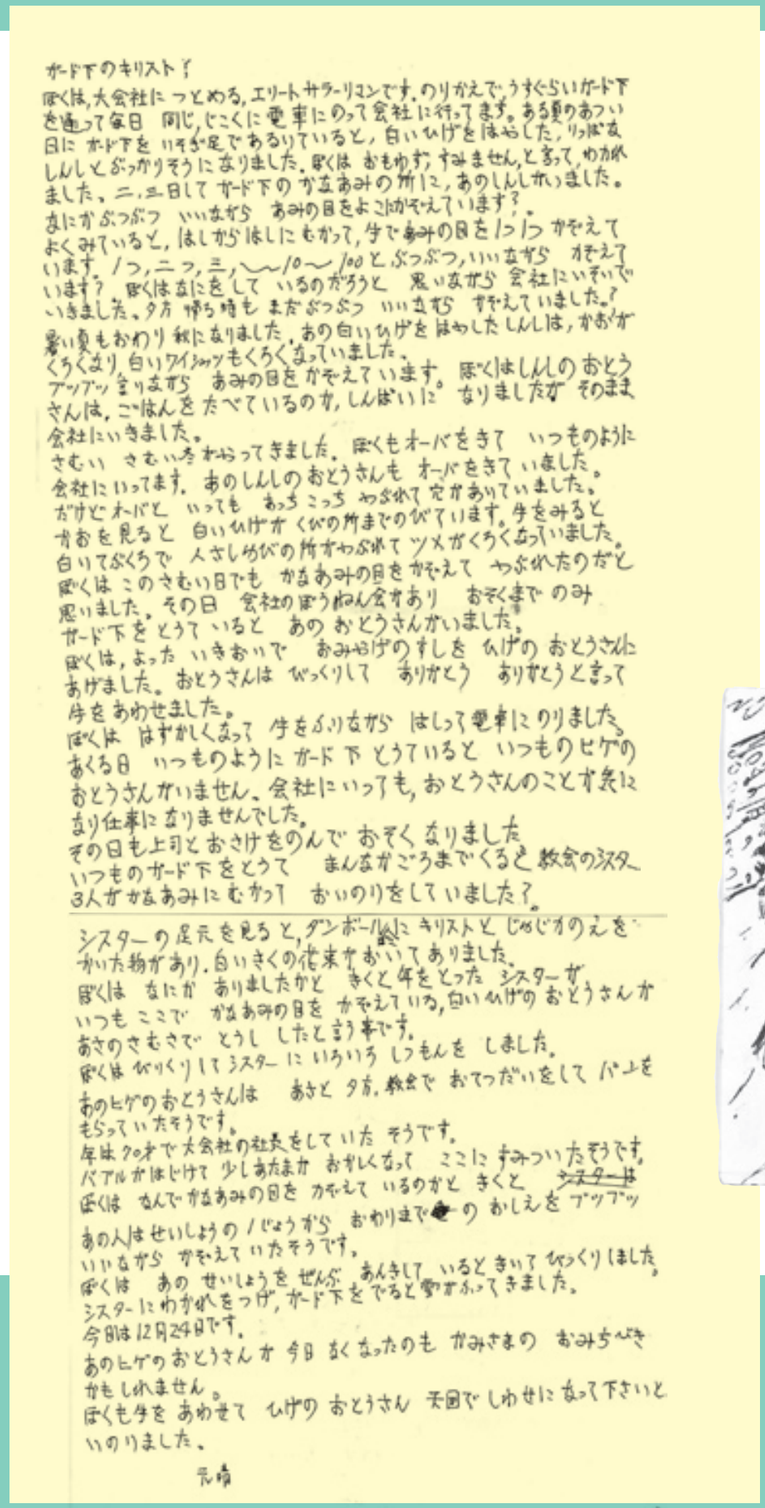
1月　節分のお面

2月　ひな人形

3月　桜の木

絵本の読み合わせ会から発展

ひと花小説：ガード下のキリスト



ガード下のキリスト？

ぼくは、大会社につとめる、エリートサラーリマンです。のりかえで、うすぐらいガード下を通って毎日　同じ、じこくに電車にのって会社に行ってます。ある夏のあつい日に　ガード下を　いそぎ足であるいていると、白いひげをはやした、りっぱな　ししと　ぶつかりそうになりました。ぼくは　おもわず、すみません、と言って、わかれました。二、三日して　ガード下の　かべあみの所に、あのししがいました。
なにか　ぶつぶつ　いいながら　あみの目をよこぼかぞえています？。
よくみていると、はしから　はしにもかって、手で　あみの目を　1つ1つ　かぞえています。1つ、二つ、三、〜〜10〜100と　ぶつぶつ、いいながら　かぞえています？　ぼくは　なにをして　いるのかろうと　思いながら　会社にいそぎいきました。夕方　帰り時も　まだ　ぶつぶつ　いいながら　すぞえていました。？
暑い夏もおわり　秋になりました、あの白いひげをはやしたししは、かぜがくろくなり　白いワイシャツもくろくなっていました。
アップアップ　言いながら　あみの目をかぞえています。ぼくはししのおとうさんは、ごはんを　たべているのか、しんぱいに　なりましたが　そのまま会社にいきました。
さむい　さむい冬がやってきました。ぼくもオーバをきて　いつものように会社にいってます。あのししのおとうさんも　オーバをきていました。
ぶかぶかオーバと　いっても　あっち　こっち　やぶれて　穴があいていました。
背おを見ると　白いひげが　くびの所までのびています。手をみると　白いてぶくろで　人さしゆびの所がやぶれて　ツメがくろくなっていました。
ぼくは　このさむい日でも　かなあみの目を　かぞえて　やぶれたりだと　思いました。その日　会社のぼうねん会があり　おそくまで　のみ
ガード下をとうて　いると　あの　おとうさんがいました。
ぼくは、よった　いきおいで　おみやげのすしを　ひげの　おとうさんにあげました。おとうさんは　びっくりして　ありがとう　ありがとうと言って　手をあわせました。
ぼくは　はずかしくなって　手をふりながら　はしって電車にのりました。
あくる日　いつものように　ガード下　とうていると　いつもの　ヒゲのおとうさんがいません。会社にいっても、おとうさんのことが気になり仕事になりませんでした。
その日も上司とおさけをのんで　おそくなりました
いつものガード下をとうて　まんなかごろまでくると　教会のシスター3人が　かなあみに　むかって　おいのりをしていました？。

シスターの足元を見ると、ダンボールに　キリストと　じぞうのえを　かいた物があり、白いきくの花束がおいてありました。
ぼくは　なにが　ありましたかと　きくと　年をとった　シスターが　いつも　ここで　かなあみの目を　かぞえている、白いひげの　おとうさんが　あさのさむさで　とうし　したと言う事です。
ぼくは　びっくりして　シスターに　いろいろ　しつもんを　しました。
あのヒゲのおとうさんは　あさと　夕方、教会で　おてつだいをして　パンを　もらっていたそうです。
年は　70才で　大会社の　社長をしていた　そうです。
バブルがはじけて　少しあたまが　おかしくなって　ここに　すみついたそうです。
ぼくは　なんで　かなあみの目を　かぞえて　いるのかと　きくと　~~シスターは~~
あの人は　せいしょうの　1ぶんが　おわるまで　の　おしえを　ブツブツ　いいながら　かぞえていたそうです。
ぼくは　あの　せいしょうを　ぜんぶ　あんきして　いると　きいて　びっくりしました。
シスターにわかれをつげ、ガード下をでると　雪がふってきました。
今日は12月24日です。
あのヒゲのおとうさんが　今日　なくなったのも　かみさまの　おみちびきかもしれません。
ぼくも　手を　あわせて　ひげの　おとうさん　天国で　しあわせになって下さいと　いのりました。

完

調査・論考

2014年2月中旬から3月初旬にかけ、大阪市立大学都市研究プラザと協同で、ひと花センター登録メンバー30人にヒアリング調査を行いました。本稿ではその結果及び分析を掲載します。また、調査の設計及び分析を行った大阪市立大学研究員・稲田七海さんによる論考も収録しました。

ひと花センター利用者実態調査の実施と結果について

稲田七海（大阪市立大学都市研究プラザ特別研究員）

1）調査の目的

ひと花センターが2013年7月に開設して約半年が経過しました。本調査は、ひと花センター利用者を対象に、この半年間におけるセンターの利用状況および利用者の属性と生活状況を明らかにすることを目的としています。ひと花センターはどのような人たちが利用し、利用者にとってどのような居場所となっているのか。さらに、ひと花センターを利用するようになって、利用者にどのような変化があったのか。これらのことを把握することで、ひと花センターの今後の事業のあり方や方向性を探る手がかりとすることを目的としています。

2）調査実施期間

2014年2月中旬～2014年3月初旬

3）調査対象者

ひと花センターを訪れた利用者に調査の協力を依頼し、職員と利用者の面接形式でアンケート調査を実施しました。また、利用者属性を補足する基礎情報を職員に作成してもらいました。

1. ひと花センターに来ているのはどのような人か？

1）性別、年齢、学歴

はじめに、ひと花センター利用者がどのような人たちなのか、属性について簡単に見ていきます。今回のアンケート回答者は30人、性別はすべて男性でした。年齢についてみてみると、平均年齢が69歳（最年少64歳、最年長76歳）、年齢構成は、65歳以上70歳以下が最も多く全体の50%を占めます（図1-1）。また、70歳以上75歳以下が40%となっており、65歳以上75歳未満が9割を占めます。

最終学歴は、小卒・中卒者がそれぞれ3%と53%とあわせて半数以上を占める一方で、大卒以上は7%確認できます（図1-3）。

2）生活保護

生活保護受給年数をみると、2年以上5年未満が43.3%と最も多く、2年未満も含めると約6割が受給開始から5年未満となっています（図1-2）。

3）住まい

利用者の住まいについてみてみると、全員が賃貸住宅に住んでいます。一般的な賃貸アパートで木造住宅が10.0%、鉄骨・鉄筋コンクリート住宅が50.0%、そして、40.0%が簡易宿泊所転用型のアパートに居住しています（図1-4）。次に住宅の広さを見ると、部屋の総面積は2畳から10畳まで幅があり、平均は4.7畳となっており、3畳、4.5畳、6畳の割合が高くなっています（図1-5）。

図1-1　年齢構成

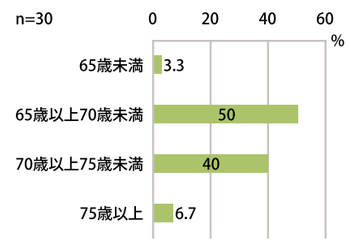


図1-2　生活保護受給年数

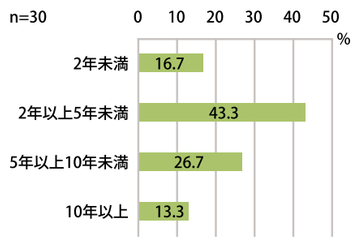


図1-3　最終学歴

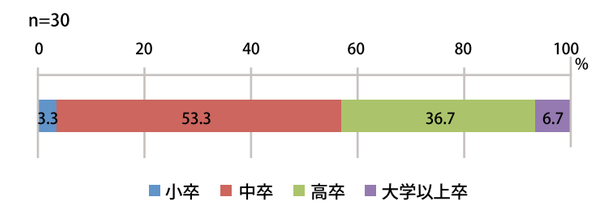


図1-4　住宅の形態

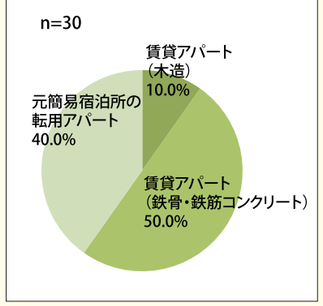
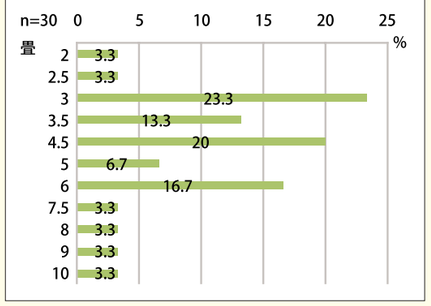


図1-5　住宅の広さ（畳の総数）



2．健康状態

1）最近の健康状態

最近の健康状態については、56.7%が「ふつう」と答えています。「あまりよくない」「よくない」があわせて20.0%、「よい」が23.3%確認できます（図2-1）。体に不自由や、何らかの不安を感じていると答えた人はそれぞれ40%程度確認できます（図2-2、図2-3）。自由記述欄を設けて具体的な状況についてたずねてみたところ、聴力、視力、関節痛などの機能的な部分で体に不自由を感じている人が多く、健康状況と将来的展望について不安を抱えている人が多いことが確認できました。

図2-1　最近の健康状態

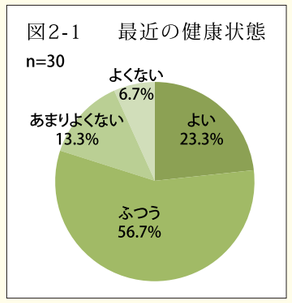


図2-2　体の不自由

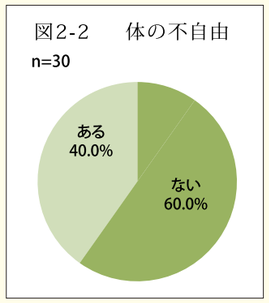
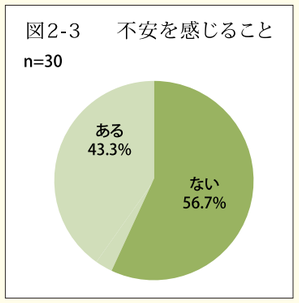


図2-3　不安を感じること



2）治療中の病気と通院

治療中の病気については63.3%が「ある」と答えています（図2-4）。具体的には高血圧症や腰痛などの症状を持つ人が多くなっています。あると答えた人のうち、通院している人は94.7%ですが、通院していない人も5.3%確認できます（図2-5）。通院している人の1ヶ月たりの通院回数は、2～3回が38.9%と最も多くなっています（図2-6）。

図2-4　治療中の病気

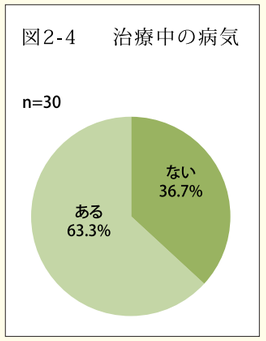


図2-5　通院の有無

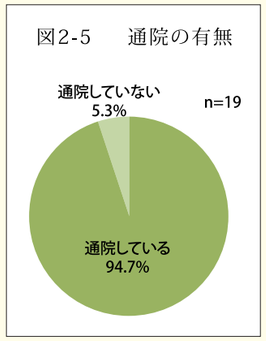
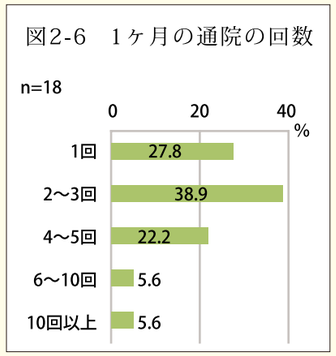


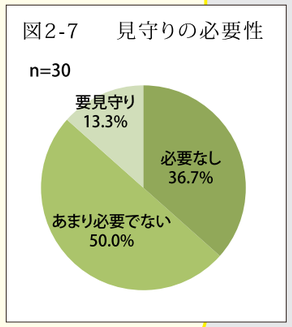
図2-6　1ヶ月の通院の回数



3）見守りの必要性

それぞれの回答者について見守りの必要性をひと花センター職員が判断したところ、36.7%が「必要なし」となっていますが、「要見守り」が13.3%、「あまり必要でない」ものの、問題なしとまでは判断できない利用者が50.0%となっています（図2-7）。

図2-7　見守りの必要性



3．生活状況

1）お金について

図1-2で示したように、受給年数は5年未満が多くを占めることから、生活保護を受給してから日の浅い人たちが多いことがうかがえます。保護費の金額については、53.3%が「なんとか足りている」、13.3%が「足りていない」と回答しています（図3-1）。

また、86.7%の人が生活保護費をやりくりするために何らかの工夫をしています（図3-2-1）。具体的には、自炊する、安売りの店で買い物をするなどの食生活に関する部分での節約のほか、お酒やギャンブルなどの嗜好品や賭け事を控えるなどの工夫を行っている人が多くみられます（図3-2-2）。

図3-1　お金は足りているか？

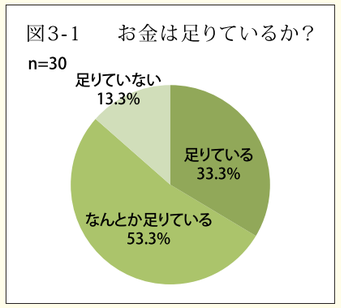


図3-2-1　節約のために工夫していること

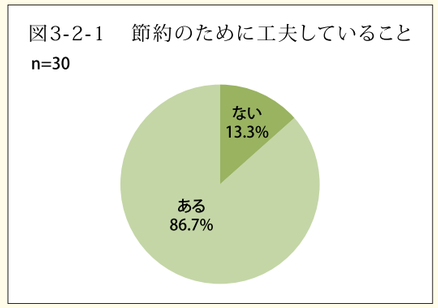
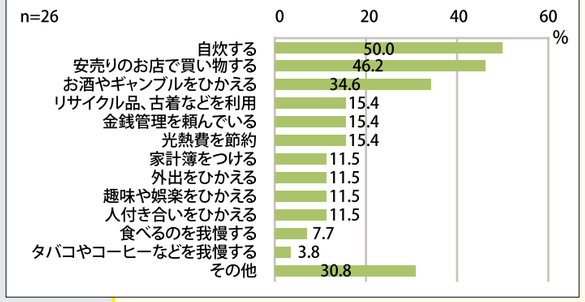


図3-2-2　節約のために工夫していること（具体例）



2）人付き合いやつながりについて

まず、近隣との付き合いにつては、挨拶を交わす程度（56.7%）、立ち話程度の付き合い（20.0%）と答えた人が合計70%を超え、全体的に近隣との付き合いは浅いことがうかがえます。一方で、困り事の相談（6.7%）や、ものの貸し借りや簡単な頼み事をする（3.3%）ような、親密度の高いつきあいをしている人は合計10%確認できますが、全く付き合いのない人も10%確認できます（図3-3）。

図3-3　近所との付き合い

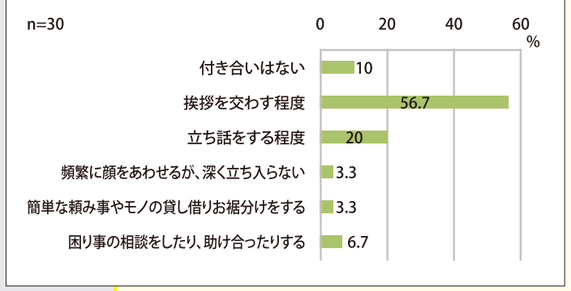
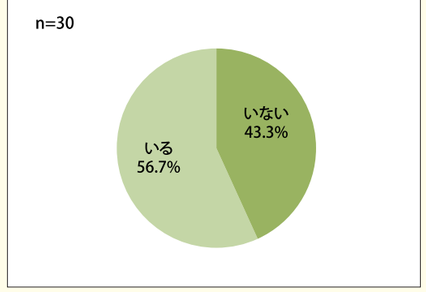


図3-4　共通の話題や趣味をもつ友人



次に、共通の話題や趣味を持つ友人について、「いる」と答えた人は56.7%、「いない」と答えた人は43.3%となっており、半数ちかくの人が親しい友人がいないという状況にあります（図3-4）。

こうした付き合いの中で、困り事がある時に相談できるような人が存在するのかについて尋ねてみたところ、相談ができる人が「いる」と答えた人は60.0%、「いない」と答えた人は40.0%です（図3-5-1）。

さらに、困り事の相談相手がどのような人かたずねてみたところ、友人・知人が55.6%と最も多く、次にひと花センターの職員が44.4%と続き、3番目に福祉事務所のケースワーカーが22.2%と続きます（図3-5-2）。困り事がある場合は、公的な機関に相談する前に、友人・知人や、日常的に顔を合わすことのできるひと花センターの職員などの身近なつながりを頼る傾向にあるようです。

図3-5-1　困りごとを相談できる人

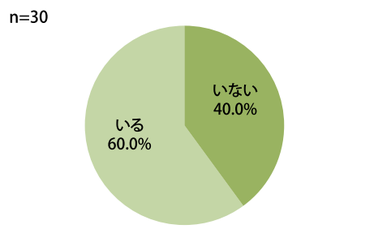
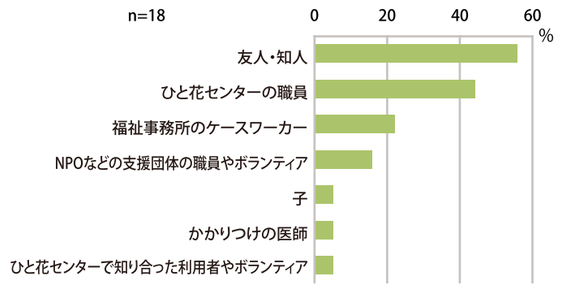


図3-5-2　困りごとの相談相手（具体例）



3）日頃の楽しみについて

日頃の楽しみについては93.3%が「ある」、6.7%が「ない」となっています（図3-6-1）。日々の楽しみとしては、ひと花センターでの活動が最も多く、次に趣味や娯楽に関する活動が続きます（図3-6-2）。楽しみの中には、お酒やギャンブルをあげている人たちも確認できます。飲酒、ギャンブルの習慣については、飲酒の習慣がある人は60.0%、ギャンブルの習慣がある人は53.0%となっています（図3-7）。

図3-6-1　日頃の楽しみ

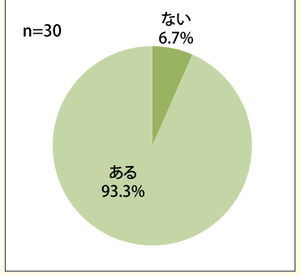


図3-6-2　日頃の楽しみ（具体例）

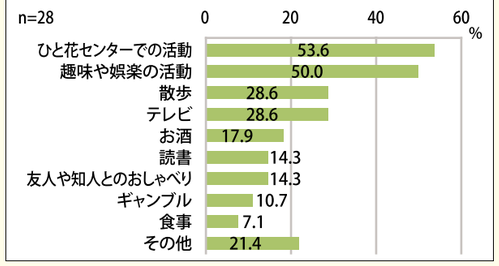
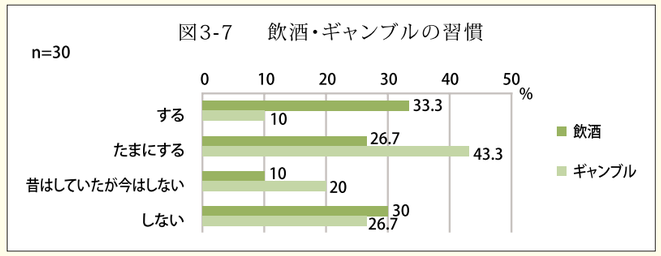


図3-7　飲酒・ギャンブルの習慣

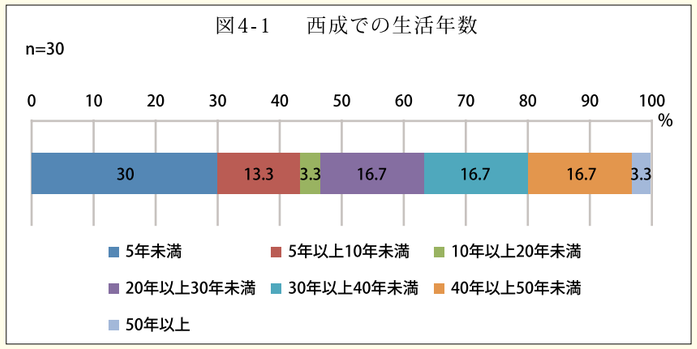


4．地域とのかかわり

1）西成での生活期間ときっかけ

次に地域での生活について見ていきます。まず、利用者の西成に住み続けている期間については、2014年3月現在で1ヶ月未満から50年以上とかなりの幅とばらつきがあります。図をみると20年以上西成で生活している人が半数以上にのぼりますが、一方で西成での生活を始めて5年未満とまだ日が浅い人が3分の1を占めることがわかります（図4-1）。

図4-1　西成での生活年数



西成で生活を始めるきっかけは、あいりん地区で仕事をするためと答えたが人が56.7%と半数以上を占めます。その一方で、アパート等で生活保護を受給するために西成にやってきた人たちは13.3%に留まります（図4-2）。その他の理由の中には、友人が住んでいたから西成にやってきたと答えた人が数人確認できました。

さらに、生活年数区分別に生活を始めたきっかけを見てみると、生活年数が10年未満では、アパート等で生活保護を受給するために西成にやってきた人がそれぞれ20～30%以上確認できます。しかし、生活年数が10年以上になると、生活保護受給がきっかけとなっているケースは確認できません（図4-3）。

図4-2　西成で生活をはじめたきっかけ

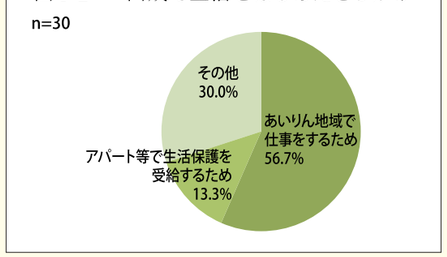
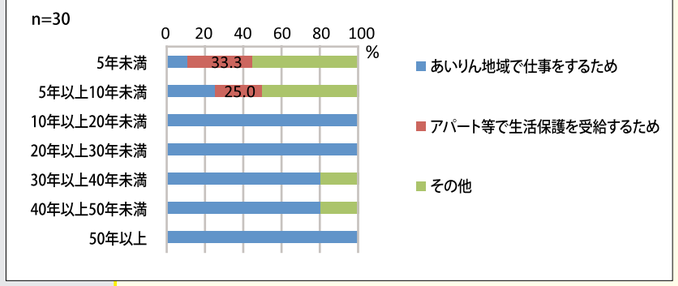


図4-3　生活年数と西成で生活をはじめたきっかけ



2）地域での活動について

次に、地域生活についてみていきます。地域での行事や活動への参加に関しては、よくしているが16.7%、ある程度よくしているが23.3%となり、参加をしている人は合計で40％確認できます（図4-4）。活動内容についてみてみると、ボランティア活動が突出して高く66.7%を占めます。その他、地域のお祭りなどの伝統行事、趣味や娯楽に関する活動があわせて約40%を占めています（図4-5）。

こうした活動に参加するきっかけとしては、ひと花センターでの活動を通して参加と答えた人が58.3%となっています。その他、NPOなどの支援団体関連の人にすすめられて参加している人が25.0%となっており、ひと花センターや支援団体をとおして地域の活動に参加する人が8割以上を占めます（図4-6）。

このようにボランティア活動への参加が多い背景には、利用者の地域のために役に立ちたちという思いが反映されていると考えることができます。図4-7をみると、利用者の80%が地域の役に立ちたいという意識を持っていることがわかります。

図4-4　地域での行事や活動への参加

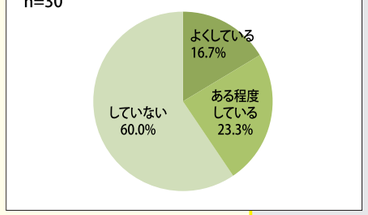


図4-5　活動内容

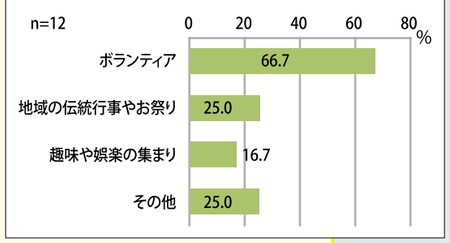


図4-7　地域の役に立ちたいか？

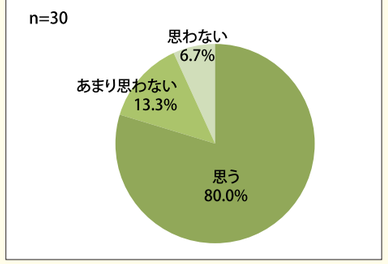
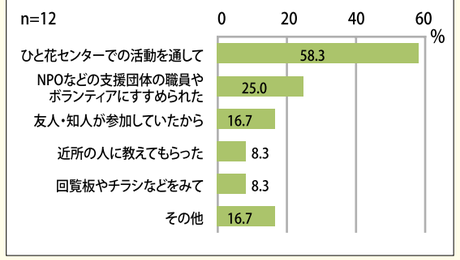


図4-6　活動のきっかけ



5．ひと花センターの利用について

1）利用実態について

ここでは、ひと花センターの利用実態についてみていきます。まず、1週間のうちひと花センターに通う回数は、1～2回が46.7%、3～4回が23.3%、ほぼ毎日が30.0%となっています（図5-1）。ひと花センターに通ういちばんの目的については、「プログラムへ参加するため」が36.7%、「地域や社会に貢献をするため」が23.3%となっています（図5-2）。

楽しみにしているプログラムについてみてみると、公園の草刈りや地域清掃活動が53.3%と最も多く、次に農作業（46.7%）、レクリエーション（43.3%）と続きますが、単に居場所としてひと花センターで過すことを楽しみにしている人も33.3%確認できます（図5-3）。

図5-1　ひと花センターに通う回数（週あたり）

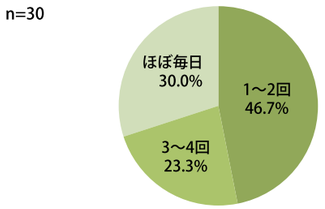


図5-2　ひと花センターに通ういちばんの目的

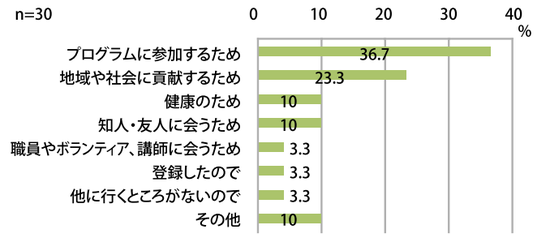
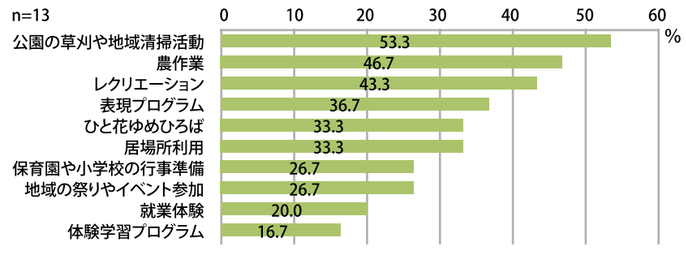


図5-3　楽しみにしているプログラム



また、ひと花センター以外に通う場所の有無について訪ねたところ、「ある」が43.3%、「ない」が56.7%となっており、ひと花センター以外に定期的に通える場所を持たない人が半数以上確認できました（図5-4-1）。

あると答えた人のうち、具体的な通い先は、NPOや支援団体の相談室が30.8%、ふるさとの家とココルームがぞれぞれ23.1%となっています（図5-4-2）。また、その他が30.8%と多くを占めていますが、この内訳は図書館と喫茶店となっています。

図5-4-1　ひと花センター以外に通う場所

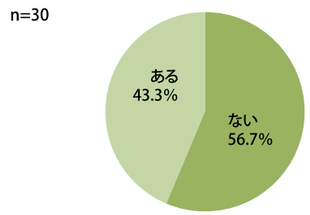
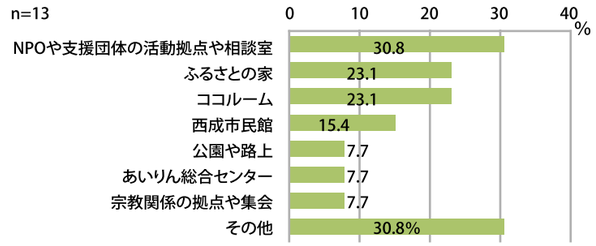


図5-4-2　ひと花センター以外に通う場所（具体例）



2）ひと花センターはどのような居場所か

ひと花センターが利用者にとってどのような居場所になっているかということについてみていきます。アンケートでは、居場所としての意味を示す26項目（図5-5）を用意し、1. 現状として当てはまるもの、2. 現状として最も当てはまるもの、3. 現状はそうではないが今後の希望として当てはまるもの、をそれぞれ選んでもらいました。ここでは、1から3についてそれぞれの上位5～6位までの項目を示しています。

まず、「1. 当てはまる」については、「楽しいと感じる場」「安心できる場所」「素直にいられる場」「幸せを感じる場」が上位に確認できます（図5-6）。

次に、「2. 最も当てはまる」については、「楽しいと感じる場」が最上位ですが、2位以下は、「仲間がいる・活動メンバーであると感じる場」と「多くの人とのつながりが感じられる場」を選択した人がそれぞれ7割以上確認できます（図5-7）。

図5-5　居場所としての意味を示す26項目一覧

1 楽しいと感じる場
2 安心できる場
3 素直にいられる場
4 幸せを感じる場
5 仲間がいる・活動のメンバーであると感じる場
6 多くの人とのつながりが感じられる場
7 自由だと感じる場
8 自分らしくいられる場
9 自分をわかって（理解して）くれる人がいる場
10 ボーッとできる場
11 自分について考えることができる場
12 人から受け入れられていると感じる場
13 チャレンジ（挑戦）することができる場
14 日常（生活）から離れることができる場
15 役に立っていると感じる場
16 自分の好きなように出来る場
17 自分だけの時間を持つことができる場
18 自分に自信が持てる場
19 この場所には自分の役割があると感じる場
20 自分の力が発揮できる場
21 自分が成長できると感じる場
22 生活（費）の足しになる場
23 他人に気をつかわなくていい場
24 他人のペースに合わせなくてよい場
25 ほしいものが手に入る、もらえる場
26 その他

図5-6　現状として当てはまる

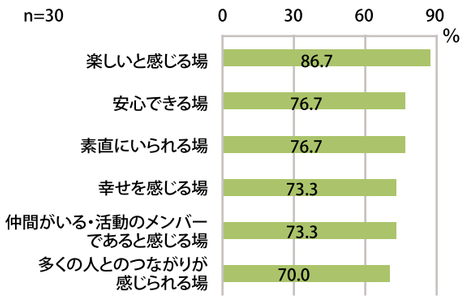
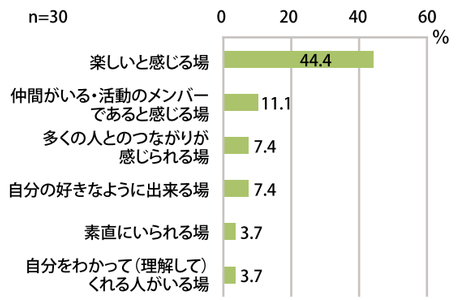


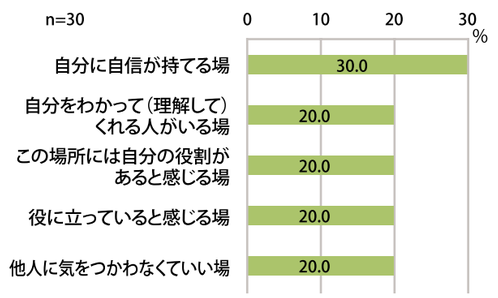
図5-7　現状として最も当てはまる



最後に、「3. 現状はそうではないが今後の希望として当てはまるもの」については、最上位が「自分に自信が持てる場」となっており、「自分をわかってくれる人がいる場」「この場所には自分の役割があると感じる場」が続きます（図5-8）。

利用者にとってのひと花センターは、現状では、仲間がいて人とつながりが感じられる楽しい居場所であるが、今後は自分に自信が持てて役に立てていると感じられる場になるとよい、という希望が強いことがわかります。

図5-8　今後の希望として当てはまる



3）ひと花センターを利用して変化したこと

ひと花センターを利用して変化したことについてみていきます。アンケートでは、健康や生活のリズムに関すること、食生活や身の回りのこと、地域での活動やコミュニケーションに関する24項目について5段階で評価してもらいました)。また、ひと花センター職員の客観的評価による利用者の変化についてもあわせてみていきます。

まず、職員の判断による利用者の変化については、40.0%の利用者に対して「大きな変化」が確認でき、56.7%の利用者に対して「変化の兆しが現れつつある」となっており、利用者の大部分に何らかの変化があったと判断しています（図6-1）。

次に、利用者による評価をみると、まず、健康や身の回りのことに関して最も変化が見られたのは、「精神的な落ち着き」（「よくなった」「とてもよくなった」の合計73.4%、以下同様）となっています。このほか、「物事を前向きに考えられる」（60.0%）、「生活のリズム」（63.3%）、「自分自身の体調や気持ちを気づかう」（53.3%）などが、ひと花センター利用後に好転している傾向がわかります（図6-2）。

コミュニケーションや地域のつながりに関しては、仕事やボランティア活動への意欲（66.6%）人の役に立つことや社会へ貢献したい（63.7%）、地域の活動への参加（56.7%）のように、ボランティアをはじめとする地域や社会との関わりに関する変化が顕著に現れていることがわかります（図6-3）。

図6-1　客観的判断による変化

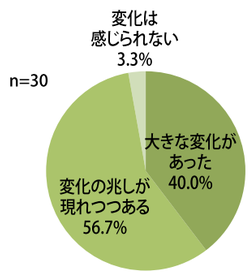


図6-2　健康や身の回りのこと

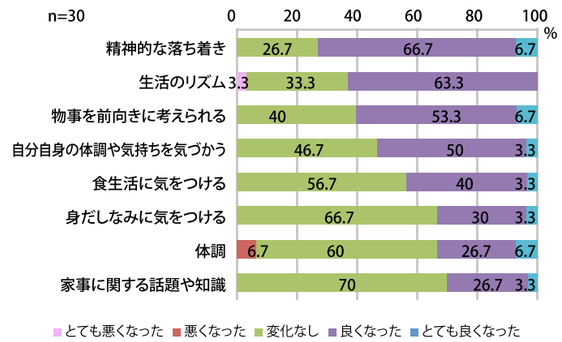
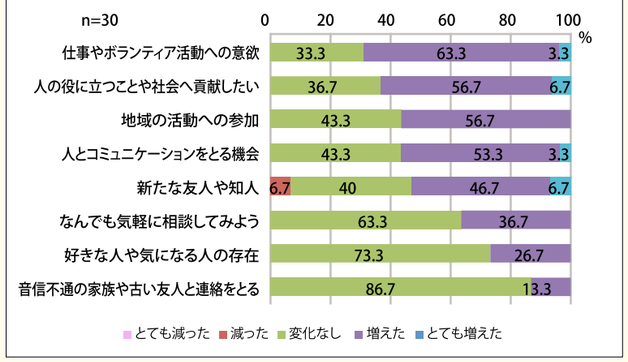
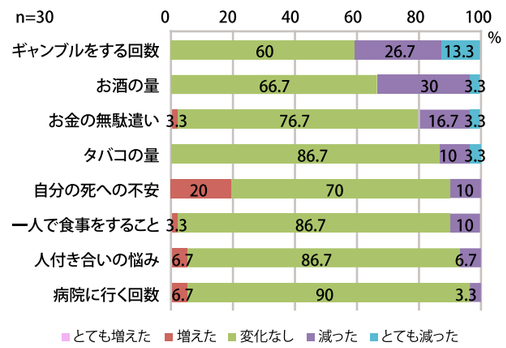


図6-3　コミュニケーションや地域のつながり



孤独や不安、不調に関しては、お酒の量が「減った」「とても減った」が合計33.3%、ギャンブルの回数が「減った」（40.0%）、「お金の無駄遣いが減った」（20.0%）となっています（図6-4）。これらのプラスの変化がみられる一方で、自分への死の不安、人付き合いの悩みなどの不安が増えた人もわずかですが確認できます。利用者の生活にひと花センターでの活動が新たに組み込まれることで、人間関係が動いたり、生活のリズムに変化が生じたりしたことが、ストレスになっているのかもしれません。

図6-4　孤独や不安、不調



6. 調査結果のまとめとこれからの課題

今回の調査の結果から、ひと花センターの利用者像について一定の傾向や特徴が見えてきました。まず、利用者のほとんどは年齢的に高齢者のカテゴリーに入りますが、ひと花センターの提供するプログラムにも積極的に参加できるような比較的良好な健康状態にある人たちです。生活保護の受給期間は6割が5年未満となっており、生活保護受給を開始して比較的日が浅い人たちが中心となっています。また、西成で生活している期間には1ヶ月未満から50年以上と大きな幅があり、生活期間が短い人ほど、生活保護を受給するために西成にやってくる傾向にあることがわかりました。生活状況については、生活費を節約するためにさまざまな工夫をしていることがうかがえます。

一方で利用者の半数以上にギャンブルやお酒などの浪費につながる可能性のある習慣が確認されますが、それらは数ある楽しみの一つに過ぎず、ひと花センターに通うことや趣味や娯楽など、日常の楽しみには多様性があることが確認できました。また、地域のつながりや人のつながりについては、近隣とは挨拶をする程度の関係性に留まりますが、6割が親しい友人を持ち、困りごとなどがあった場合も友人や知人に相談する傾向にあります。家族・親族との縁が薄く、単身で生活している利用者にとっては、友人・知人の存在が大きいことがうかがえます。

そして、今回の調査結果で特筆すべきは、ひと花センターを含む地域の支援団体の存在が利用者の地域生活において大きな意味を持つという点です。ひと花センターや支援団体の拠点のようにプログラムの実施や相談・雑談場所を提供する場は、単身の生活保護受給者にとって地域とのつながりをもたらす唯一の場所になっています。ひと花センターで実施されているプログラムで最も参加率が高いのが、草刈りや地域の清掃活動です。さらに、利用者のセンター利用の目的として地域・社会貢献が二番目に高くなっています。このことから、利用者は「世間の役に立ちたい」という意識を、ひと花センターでのプログラムをとおして結実させることが可能となり、利用者と地域が結びつき混ざり合うような機会を得ています。すなわち、ひと花センターは利用者と地域を結びつける結節点のような役割を担い、ひいては利用者のような単身者の孤立を防ぐ取り組みとして機能し始めています。

こうした取り組みは、利用者の健康や身の回りのこと、コミュニケーションや地域のつながりに大きな変化をもたらしており、孤独や不安、不調の解消にもつながりつつあります。また、居場所としてのひと花センターは、楽しくて仲間とのつながりを感じられる場所としてだけでなく、今後は自分に自信が持て役に立てていると感じられる場になるとよいという利用者の希望も明らかになりました。ここで明らかになった利用者の変化のプロセスや今後の希望を利用者ニーズとしてとらえ、利用者自身が将来的展望を持ちながら地域や社会と結びつくことのできる場として、ひと花センターの今後の継続性が求められます。

紡がれる関係性と場所の力

稲田七海（大阪市立大学都市研究プラザ特別研究員）

1. 釜ヶ崎と生活保護

生活保護受給者の多くは、これまでのさまざまな関係性の中で何らかの形で排除を受けてきた人たちである。日雇いをはじめとする非正規雇用での労働期間が長い人たちは、その雇用形態から社会保障制度から排除されるだけでなく、家族を持つことやどこかに定住すること、そして仕事とは別のつながりを持つような機会を阻まれ、社会のメインストリームとは離れたライフコースを余儀なくされてきた。そして、自分一人が生きるための仕事を失うと同時に、社会的な存在としての自分もなくしてしまう。すなわち、自分自身と社会とは「労働」でしかつながっておらず、それ以外の関係性が極端に少ない状態にある。

このように社会との関係性の束をほとんど持たない状態で生活保護を受給し、最低限の生活は維持できたとしても、社会的に自立した個人として生活するのは容易ではない。釜ヶ崎は、こうした生活保護受給者に対して広く間口を開いてきた場所である。元ホームレス、元日雇労働者、身寄りのない単身者、生活保護受給者として、複合的な差異を持つ人たちに対して、居住と生活を支えるさまざまな支援が展開されてきた。

2.「家族」の不在と生活支援

かつて、とある生活保護受給者向けのケア付き住宅で、生活支援の内容を数値化するという調査を実施したことがある。生活支援サービスの内容を介護報酬のケアコードにあわせて分類し、1ヶ月あたりどのようなサービスがどれだけ提供されたかを明らかにし、ケアの対価を計算するという試みである。調査の結果、話し相手、見守り、地域の社会資源への接続や病院などへの付き添いといった相談やコーディネートに関するケアに多くを費やされていることが明らかになった。整理すると、入居者の話を聴くことでニーズを引き出し、それぞれの生活を継続していくために必要なサービスへの接続を調整するようなケアである。一般的にこうしたケアは、高度な援助技術や知識を必要としないため、家族や身近な人による無償労働の中に含まれるものとして見過ごされることが多い。しかし、この調査によって、単身者は、家族の不在をカバーするような支援なくしては社会サービスを受けることが困難である現状が浮かび上がってきた。すなわち、現在の社会保障や社会福祉のサービスが家族の存在を前提として設計されており、それなしには生活保護受給者を社会やさまざまなサービスに接続すること自体が難しいという側面が明らかになったのである。

ひと花センターの利用者は単身者であり、家族によるケアはあらかじめ期待できる状態にない。こうした家族的支援を代替する居住支援と生活支援を複合化した取り組みは、単身生活保護受給者が多い釜ヶ崎では2000年代に入って活発化してきている。釜ヶ崎では、簡易宿泊所から住宅へ転換した建物が居住福祉資源として活用され、サポーティブハウスのように生活支援を実施している住宅や、支援は行わないものの生活保護受給者が入居しやすい条件を提示している住宅など、実に多種多様な形態の生活保護受給者向けの住宅が展開されている。ひと花センターを利用する人たちの約6割は生活保護受給者を受け入れるアパートやマンション、約4割は釜ヶ崎の簡易宿泊所転換型の住宅で生活している。そしてその多くは、生活支援のない住宅で生活している。こうした人たちは家族の不在をカバーするような支援のもとになく、社会との接点も少ない上にモビリティも低いため、孤立しやすい。ひと花センターの取り組みは、いうまでもなく、生活保護受給者の社会的孤立を防ぐための重要な役割を担う拠点であることが期待されている。

3. 日常の断片が集まって居場所になる

今回、ひと花センター利用者を対象に簡単なアンケート調査を実施した。開設から半年が経ち、ひと花に関わるスタッフや関係者、そして利用者自身から、ひと花に通うようになって利用者に変化があったことを、実感をもって語られる機会が増えてきた。こうした生活の変化や利用者の生活実態について明らかにするために実施したのが、利用者実態調査である。

この調査で、ひと花センターを利用したことでの変化について24項目の質問に答えてもらった。24項目に関しては、調査報告の章を参照していただきたい。中でも最も良好な変化を見せたのは「精神的な落ち着き」であり、利用者の70%以上が良好な変化があったと答えている。その他に、生活リズムの改善、物事を前向きに考える、自分自身の体調や気持ちを気づかう、などの項目について高い値で良好な変化がみられた。これらの変化はごくあたり前のことのように思えるが、生活様式や思考の変化こそがその人のあり方を支える重要な要素のように感じる。

これまで、ホームレスや生活保護受給者を対象にした居住環境と生活支援に関する調査が多く実施されてきた。その中で、支援を受けた人たちの身体と心が落ち着き、少しずつ自分自身を取り戻していくようなプロセスを多く見聞きしてきた。支援によって落ち着きを取り戻すことは、たいていは生活の瑣末（さまつ）ともいえる日常生活の断片として起こる。挨拶をする人

がいる、立ち話をする人がいる、トイレのスリッパをそろえる、共同炊事場のゴミを自主的に片付ける、など、淡々とした生活の営みの中で起こる些細なことの積み重ねや、可視化できないつながりのようなものによって、その人のささやかな主体性が支えられている。そしてその主体性をより豊かにするのは、他者とのコミュニケーションと、そのコミュニケーションによって培われる自分も他者も同じように大切にして受け入れようという思いである。そこには、支援を受けた人たちのドラマチックな変化はないものの、他者との関係性を構築する中で、それぞれが自分自身の主体性を持ちながら居場所を作り出すプロセスがある。こうした傾向はまだ開設から半年しか経っていないひと花センターでも同様に起こっているように感じる。

しかし、このようなコミュニケーションによって紡がれていく関係性やそれによってもたらされる生活の質的な変化は、生活保護受給者の「自立支援」の成果を測るものさしでは十分に評価することはできない。なぜなら、受給者の生活の変化は「成果」としてではなく「プロセス」としてあらわれるものなので、具体的な成果として見えにくい。そのプロセスの中で、新たな関係性を構築したりこじれたり、うまくいったりいかなかったりを繰り返すことで居場所がつくられていくので、短期間でわかりやすい成果は見えてこないのだ。

今回の調査では、利用者の意識を数値化することで変化を可視化することはできたものの、実践の場ではこういった利用者の内面や思考の変化があっても、その変化を他者がつかむことは一朝一夕でできることではない。ひと花センターのスタッフが利用者と日常的に向き合い関係性を構築する中でしか見えてこないものであり、さらに利用者自身の変化の糸口を引き出し、さまざまな関係づくりをしていくには、様々な知恵と工夫が必要だろう。ひと花センターでは、そうした知恵と工夫が結集して、多様なプログラムが展開されているが、そのひとつひとつの内容はよく見られるようなベーシックなプログラムであり、際立って大きな特徴があるわけでもない。しかし、ひと花センターでの支援には、利用者の日常の断片や意識や思考に注意深く向き合い、他者や地域とのつながりが持てるような工夫が確認でき、それが利用者の活発なプログラムの参加と利用の定着につながっている。

4．継続性を支えるものは？

では、生活保護受給者の居場所づくりの支援は、最終的に誰が責任を持つのだろうか。釜ヶ崎でこれまで何度も繰り返されてきた「支援」のほとんどが、ホームレス支援やまちづくり運動の系譜を受け継ぐ民間によって実施されてきた。もともとは、仕事も住宅にも困窮している人たちの問題が釜ヶ崎に局地的に現れていた状態から、それがどこでも起こりうるような普遍的な問題になっている。生活困窮や社会的孤立の問題が普遍化する中で、ひと花センターのように居場所づくりが公的な事業として実施されるようになったのはこれまでにないことだった。では、行政が委託補助事業として実施する意味は何だろうか。

居場所づくり支援の内容は多岐にわたる。しかし、支援の成果は、短期的に現れるもの、時間を要するもの、形として現れやすいもの、現れにくいもの、さまざまである。とくに、65歳以上が利用者の多くを占めていることから、加齢に伴う心身の変化にも目配りをしていく必要があるだろう。ケア付き住宅などでは、年々入居者の抱える問題がより深刻化し、専門的な福祉サービスで対応するべき問題を抱え込み、生活支援の範疇を超えたケアをせざるを得ない状況も散見される。こうした状況にみられるように、非専門的な家族的支援への対価は低く見積もられがちであるうえに、このような支援は支援者の善意や経験の持ち出しによって支えられる部分が大きい。長期的な視野に立ちながら居場所を提供するためには、生活保護受給者と同様に、日々粛々と支援活動を行っている人たちに対する雇用面での支援も充実させていかなくてはならない。こうしたことを含めて、居場所づくりの活動の持続性を支援することが公的に担われるべきである。

利用者たちが生活保護制度によって再び社会に包摂されるには、家族機能を代替する居住福祉、孤立を防ぎつながりをつくる居場所、その居場所で静かに注意深く見守る支援者の存在が欠かせない。行政の役割としては、所得再分配としての生活保護制度の適正な運用はもちろんのこと、ひと花センターで培われつつある数字や成果だけでは測ることのできない「場所の力」をいかに支援していくことができるのか、一つの重要な試金石となるだろう。

コラム

松繁さんと考える！ あいりん地域の未来

冒頭から、数字の表の紹介で恐縮だが、表1は、マスコミで広く伝えられた「日本創成会議・人口減少問題検討分科会」が、「ストップ少子化・地方元気戦略」の資料として紹介したものです。

西成区の人口は、2040年には半減すると予測されています。

表1の左側、「社人研」とあるのは、「社会保障・人口問題研究所」のことで、区ごとに両者の推計を比較すると、区によって、減少数が大きかったり少なかったりしているようです。西成区の場合は、「日本創生会」の推計の方が、減少幅が大きくなっています。尤も272人ですから、あってなきがごとき差ともいえます。

「あいりん地域」についても、将来人口推計が存在します。

西成区は、2010年から2040年にかけて人口がほぼ半減するという予測ですが、「あいりん地域」についての予測では、3分の1になると推測されています（表2）。

ひと花センターの利用対象者は、今のところ65歳以上ですが、西成区全体での65歳以上の占める割合は、「社会保障・人口問題研究所」の推計では、2020年に41.7%に達しそこからやや減少して、40年後にまた41%台になるとされています(表3)。

「あいりん地域」推計でも2020年に51.8%に達し、そこから減少して2045年からまた上昇、50年後に52.5%になるとされています。数字の大きさは違いますが、傾向は似ている。当然といえば当然なのでしょうが。

表4は、素人が国勢調査結果の大阪市独自集計（連合町会別集計）を元に作成したものです。単純に、5年ごとに一段数字を下げ、65歳以上の半分は5年以内に死亡すると仮定してのものです。

この推計では、西成区全体の減少率とほぼ同じ減少率になっています。ただ

表1：大阪市内各区の人口の予測

市区町村	社人研推計					人口移動が収束しない場合				
	2010年 総人口	2010年 20～39歳女性	2040年 総人口	2040年 20～39歳女性	若年女性人口変化率 (2010→2040)	2010年 総人口	2010年 20～39歳女性	2040年 総人口	2040年 20～39歳女性	若年女性人口変化率 (2010→2040)
都島区	102,632	15,421	94,178	9,329	-39.5%	102,632	15,421	98,266	10,523	-31.8%
福島区	67,290	11,841	61,617	6,206	-47.6%	67,290	11,841	62,776	6,837	-42.3%
此花区	65,569	8,395	51,621	4,914	-41.5%	65,569	8,395	49,415	4,925	-41.3%
西区	83,058	17,969	89,170	9,005	-49.9%	83,058	17,969	95,346	10,997	-38.8%
港区	84,947	11,762	67,488	6,983	-40.6%	84,947	11,762	65,617	7,395	-37.1%
大正区	69,510	7,996	47,982	4,112	-48.6%	69,510	7,996	44,840	3,656	-54.3%
天王寺区	69,775	11,222	76,289	7,891	-29.7%	69,775	11,222	82,905	9,290	-17.2%
浪速区	61,745	12,236	55,308	5,074	-58.5%	61,745	12,236	56,643	6,116	-50.0%
西淀川区	97,504	12,892	90,193	9,083	-29.5%	97,504	12,892	92,479	9,537	-26.0%
東淀川区	176,585	27,825	146,342	14,926	-46.4%	176,585	27,825	141,857	15,750	-43.4%
東成区	80,231	11,563	71,741	6,818	-41.0%	80,231	11,563	74,528	7,528	-34.9%
生野区	134,009	16,622	100,909	8,580	-48.4%	134,009	16,622	99,967	8,714	-47.6%
旭区	92,455	11,657	70,940	6,115	-47.5%	92,455	11,657	69,993	5,932	-49.1%
城東区	165,832	23,630	157,752	16,117	-31.8%	165,832	23,630	164,315	17,562	-25.7%
阿倍野区	106,350	14,084	90,525	8,656	-38.5%	106,350	14,084	92,880	9,216	-34.6%
住吉区	155,572	20,543	125,820	11,644	-43.3%	155,572	20,543	123,719	11,687	-43.1%
東住吉区	130,724	16,326	100,170	9,418	-42.3%	130,724	16,326	98,322	9,541	-41.6%
西成区	121,972	10,628	66,381	5,022	-52.7%	121,972	10,628	62,616	4,750	-55.3%
淀川区	172,078	27.160	156,131	15,342	-43.5%	172,078	27.160	159,108	17,229	-36.6%
鶴見区	111,182	16,098	112,773	12,975	-19.4%	111,182	16,098	113,483	13,712	-14.8%
住之江区	127,210	16,002	95,093	7,948	-50.3%	127,210	16,002	92,019	7,420	-53.6%
平野区	200,005	24,819	166,910	16,456	-33.7%	200,005	24,819	165,729	16,496	-33.5%
北区	110,392	20,426	121,925	12,549	-38.6%	110,392	20,426	136,564	16,960	-17.0%
中央区	78,687	16,567	74,456	6,295	-62.0%	78,687	16,567	78,699	7,688	-53.6%

出所：日本創成会議・人口減少問題検討分科会 「ストップ少子化・地方元気戦略」

表2：「あいりん地域」の人口の予測

年	2005年	2010年	2015年	2020年	2025年	2030年	2035年	2040年	2045年	2050年
0～4歳	111	69	59	46	34	25	19	14	11	8
5～9歳	105	75	51	44	34	25	18	14	11	8
10～14歳	125	86	67	46	40	30	23	17	12	9
15～19歳	215	136	104	81	56	48	37	28	20	15
20～24歳	518	346	242	185	145	100	86	66	49	36
25～29歳	656	507	375	264	201	158	109	94	72	54
30～34歳	681	551	471	349	245	188	148	102	87	67
35～39歳	914	685	614	526	390	275	211	166	115	98
40～44歳	1,137	902	750	674	579	430	304	234	184	127
45～49歳	1,638	1,265	1,112	925	833	716	533	377	290	229
50～54歳	2,733	1,532	1,312	1,155	963	869	748	557	394	304
55～59歳	3,988	2,483	1,537	1,316	1,159	966	872	750	559	396
60～64歳	3,842	3,251	2,233	1,382	1,182	1,041	868	783	674	502
65～69歳	3,527	3,170	2,962	2,034	1,258	1,076	948	790	712	613
70～74歳	2,355	2,594	2,568	2,392	1,638	1,011	864	760	633	570
75～79歳	1,048	1,428	1,721	1,687	1,554	1,053	645	547	479	398
80～84歳	419	529	786	934	901	815	542	327	275	239
85歳以上	200	237	324	467	588	623	599	474	332	251
合計	24,212	19,847	17,287	14,506	11,802	9,452	7,573	6,100	4,911	3,925
65歳未満	12,821	8,637	6,693	5,610	4,680	3,832	3,107	2,418	1,805	1,352
65歳以上	7,549	7,958	8,360	7,514	5,940	4,579	3,598	2,899	2,432	2,071
65歳以上割合	31.2%	40.1%	48.4%	51.8%	50.3%	48.4%	47.5%	47.5%	49.5%	52.8%

出所：筆者作成

表3：西成区の65歳以上人口の予測

社会保障・人口問題研究所	2010年	2015年	2020年	2025年	2030年	2035年	2040年
年齢別割合（65歳以上：%）	34.3	39.8	41.7	40.8	40.1	40.1	41.5

出所：社会保障・人口問題研究所

し、65歳以上の占める割合は、上昇の一途をたどります。

死亡率の設定が低すぎるのでしょうか。

萩之茶屋地区の生活保護受給者数は、2005年の約5,000人から今年4月推計値約8,000人にまで増加しています。65歳以上の占める割合も、67.7%から75.4%と増加しています（表5）。

今から4年前、介護事業者の分布を調べたことがありますが萩之茶屋地区への集中は、他地域を圧倒しています（表6）。将来のことは、様々な要因が絡み合って決まっていきます。しかし、萩之茶屋を見ると先の心配をしている場合ではなく、今こそが大切と思えます。

高齢者が増えることが、「問題」であってはならない。長寿は言祝（ことほ）がれるべきです。

そのためには、何が必要か、元気な間に何ができるか。元気でなくなったら、動けなくなったら、それで人としての存在意味はないのか。

「介護もつながりのツール」、「仕事でない介護」、ひと花センターで将来数値を話題に盛り上がってみることもありかな？

表４：萩之茶屋地区の高齢化の予測

	国勢調査大阪市独自集計から作成				単純加齢年齢階層移動による試算表					
	1995年	2000年	2005年	2010年	2015年	2020年	2025年	2030年	2035年	2040年
	平成7年	平成12年	平成17年	平成22年	平成27年					
0～4歳	150	88	83	51	20	10	10	10	10	10
5～9歳	119	85	76	56	51	20	10	10	10	10
10～14歳	119	96	92	67	56	51	20	10	10	10
15～19歳	326	251	170	159	67	56	51	20	10	10
20～24歳	691	497	356	290	159	67	56	51	20	10
25～29歳	642	578	484	332	290	159	67	56	51	20
30～34歳	804	642	561	337	332	290	159	67	56	51
35～39歳	929	898	793	553	337	332	290	159	67	56
40～44歳	1,691	1,099	1,000	825	553	337	332	290	159	67
45～49歳	2,861	2,199	1,408	976	825	553	337	332	290	159
50～54歳	3,350	3,024	2,437	1,299	976	825	553	337	332	290
55～59歳	3,008	3,195	3,393	2,183	1,299	976	825	553	337	332
60～64歳	2,100	2,678	3,342	3,191	2,183	1,299	976	825	553	337
65～69歳	1,238	1,918	2,946	3,201	3,191	2,183	1,299	976	825	553
70～74歳	653	899	1,880	2,387	3,201	3,191	2,183	1,299	976	825
75～79歳	296	371	775	1,301	2,387	3,201	3,191	2,183	1,299	976
80～84歳	113	139	276	513	1,301	2,387	3,201	3,191	2,183	1,299
85～89歳	45	41	92	134	513	1,301	2,387	3,201	3,191	2,183
90～94歳	5	17	29	45	134	513	1,301	2,387	3,201	3,191
95～99歳	2	4	4	10	45	134	513	1,301	2,387	3,201
100歳以上	0	0	3	1	10	45	134	513	1,301	2,387
合計	19,142	18,719	20,200	17,911	17,930	17,930	17,895	17,771	17,268	15,977
65歳未満	16,790	15,330	14,195	10,319	7,148	4,975	3,686	2,720	1,905	1,362
65歳以上	2,352	3,389	6,005	7,592	10,782	12,955	14,209	15,051	15,363	14,615
		65歳以上死亡率5割で計算			5,391	6,478	7,105	7,526	7,682	7,308
		5割での合計			12,539	11,453	10,791	10,246	9,587	8.670
65歳以上 %	12.3%	18.1%	29.7%	42.4%	60.1%	72.3%	79.4%	84.7%	89.0%	91.5%
		5割での合計			43.0%	56.6%	65.8%	73.5%	80.1%	84.3%

出所：国勢調査より筆者作成

表５：西成区と萩之茶屋地区の生活保護受給者数

地区名		平成17年4月 世帯数	平成17年4月 人員	合計 世帯数	合計 人員	平成26年4月 世帯数	平成26年4月 人員	合計 世帯数	合計 人員	増減 世帯数	増減 人員	増減 一般・高齢
萩之茶屋	一般		1,647	4,880	5,099	1,866	1,958	7,792	7,945	2,912	2,846	311
	高齢		3,452			5,926	5,987					2,535
		高齢率	67.7%			高齢率	75.4%					
西成区合計	一般		9,015	18,123	20,558	5,994	7,715	24,556	26,984	6,433	6,426	-1,300
	高齢		11,543			18,562	19,269					7,726
		高齢率	56.1%			高齢率	71.4%					

出所：西成区保健福祉センター及び国勢調査より筆者作成

表６：西成区と萩之茶屋地区の分野別介護事業者数

	訪問介護	居宅療養管理指導	予防訪問介護	通所介護	予防通所介護	居宅介護支援	訪問看護	通所リハビリテーション	認知症対応型共同生活介護	介護老人福祉施設	予防居宅療養管理指導	介護予防支援	短期入所生活介護	訪問入浴介護	介護老人保健施設	予防訪問看護	介護療養型医療施設	予防通所リハ	訪問リハビリテーション	認知症対応型通所介護	小規模多機能型居宅介護	短期入所療養介護・療養型	短期入所療養介護・老健	認知症対応型共同生活短期	夜間対応型訪問介護	予防小規模多機能型居宅	予防短期入所療養・老健	予防訪問リハ	総計
萩之茶屋地区	801	461	301	274	66	103	48	26	2	9	39	18	6	6	7	7	9	3	3		1	1	1						2,192
西成区合計	2,534	1,212	1,200	1,044	341	247	230	117	108	101	84	80	65	49	45	35	24	21	17	15	3	3	6	1	1	7	1	1	7,592

出所：筆者作成

松繁逸夫（まつしげ いつお）
1950年生まれ。NPO法人釜ヶ崎支援機構元事務局長。現在は萩之茶屋まちづくり合同会社事務員。
共著として「知っていますか？ホームレスの人権一問一答」（解放出版社、2003年）

ひと花センターでは毎月1度「ひと花新聞」を発行しています。
内容はセンターでのプログラムの様子を伝えるものから、メンバーのひと言、健康の秘訣、おすすめ映画、新年のあいさつなど、幅広く、そして自由です。
はじめはスタッフのみで制作していた「ひと花新聞」ですが、回を増すごとに登録メンバーのみなさんも作成に加わるようになり、メンバーのことばや想いがそのまま反映されるようになりました。2013年度は1号～9号までが発行されました。

※2014年3月末時点の原稿を掲載しています。

「ひと花新聞」はHP及び以下URLよりダウンロードができます。
http://hitohanap.org/paper/

ひと花 新聞

第1号
平成25年8月1日
発行：ひと花センター
〒557-0016
大阪市西成区花園北1丁目2番19号
06-6649-7890

ひと花センター開所しました

7月1日にひと花センターが開所しました。暑い中、面談に来ていただいたみなさまありがとうございました。面談でお話をうかがう時間がたのしく、また勉強になったりと時間を忘れておしゃべりしたスタッフもいました。センターでは11日からいろいろなプログラムもはじまりました。今号はそのようすを紹介します。

萩之茶屋北公園2周年まつり

萩之茶屋北公園（通称仏現寺公園）2周年まつりの準備お手伝いと、当日のこどもまつりに参加してきました。両日とも約10名のひと花チーム。準備のテントたてと草むしりは参加者のみなさんと地域のこどもたちの活躍で素早く終了。当日のこどもまつりは炎天下の中、疲れを知らないこどもたちとしっぽとりやドッヂボール、水風船なげ、水鉄砲あそびなどをしました。こどもたちのパワーに押されぎみのチームひと花。げんきをもらい、そして準備と片付けのお礼をみなさんからいただき汗だくで帰路につく、たのしい時間でした。（は）

8月21日（水）　16：00～17：00　仏現寺公園の草抜きをします。てつだっていただける方スタッフまで！

7/22 廣田神社まつり

地域の恒例行事となっている廣田神社のお祭りが行われました。22日には子供たちを先頭に神輿を引き回し、太鼓の打ち込みも行われました。ひと花からは利用者さん、連携団体も一緒に参加しました。また、練り歩きコースにお茶を持って利用者さんとともに見学に出かけました。神輿と太鼓は萩之茶屋小学校を出発、午前中に南海ガードの東側、午後に西側と炎天下の中、声を上げて地域内を練り歩きました。ご参加いただいた皆さんお疲れさまでした。（こ）

ひと花文庫

ひと花センター多目的室にひと花文庫ができました。本はひと花センターで読むもよし、貸出もしていますのでおうちでゆっくり読むもよし。借りたい方は、貸出ノートに記入し、スタッフにこえをかけてください。一回10冊まで1ヶ月間借りられます。

農作業

7月24日　9:00～
7月26日　9:00～

プログラムの目玉である「農作業」が始まりました。連日炎天下が続く中、24、26日両日は曇り空の中、無事に作業を進めることができました。前日までに土が搬入されており、肥料を混ぜることから始まりました。曇りとはいえ暑い中、皆さんスコップや鍬を振り続けます。2日目の終わりには、畝も少し作りだしました。31日以降に植え付けを予定しており、これから農作業は本番を迎えます。利用者の皆様のご協力をよろしくお願いします。また、ご参加いただいた利用者の皆さんお疲れさまでした。（こ）

ひと花カフェ

ホットケーキ、白玉団子にクレープ作り。お菓子とは言え、ひと花メンバーには「粉もん」なのです。そうなれば作り方にレシピは無用。皆で食べればおいしさは格別です。「居酒屋やってた頃を思い出すわ」「喫茶店のホットケーキはバーナーで焼くんやで」と、色々な思い出がよみがえります。（ひ）

8月のスケジュール

8/5	（月）	13：00～	たこやき
8/12	（月）	13：00～	チヂミ
8/19	（月）	13：00～	ベビーカステラ
8/22	（木）	10：00～	流しそうめん
8/26	（月）	13：00～	ミックスジュース
8/29	（木）	10：00～	夏カレー

表現プログラム

表現プログラムは、こころとからだをほぐすワークショップからはじまり、パントマイム、ヨガ、詩、お話、書道、など盛りだくさんの7月でした。来月8月もいろいろな表現のプログラムがあります。

ごろごろヨガ

感　想

・みなさんから元気をもらってありがとう（全員参加）
・文字を書くのがにがてで手紙を書くのがやっと詩を書くのはさてどうなることやろ（詩）
・老いて又楽し！（パントマイム）
・心も体もかるくなりました（ヨガ）

●８月の表現プログラム●

8/7　13:00～　こころとからだをほぐすワーク
8/17　13:00～　工作　ちょきん箱をつります
8/20　13:00～　あっこちゃんの会
8/23　10:00～　紙芝居劇むすび
8/30　13：00～　ヨガ

パントマイム　なにがひきあげられるのだろうか…

全員参加プログラム　背中をさすってしりとり…

紙芝居劇むすび　表情がいいなー

書道のじかん

健康教室

あつい夏をのりきろう！

来月は8月28日（水）午後1時からです

その後、血圧測定や健康相談では、熱心に相談をされていました。足浴や爪切りは、「初めてしてもらった」「気持ちが良かった」と、皆に大好評でした。（み）

初めに、訪問看護ステーション「ひなた」の梅田看護師より、「熱中症」の話があり、利用者さんからは「前に働いている時に吐き気とかしてシンドクなったことがある」等の話が出ました。

ひと花映画館

7月15日に第1回目として「ニューヨーク東8番街の奇跡」を上映しました。ご好評をいただいたと信じて、8月は4回開催を予定しています。皆さんこぞってご参加ください。

●8月5日（月）10時～「剣岳点の記」2009年日本作品
監督　木村　大作　主演他　浅野忠信　香川照之　宮崎あおい
●8月12日（月）10時～「荒野の七人」1960年アメリカ作品
監督　ｼﾞｮﾝ･ｽﾀｰｼﾞｪｽ監督　主演他　ﾕﾙ･ﾌﾞﾘﾝﾅｰ　ｽﾃｨｰﾌﾞ･ﾏｯｸｨｰﾝ
●8月19日（月）10時～「七人の侍」（前編）1954年日本作品
監督　黒澤　明　主演他　三船敏郎　志村喬
●8月26日（月）10時～「七人の侍」（後篇）1954年日本作品
監督　黒澤　明　主演他　三船敏郎　志村喬
※映作品は変更になる場合がありますので、予めご了承ください。

おしらせ

ひと花センターはみなさんの居場所として自由に利用ができます。（居場所利用に予約はひつようありません）
お茶、コーヒー、紅茶などをのんだりゆっくり、音楽をきいたり、本を読んだり、将棋や碁をさしたりなどくつろいだり、すずみに来られませんか。
また、お手伝いしていただける方も大募集しています。
ひと花センターでのそうじや洗たく、本の整理、花の水やりなど興味がある方は、ぜひ、スタッフまで声かけください。
なお、利用できる時間は9じから16じまでです。（日曜日をのぞく）

今月のひと花メンバーの名言　「朽ち果てるにはまだはやい」

ひと花新聞

第2号

発行：ひと花センター
〒557-0016
大阪市西成区花園北
1丁目2番19号
06-6649-7890

開所から2カ月！

ひと花センターもおかげさまをもちまして、開所から2カ月！どうにかこうにかやってきました。ご利用いただいた皆さん、また、いろいろとご協力をいただきました皆さんありがとうございます。

楽しい！プログラムが目白押し！

7月に続き、8月もいろんなプログラムを開催しました。とりわけ表現プログラムは「今日の『出逢い』を体験する」全員参加プログラムにはじまり、「からだとこころをほぐすワークショップ」でからだをほぐし、「工作の時間」には貯金箱をつくりました。「あっこちゃんの会」ではみんなでお話をして、「紙芝居劇むすび」では紙芝居の読み合せを体験しました。「リラックス体操」「ごろごろヨガ」では体の力を抜く事ができました。

このほか、「健康教室」をはじめ「人づきあいの困りごとをみんなで考える会」・・・など、いろんなプログラムを行いました。

9月にも、楽しんでいただけるプログラムを予定していますので、どしどし参加してください。

8月全員参加プログラム

リラックス体操

工作の時間　貯金箱

流しソーメンしました

流しソーメン　また来年もしようね

8月にはたこやき・チヂミ・ベビーカステラ・流しソーメン・ミックスジュース・夏カレーの6つのメニューにチャレンジしました。

みなさん腕に自信あり？とばかりに料理に挑んでいました。いろんなできばえもまた楽し、おいしくいただき、そしてゆかいな時間を過ごしました。

9月もひと花カフェを開きますので、参加してくださいね。

ひと花カフェ

これも粉もの　チヂミ！

大阪の定番たこやき！

いつでもおこしください 居場所

日曜以外の9時半から16時まで、いつでもくつろいでもらえるようお茶やコーヒーお菓子などもご用意してお待ちしています。

ひと花文庫を拡充

多目的室から談話室にひと花文庫を移しました。
読書の秋！ゆっくりと読書にふけってください。
なお、貸し出しは1回10冊まで！
お気軽にスタッフにお声かけください。

囲碁・将棋好き集まれ 毎週、土曜日午前中！

センターでは、いつでも囲碁や将棋をしていただけます。でも相手がいないと・・・
そこで毎週、毎週土曜日の午前中に集まりませんか？我こそはと思っている方、動かし方、並べ方くらいは知っているという方も大歓迎。

ひと花センターは、西成区単身高齢生活保護受給者の社会的つながりづくり事業として、2013年7月1日からスタートしています。

農作業

これからが本番で～

7月31日にくわ入れ式を行い、毎週火曜と金曜に生活サポート釜ヶ崎の岡井氏の指導のもと農作業を進めています。

黒豆の苗にはすでに小さな枝豆がなっています。キャベツは少し虫食いが気になりますが、小松菜は8月に一度収穫しましたが、再度収穫を予定しています。8月に植えたねぎや人参、たまねぎもゆっくり育っています。

9月に入ると、ひと花センター前で苗を育てていたブロッコリーとキャベツの他、ジャガイモやたまねぎも植え付けします。あと、大阪しろな・みず菜・チンゲンサイ・小松菜・ほうれん草などの葉っぱもの、ジャガイモ・玉ねぎ・大根なども種まきする予定です。その後、植え替えや肥料入れ等も行います。

雨で作業できないときは、センターで野菜のお話の時間を持ちたいと思っています。また、天気の状況によりますが、急きょ作業をお願いする場合もありますのでよろしくお願いします。収穫は10月以降になる予定です。

暑さも少しやわらいできました。いよいよ農作業の本番到来です。皆様のお力をお貸しください。また、8月の暑い中、作業に参加いただいた皆様、ご苦労様でした。

※9月9日の週は、農作業はお休みとなります。

7/31 くわ入れ式

散歩の会　8/15

てんのうじ村記念碑から黒龍・天龍大神、猫塚などを回りました。

ひと花句会　8/21

＜今月の句題　扇風機・朝顔・ラムネ・原爆＞
メンバーがつくった俳句。俳号もつけました。

夏祭り　ラムネ･ワタガシ　夜店かな　春乱（しゅんらん）
冷やし麺　朝顔さんも　食べに来て
やな童（やなわらび）
いかにとも　ことばにせむや　原爆碑　聯荘（すいきょう）
ラムネの味も　忘れかけてる　時代かな　歌人（かじん）
朝顔も　今年のあつさに　うなだれる　呆人（ぼじん）
寝苦しい　一夜一夜の　朝顔や　貴和心（きわしん）

ひと花咲かせましょう！コスモスを育てています。摘芯作業にチャレンジ！

8/13、29　コスモス育成

地域活動

ひと花センターでは、地域のお手伝いも担います。

イベントに合わせて仏現寺公園の清掃を7月に行いましたが、8月以降も、引き続き草引きなどの清掃活動を担っていくことになりました。

8/21 仏現寺公園　草引き作業

ひと花映画館　9月は洋画！

ひと花映画館では、毎週月曜日に映画を上映しています。

8月には、七人シリーズをお届けしました。映画終了後に皆さんに映画のご希望もお聞きしましたが、いろんな希望があって、しぼりきれません。ということで、9月はあえて洋画を上映することにしました。娯楽映画から名作と言われる物まで、有名な5作品をとりあげてみました。

9月2日（月）『ショーシャンクの空に』
1994年アメリカ作品
監督　フランク・ダラボン
出演　ティム・ロビンス　モーガン・フリーマン他
9月9日（月）『サウンドオブミュージック』
1965年アメリカ作品
監督　ロバート・ワイズ
出演　ジュリーアンドリュー　ス　他
9月16日（月）『パイレーツオブカリビアン』
呪われた海賊たち　2003年アメリカ作品
監督　ゴア・ヴァービンスキー
出演　ジョニー・デップ　他
9月23日（月）『大脱走』　1963年アメリカ作品
監督　ジョン・スタージェス
出演　スティーブ・マックィーン　他
9月30日（月）『スターウォーズ　エピソードⅠ
ファントム・メナス』　1999年アメリカ作品
監督　ジョージ・ルーカス
出演　ユアン・マクレガー　ナタリー・ポートマン他

ひと花センターは、西成区単身高齢生活保護受給者の社会的つながりづくり事業として、2013年7月1日からスタートしています。

ひと花 新聞

第3号

発行：ひと花センター
〒557-0016
大阪市西成区花園北
1丁目2番19号
06-6649-7890

きれいになって気持ちがいい

みんな一途に公園の草むしり

「家にひきこもってるより青空の下でええ汗かきたいねん」「草むしりは何も考えずにできるからええね」。9月から新たに今宮ふれあい広場、一本線公園と地域の草むしりを行っています。また今宮小学校の草むしりもお手伝いもしました。街がきれいになっていくと地域のみんなが気持ち良くなる、メンバーのやりがいもひと際です。そして見わたせばきれいな地面といい汗かいた仲間。みんなすがすがしい気持ちになります。

ひと花カフェ敬老の日スペシャル

9月16日　ちらし寿司

ある日、71歳Kさんが「9月16日は敬老の日だね、なんかしないの？」と一言。そうだ…わすれていた…ということで急きょ、ひと花カフェちらしずしの企画ができあがる。みなさんの料理の腕があれば、市販のちらしずしの素を買わずに具を一からつくるほうがたのしいのではないかということで、しいたけ煮、五目煮などを手作り。エビをゆでたり、錦糸卵をつくったり。1時間半後にはどってもおいしいちらしずしのできあがり。

しあわせな敬老の日でした。

私たちもおもてなし

おかげさまでひと花センターが開所して無事3ヵ月が経とうとしております。メンバー同士のつながりの次は地域のみなさまとつながりづくり。そこで誰もがひと花センターで楽しめる（仮）地域開放日を設け、今後定期的に行おうと考えております。つきましては10月26日（土）10時から14時に第1回目を開催する予定です。どのような「おもてなし」になるかはメンバーただいま考え中です。ひと花センターの日頃の活動をぜひご覧ください。みなさまお誘い合わせの上お越しください。

10/26(土)は地域開放日！

今月の収穫

農作業の収穫された野菜はひと花カフェの食材としてみんなでおいしくいただきました。小松菜はスパゲッティ、ねぎはうどん、黒豆はずんだ餅として収穫の喜びを味わいました。

ひと花句会　9月の俳句

名月の　降り注ぐなり　飲む酒に（広渕明）
秋の風　コスモスゆれる　散歩道（暮人）
いろは坂　バスにゆられて　なしがりに（やな重）
月隠ちて　落みし心に　蓮の花（酔狂）
子どもたち　にぎわいのはた　祭殿や（春乱）
夏巻の　過ぎて釜寝の　稲を刈り（南紀）
名月や　うさぎもちつき　おとがする（へのへのもへじ）
穴子鮨　一つつまむや　二日月（帰春）
のどかわき　歯むる梨の実　ああおいし（深海）

10月の句題

・くりごはん・いわし雲・運動会、体育祭・どんぐり

農具の収納小屋完成

こつこつと有志によって農作業地につくられていた農具の収納小屋が9月17日完成しました。たくさんの竹を使った風情のある小屋です

ひと花センターは西成区単身高齢生活保護受給者の社会的つながりづくり事業として、平成２５年７月１日からスタートしています

第３号　ひと花新聞　平成２５年１０月１日

9月の散歩の会

距離を歩くことが目的ではありません。

部屋に閉じこもるんではなくて気分を変えて散歩でも…そのきっかけ作りができたら。９月は２回開催。１１日には今宮戎から廣田神社、木津市場を巡り、２５日には一心寺横を通り、安居神社、清水寺を散策しました。両日暑い日でしたが神社の木陰で涼んで休憩し「都会にもこんなに緑に囲まれた場所があったんだ」とか、木津市場オープンスペースでは「いい休憩場所を見つけた」と喜んでいただく場面も。

皆さんのお知恵を借りながら楽しい散歩を企画したいと思っています。

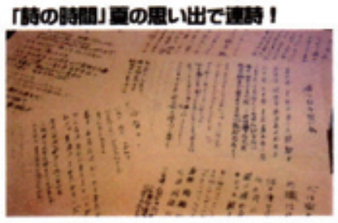
ひと花映画館　10月上映予定
於.ひと花センター　午後1時開演
10月7日（月）隠し砦の三悪人（1958　東宝）
監督　黒澤明　主演他　三船敏郎　千秋実　藤原釜足
10月14日（月）黒部の太陽（前編）（1968　日活）
監督　熊井啓　主演他　三船敏郎　石原裕次郎
10月21日（月）黒部の太陽（後編）（1968　日活）
監督　熊井啓　主演他　三船敏郎　石原裕次郎
10月28日（月）桜田門外の変（2010　東映）
監督　佐藤純彌　主演他　大沢たかお　長谷川京子
北大路欣也
＊なお、上映作品が変更になる場合がありますので予めご了承ください。

ひと花ダイジェスト

「ミシンを使ってエコバッグつくり」
思わずみんなが欲しくなる！

「空手・護身術」身心ともに引き締まります！

「詩の時間」夏の思い出で連詩！



「美術の時間」みんなで大作を描きました！

折り紙が今熱い！

手始めに折り鶴。皆思った以上に苦戦する。「千羽鶴を何年かかっても折りたい」という思いを持ったメンバーもいた。過去に折ったつばめ飛行機や手裏剣を折る人もいる。皆最後まで粘り強く挑戦し、しばらく折り紙熱は冷めない状態。プログラム終了後も空き時間に折り紙に熱中する姿がよく見られた。

あなたの好きなプログラムは？

ひと花カフェ
・みんなで調理をすることで団らん、会話がある。

からだとこころをほぐすワークショップ
・ずっと食べるだけの生活だったので久しぶりに体を動かせて良かった

詩の時間
・自分が詩を書くなんて思いもよらなかったがよかった。書いてみて字を忘れていることに気づいた。

ひと花映画館
・昔見たやつを改めて観て、やっぱりいいなと思う。

農作業
・種をまいて育てる、そして収穫が楽しみだ。

草むしり
・自分は特に何ができるというわけじゃないけど草むしりは参加すれば自分にだってできる。

ひと花句会
・ここ何十年していなかったがあらためて俳句を創作することは良いなと感じた。

人づきあいの困りごとをみんなで考える会
・人の困りごとを聞かせてもらったけど自分なりにいろいろ考えさせられた。

ごろごろヨガ
・気晴らしに参加したら体が楽になった。一人よりみんなでやったほうがよいと思った。

おりがみ同好会
・小さい頃の思い出がよみがえるし、時間があっという間に過ぎる。みんな熱心だった。

書の時間
・気持ちが現れる。落ち着いているときれいに書ける。

健康教室
・健康について勉強になった。足湯も気持ち良いです。

散歩の会
・よく通る道でも新たな発見があり感心しました。

今日の「出逢い」を体験する
・人の話を聞くこと、そして自分の思っていることを話せることができたので良かった。

リラックス体操
・横になる体操は思った以上に気持ち良くて寝てしまう。

絵本の読み合わせ会
・それぞれ読み方に特徴があって面白いと感じた。

いくつになってもパントマイム
・パントマイムの基本はお腹から動かすこと。これが新たな発見であった。　…など

10月ひと花カフェ　メニュー
時間10：00～12：00
10月7日（月）ぎょうざ　チャーハン
さつまいものきんぴら
10月14日（月）中華丼　スイートポテト
10月21日（月）秋のたきこみご飯
芋煮　さつまいものソフトクッキー
10月28日（月）ハヤシライス　いもようかん

こんげつのメンバーのことば　「月曜日が楽しみやねん。カフェも映画もあるしな、また1週間が始まるやろ。」

ひと花新聞

第4号
平成25年11月1日
発行：ひと花センター
〒557-0016
大阪市西成区花園北1丁目2番19号
06-6649-7891

ひと花めろうば

ふだんは登録したちが利用できるひと花センター。このひと花センターを月に1回みなさんに開放する日、その名も「ひと花ゆめひろば」。この会の準備をみなさんとひとつひとつ。まずは開所から3ケ月・ひと花センターで過ごしてみてどう感じているかを話し合い、会の名前決め、することを決め、役割を決め・準備作業がはじまるとあわただしくもたのしい日々。当日どうなることやら・たのしみたのしみ。（は）

運動会

萩ヶ茶屋小学校

10月6日（日）に、バーが萩ヶ茶屋小学校でした。ひと花センターの4日に運動会たクラスのメンバー。回る小学生を見て、が小学生の頃を思い出なりました。大玉転がが加して運動会を満喫し

ひと花センターのメンの運動会を見に行きまの中で楽しかったのは、前準備のお手伝いに行っ晴天の下で元気に動き思わず笑ったり、自分したり、楽しい時間にしには、メンバーも参ました。（し）

防火訓練

ひと花センターが開所してはじめての防火訓練。消防署の隊員さんを迎えて避難・通報・消火器を使って消火訓練を行いました。火元に一層、気をつかう季節に向けて気が引き締まる思いです。（ひ）

楽しい絵本の読み合わせ会

利用者の方の、絵本を作ろうぞ！しよう。」という言葉で誘み合わせが絵本作りの会に。わたしにかかった魔のお話、天使のお話、金の果実のお話・あっという間に様々なストーリーができあがりました。利用者さんの人生経験の深さが感じられます。第一回目は作話のみでしたが、次回は絵もつけようと、本格的な絵本作りに進む予定です。（ま）

ひと花センターは、西成区単身高齢生活保護受給者の社会的つながりづくり事業として、２０１３年７月１日からスタートしています。

第4号　ひと花新聞　平成25年11月

ひと花句会

<句題>運動会、くりごはん、どんぐり、いわしぐも

夢かいな　さんま松茸　ひれ酒で　（酔人）

栗ご飯　おひつ開けると　夢一杯　（神戸）

さんまやく　だんなとネコの　にらめっこ　（善人）

萩香る　風に寄りそう　おやこずれ　（南紀）

ハッスルや　足がもつれて　運動会　（深海）

今はなき　冬なればこその　運動会　（貴和心）

天高く　いわしぐもかな　歩み止め　（やな童）

１１月は　特別　「ひと花川柳会」をします！

エコバッグ作り

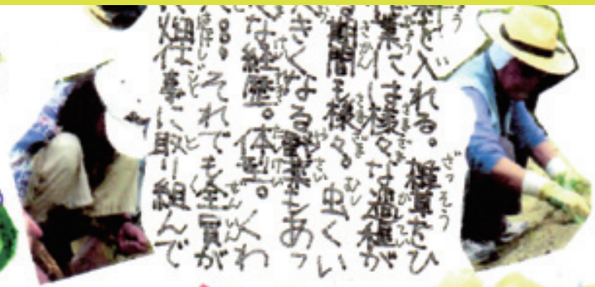
欲しい。と思わず言ってしまうような品品を目の前にするとせる気がわいてきます。ライフサポート協会の協力のもとミシンで縫製体験しました。面倒の生地にアイロンをかけて、切って縫って。みんなで楽しく作れてかっこよく。環境にやさしい。良いことづくしです。（ひ）

農作業

秋です。種をまく。肥料をまく。苗を移植する。草を刈る。収穫までにかかる。でいたんでもそのままたり。米用者さんも様々を持つ方がさまになるく楽しげ、はせっきょく的にいます。（ま）

ひと花咲

花の種まきを行いました。まいた種はパンジー、ビオラ、葉ぼたん。温度が高いので氷水を使い、ポッドに土を入れしめらせます。その後、1マスに1粒の種をとがらせた割りばしを使ってまくという細かな作業を黙々と皆でおこないました。土がかわくたびに霧吹きで水をやったり、夜間はとりいれたりと発芽までは手間がかかります。ひと花センターでは、引き続き、「ひと花」咲かせるとりくみを進めていきたいと考えています。（こ）



ひと花 新聞

第5号

平成25年12月5日
発行：NPO法人釜ヶ崎支援機構
ひと花センター
〒557-0016
大阪市西成区花園北1-2-
電話：06-6649-7890

11月 地域の中で ひと花センター

ひと花センターが開所して5カ月。地域の中の活動にお声かけいただくことも多くなりました。そんな今月の地域活動の紹介です。

トーンチャイム

萩之茶屋文化祭
看板づくり

今宮地区清掃

こども大運うんどうかい
お手伝い

一本線公園
草むしり

きらっと光る今宮
イマナリ工準備

覚醒剤撲滅
パレード参加

早いものでひと花新聞も5号目で。十二月となりました。旨い事を言ったもので!!十二月の事を数え月と言うんですね!!いさて。十一月の出来事、思い出を数えると覚醒剤撲滅パレードに参加したり。トーンチャイム演奏会をひと花センターで開いたり。イマナリ工準備の飾りつけ地域に開放する日こどもの里の運動会等々に楽しかったです人花センターは始まったばかりですこれからがますます楽しみです

亀谷長孝

今月は運動会子供たちは楽しまれていました
あれたちも子供たちは赤組に分かれて
昔をおもえばようぎ盛りました
いろいろのさいになったらしょうひ
一等二等したが今の子供は
をもらうはいがした
なかったみたいきと借りて
さいごに7人としました(柳川)
さいごにつかれ
きょうそうた

ひと花プロジェクト

あいりん地域にて単身高齢で生活保護を受給している方の社会参加、及び生活支援のプログラムを行う事業として2013年7月にスタートしました。プログラムを通して孤立を防ぎ、地域・社会とのつながりをつくり、ひとりひとりが生き生きと生きられるよう、またそれによって地域が生き生きとなるような活動をめざします。

おじいちゃんとこどもたち
いまおもえばおおぜいのこどもたちと
あそぶのわれ何せ年ぶりだろー
なつかしくおもいこどもになって
いろいろなおもちゃであそび
一時間あまりのとさをたのしくあそび
ました。またスタッフがクおじいちゃん
おじいちゃんといわれこどもたちに
おりがみでたなにかをつくってあげて
がんばってといわれ
うれしいやら

鹿島勝武

十一月二十八日2回目となる地域開放日「ひと花ゆめひろば」を行いました。事前の準備からはりきるひと花メンバー。当日はわかくさ保育園のこどもたち、地域に住まれている高齢の方、福祉の仕事をされている方など約50人ほどの方が来てくださいました。次回は12月21日土曜日です。ぜひお越しください。

ひと花×メンバー 長生きの秘けつ コーナー

いけだかずやす
池田一安さん(70才)

1、腹八分目
2、早寝早起
3、酒は1日1合
4、タバコは1日15本
4、薄味、薄せ味
5、1日1万歩

朝起きるときには腹筋を使います

7月から始った農作業体験
参加し、11月末になりました。
皆さんと一緒に作ったにんじん、
小松菜、大阪しろな、ねぎ、ダイコン、
少しずつですが取れようになり
今後、たのしみです!

孫さん

ひと花野菜コーナー出店します。

12/7 萩之茶屋文化祭でひと花やさいコーナー出店します。
場所：仏現寺公園　10：30～

第5号　ひと花新聞　平成25年12月

11月の表現プログラム

ヨガ

リラックス体操

美術のじかん

からだとこころをほぐす

書道

詩のじかん

バントマイム

プログラムは楽しいよ。お喋りが、からだと心をほぐす会。
「忘」でもあるね。みんなわすれ雨降りの仲間の仲間の
あっこちゃんの会の先生が温かいね。人でさ
あい会のメンバーが好いね。正直者目と心
美術の時間と即座に出れるね
詩の教室が心開けるね。
「リラックス体操」で温まり楽しく
笑ばね。バントマイムも楽しく
会話ができるかもね。

ひと花劇団旗上げ

会員の皆で脚本が集まって立ち上げました。何しろ素人集団ですので最初は台本を読むのもおぼつかなかったですが、何回もくり返しの練習でなんとかさまになって来ました。本番ではどうなる事でしょう。乞期待です。

（吉岡）

「情けは人のためならず」

ひと花さんぽ

11/7

ひと花さんぽ　ひと花

絵本のよみ合わせ会から発展

☆ひと花小説①☆

ガード下のキリスト ①

岡本 元晴

ぼくは，大会社につとめる，エリートサラーリマンです。のりかえで，うすぐらいガード下を通って毎日 同じ，じこくに電車にのって会社に行ってます。ある夏のあつい日に ガード下を いそぎ足であるいていると，白いひげをはやした，りっぱな しんしとぶっかりそうになりました。ぼくは おもわず，すみません，と言って，わかれました。二，三日して ガード下のかなあみの所に，あのしんしがいました。なにかぶつぶつ いいながら あみの目をよこかぞえています。よくみていると，はしからはしにむかって，手であみの目を1つ1つ かぞえています。1つ，二つ，三，〜〜10〜100とぶつぶつ，いいながら かぞえています？ ぼくはなにをしているのだろうと 思いながら 会社にいそいでいきました。夕方 帰り時も まだぶつぶつ いいながら かぞえていました。？

暑い夏もおわり秋になりました，あの白いひげをはやしたしんしは，かおがくろくなり，白いワイシャツもくろくなっていました。

アッアッ言いながら あみの目をかぞえています。ぼくはしんしのおとうさんは，ごはんをたべているのか，しんぱいになりましたが そのまま会社にいきました。

ひわす前のサタデーひとこと

人生は山のごとし一歩一歩前進（池田）

墨絵の青い時間の言葉もあっん 秋山〜〜〜 ボ 悲しい（兄彦）

寒になり さむくなりました。みな 風をひかない様に がんばって 年をこしたいと 思います。（元晴）

人生いろいろ 日々まじめに生活していればきっと良いことがあります。（平栗先生）

体重が減りすぎ!! 頑張って、沢山食べます。（鈴木）

何も知らずに生きてた頃が 俺にゃ一番 楽だった 明日の私の為 嬉しくて（浅田 裕）

ボランティア見学について

ひと花センターでは見学、ボランティアの受け入れを行っています。また地域内でのボランティア活動も行っています。あいりん地区の近隣地域にある公共施設（公園、道路、学校、保育園、公民館など）の清掃や草刈り、催しのお手伝い等をしています。くわしくは事務局までお問い合わせください。

※公的施設以外の個人依頼は受け付けておりません。

※ひと花センターを利用しているメンバーは65歳以上です。体調に配慮しながら作業を行いますので、期間や時間、場所によってはご要望に沿えない場合があります。

今週月曜は映画！

ひと花メンバーおすすめ映画コーナー

「人間」1962年 作品
主演：乙羽信子、殿山泰司

新藤兼人監督作品
「人間」（1962年 乙羽信子 殿山泰司）
人間の本質とは 日常の中では表られるものの 時に表られてくる 人間とは何か？ という 作品を描いた 傑作です。

浪ケン

ひと花新聞

第6号

発行・ひと花センター
〒557-0016
大阪市西成区花園北1丁目2番19号
06-6649-7890

今年もよろしくおねがいします
押川晴見

謹賀

ガんたん　正月
おめでとう
今田

明けまして。おめでとうございます。今年も皆さんと。日々を大切に大切に過ごしたいと思います
よろしくお願い亀谷長孝

本年

新年

もよろしくお願いします

開所から半年、これからもがんばります

あけましておめでとうございます。おかげさまで開所から半年が経ち、無事に新年を迎えることができました。

振り返りますと「からだとこころをほぐす」の日田逢いを体験する」と題し全員参加プログラムにはじまり、書のワークショップ」詩の時間」「こころヨガ」「いくつになってもペントマイム」美術の時間」「リラックス体操」など様々な表現プログラムに参加いただきました。

また、地域の方の声かけから、一本線公園や花園公園、仏現寺公園などの清掃や、こどもたちの運動会やお祭り、萩之茶屋文化祭などのお手伝いを担うとともに、「ひと花ゆめひろば」として地域の方をお招きしました。

農作業や花づくり、健康教室や空手などいろいろな体験をしましたし、散歩や映画鑑賞、食事作りや句会、絵本の読み合わせなど楽しいプログラムも行いました。

これからも、楽しく、興味深く、やりがいのあるプログラムを提供していきたいと思っています。

本年も引き続きよろしくお願いします。

悔いのある人生より
悔いのない人生を
ひと花センターで
来年以降
一つでも二つでも
実りある人生にしたい
井上勝一

ひと花へつづけて
続けるように　岸岡楚裕

ひと花センターは、西成区単身高齢生活保護受給者の社会的つながりづくり事業として、2013年7月1日からスタートしています。

第6号　ひと花新聞　平成26年1月

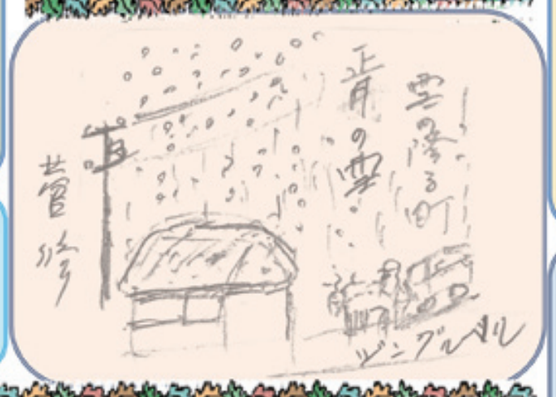
一年を振り返って

蛇から飛躍 馬へ
2013年 年しの 2014年
ひと花センターが自所
早い物で半年が過ぎようとします。
いい仲間が出来て幸わせです
来年も宜しくね。 岩井孝寿

人生にて
はじめての心が
いやされた
青木

本業・実家ともに農家なのに
ボンボン育ちの私は 鍬を入れ方も
ぼっちゃなく 作業も生ぬるかった
でも岡井さんが優くてやさしかったです
（子田）

ひと花に参加させ頂いて
自分の事が元気に
なった事明るくなった事
です
菅 修



萩之茶屋文化祭での芝居出演が一番心に残りました。メンバー皆苦労しながら当日を迎えましたが、何んとか出来かなり好評だったようで又機会があればやりたいと思います。 吉岡

いくつかの体験が潜在的な欲求を
換気して意義ありました
戎田 穏

ひと花センターが出来て5ケ月ですが
自分にとっての農作業や散歩の会は、体力、気力
の増進やぼけ防止に繋がり、充実した5ケ月
でした。池田一安

いろいろなプログラムで
自分の苦手なも、得意なこ
とも解った。
昨年同様に楽しませて頂きます。
けこ渋

ひと花も半年です！

初めての顔合わせ以来、色んな人に会えて、
日々楽しく過ごせました。もう年の最後になり
来年を楽しみにすごします。 鈴木俊夫

一年をふり返って一花って何いって
感じでした。最近 理解出来ました。
来年の一花の飛躍に期待をし乍ら年過しです
大西常夫

失敗しました。
ちょっとした不注意で
足の骨折しました。
不覚のきわみ
ユスキ

いいことばかり
ではありません
でした！

よろしく！で～す

年末に入会しました
皆さん好人物、人格者ばかり
幸せを感じております。
何卒よろしく
井上淳一

今年はあまりいい事がなかったです。
来年はいい事がある様に神さまに
お祈りをしたいと思います。
岡本元晴

ひと花センターは、西成区単身高齢生活保護受給者の社会的つながりづくり事業として、2013年7月1日からスタートしています。

ひと花新聞
第7号
発行：ひと花センター
〒557-0016
大阪市西成区花園北
1丁目2番19号
06-6649-7890

われらチームひと花！

ひと花センターでは地域開放の日「ゆめひろば」について皆が話し合う時間を設けました。来られた人の笑顔をもう一度見たいと意見が飛び交います。またその時間は普段の思いや気になることを話すミーティングの場にもなります。そうするとご招待するだけでなく地域にくり出してお助け隊をしたいという要望も増えてくるわけです。

今年、地域活動は新たに今宮工科高校周辺の清掃を毎週行うことを始めました。また街のプランターに花の苗を植えて地域の美化に努めます。

皆が集まって話せば同じ思いの仲間が多いことに気づく。自分たちが何かをすることで誰かが笑顔になること。それが私たち「チームひと花」の笑顔にもなるのです。

今宮工科高周辺清掃（上）
街のプランターへの花の植え替え（左）

（今月のひと花句会）　お年玉　はずんで出して　身がほそり　（系人）　たこ上げに　絆戻りし　父と子か　（貴和心）　初詣　いのったちかい　すぐやぶり　（春人）

3月16日(日)シンポジウム開催決定！

シンポジウムとは多くの人が集まって一つの問題について話し合うことや研究発表することを言います。ひと花センターも平成２５年度の締めくくりとして私たちの活動の集大成としてシンポジウムを開催します。またその前に誰もがひと花を体験できる「ひと花オープン週間」として１週間を設け、さらに多くの人に関心を深めてもらおうと考えています。１人でも多くの人が私たちとふれあうことにより何かを感じてもらえたらと思います。

質問「ひと花を利用して何か変わった？」①

今までだらだら過ごすことが多かったけど予定を立ててそれに向けて生活できるようになった。新しく利用する人には恥ずかしがってないで輪に入ってほしいな。みんな親切に教えてくれるよ。(I)

はじめは不安があったけど農作業は慣れていたし来てみようと思った。ずっと利用していたら自然と話ができるようになった。昔からの仲間には別にボランティアみたいなことしなくでもって言われるけど自分は好きでやっています。(O)

仕事したくてもできないままずっと１人。食事も１人。今はまだ知らない人ばかりだけど輪に入ってみんなで食べることはいいね。今までにはないリラックス感がある。(I)

今まで朝早く起きて行く所がなく。言いたいことも言えずに辛かった。でもここを利用してからガラッと生活が変わったね。もう75歳になるけどなんでもっと早く今のような生活しなかったのだろうって思う。(A)

ずっと１人で何でも決めてきたが仕事をやめてみて角がとれて穏やかになったような気がする。人を想う気持ちが強くなった。でもある程度の責任は必要。何でも自然体が１番。熱しやすくて冷めやすいとすぐに飽きてしまう。自分に合ったことをコツコツとすることが長く続けられるコツ。(I)

僕が楽しみにしているのは「あっこちゃんの会」。難しいことではなく他愛のないことを和気あいあいと話しあうことが楽しい。ずっと楽しみにして参加し続けているとその間に友人ができた。(F)

毎日部屋でテレビばかり観てひまつぶししていた。でもボランティアみたいなこと、掃除や草むしりなんかやっていいね。話し相手も増えていった。たまに参加する映画も面白い。(O)

人と話をすることがない日が多かったけど今はあいさつする人がいればちゃんと返してくれる。それだけで癒される。生活もリズムがついてきた。健康になったのか最近お腹がすくようになってきた。1人でいるとくよくよしてしまう。皆といれば余計な事を考えなくていいね。(S)

今月の収穫

師春と言えども寒い日が続きます。しかし農作業は熱いです。きれいに育った大根、白菜を収穫。土場もだんだん良くなっています。この時期温かい鍋などにぴったりです

ひと花センターは西成区単身高齢生活保護受給者の社会的つながりづくり事業として、平成２５年７月１日からスタートしています

第7号　ひと花新聞　平成２６年２月１日

ひと花ダイジェスト

ひと花小説「ガード下のキリスト」②

岡本　元晴

さむい　さむいなかやってきました。ぼくもオーバをきて　いつものように会社にいってます。あのしんしのおとうさんも　オーバをきていました。だけどオーバと　いっても　あっちこっち　やぶれて　穴があいていました。かおを見ると　白いひげが　くびの所までのびています。手をみると白いてぶくろで　人さしゆびの所がやぶれて　ツメがくろくなっていました。ぼくは　このさむい日でも　かなあみの目をかぞえて　やぶれたのだと思いました。その日　会社のぼうねん会があり　おそくまで　のみガード下をとうて　いると　あの　おとうさんがいました。ぼくは，よった　いきおいで　おみやげのすしを　ひげの　おとうさんにあげました。おとうさんは　びっくりして　ありがとう　ありがとうと言って手をあわせました。ぼくは　はずかしくなって　手をふりながら　はしって電車にのりました。あくる日　いつものように　ガード下　とうていると　いつものヒゲのおとうさんがいません。会社にいっても，おとうさんのことが気になり仕事になりませんでした。

美術「壁画を描くイメージ」！

演劇を基礎から学びます！

みんなで健康になろう！

区長を囲んで門松つくり！

工作の時間で鬼の面を作る！

ゆめひろばも慣れてきました！

新春の書き初め！

質問「ひと花を利用して何が変わったか」

お金を早いうちに使ってしまって困ることが多かったけど今は余裕をもって使うようになった。農作業や草むしりによく参加するけど外に出て何かをすることは気持ちいい。(O)

家にずっといるとしゃべる相手もいないし何を食べてもおいしくない。人づき合いをはじめてから食べ物がおいしく感じられるようになった。服装や身だしなみも気をつけるようになった。(S)

何か1つの事を始めるとそこからいろいろなことに興味が広がる。自分からやりたいという気持ちが起こり、また仲間も増えた。内気だった自分が積極的に人と話せるようになったと思う。(Y)

孤独からの解放は心身ともに健康にする。寂しさから病気になることもあると思う。皆と話をするようになってから寂しさがなくなった。今は買子も良く楽しいってことです。(H)

利用を始めて気持ちがプラスに働くようになった。心・身・新。これが私の今の心情です。(I)

友達づきあいしていたら皆健康になると思う。今まで時間がありすぎたし気分も暗かったと思う。今では気分も明るくお酒を控えるようになり食事も3度とるようになって体が良くなった気がする。(S)

調理のプログラムに参加するようになって自分の料理の品目が増えたね。あと表現プログラムもいい。手をつないで輪になって踊ってね。ああいうのは面白くて参加したいね。(O)

生活が豊かになったと思う。お金もあまり使わなくなったし健康になった気がする。食事にも気をつけるようになり体が引き締まった。なんだか若返った気持ち。(K)

四世代の人が集まっていろんなプログラムに参加できる。人生が長いと俳句や書道など昔やったことで今までやってみたいと思っていたことができなかった。今になってやっとできたと思う。(A)

人とまとまって何かをすることは苦手なのだけど1人でいると気分が落ち込む。居場所、農作業、清掃活動など誰かに気兼ねせず一緒に何かをすることは気分が安らぐ。(F)

部屋でじっとしていることが苦手なのでいかに1日を楽しく過ごすかが課題だった。今ではほとんど毎日楽しく利用しているのでひと花センターには感謝している。もっとここを知ってもらってみんなで話し合えたらもっと楽しくなると思う。(K)

今まで人付き合いはしなかった。何でも1人で決めた。でもみんなと知り合って話をし始めるようになった。はじめは下ばかり見てたけどポソポソとでも話せるようになった。誰かが自分の話を聞いてくれることがすごくうれしい。(N)

仕事をやめると忙しさから離れて気楽になれたと思えたのも束の間。なにもしない日が続くと仕事をしていた方が良かったと思える。そんなとき農作業や草むしりに参加してみていつの間にか人とよくしゃべる自分がいることに気づく。「まずひと花に行ってみよう」と思えるようになった。(T)

興味のあるプログラムに参加する。特に血圧のことが気になるので健康教室には出席するし、絵具で絵なんか描いても楽しい。いろんなプログラムを通して人と人とが出会うこと。そこでみんなの顔を見るだけで気分が良くなる(Y)

ひと花メンバーのつぶやき！

生涯の目覚め

ひと花センターで私の人生は一変しました。以前の私は一匹狼のように一人でいかなる困難にも討ち勝って、克服した自信で天狗のように鼻が高かったと思います。

危険で困難な仕事を完成させ、優越感に満ち生きがいにして来ましたが、仕事をリタイアしてからひと花で素晴らしい仲間にめぐり合えて見かけうることで自分の視野の狭さに赤面です。

素晴しきひと花の同士ならびにスタッフこれからも宜しく

池田一安

お仕事体験始めました

2月より自転車リサイクルプラザとこえどことばとこころの部屋（ココルーム）のインフォショップカフェでお仕事体験としてメンバーが活動を始めます。いくつになっても生涯にわたって学び活動し続けたいという気持ちは変わりません。自転車の解体を体験して活かしたい、倍宮を通して人との関わりを感じたい。緊張半分、期待半分、意欲が高まっています。

ひと花センター　ホームページ開設しました。ブログ更新中！ぜひのぞいてみてください！　http://hitohanap.org

ひと花新聞

第8号
平成26年3月1日
発行：ひと花センター
〒557-0016
大阪市西成区花園北1丁目2番19号
06-6649-7890

新年度に向けて

ひと花新聞第8号目ですね!!
確か役所仕事は三月で締めて四月から新しい年度が始まるんですよね!!とにもかくにもお日出度うございます。去年の七月から始まって色んな事が有りましたよね!!あんな事こんな事。本当に御苦労さんでした。スタッフの皆さんこれからが大変です。これからが本物になるんです。気を引き締めて頑張って下さい。ひと花センタを長く長く続けて下さい。お祈り申し上げます

[illegible]

春にしたいこと

花見
ボーリング
ソフトボール

[illegible]

私はひと花に世話になってから自分の体力も良くなってきました。これからも長くお世話になります

すが

ひと花センター

行き

一月早く

休前と

一緒だ〜〜

支援センター　総合センターに入れていただいて四ケ月が経とうとしています。お姉さん　お母さん　系目さん　まさて　山田さん　ロロルームの上田さん　色々　楽しくスタッフの皆さんと和気あいあい　支援していただき本当に嬉しかったと思っています。

北の人達に大変有難い　アドバイスもいただき　個　千金の価値が有りました。

特にココルームで買い物をした際　それぞれ　なくなりげなく　[illegible]さん　崎　英　樹　大変のパン　プレゼントを渡してくれた　上田先生　本当に有難う御座居ました。

今後　宜敷くお願い致します。

平成二月十八日　井上洋一

来年度に向けて

「継続を華に」

ひと花センター
いつまでも
いつまでも

(A)

ひと花センターには優しいいちさんが沢山居ります。子供達がそこと遊びに来てくれると楽しいなと思います。

ズーさん

[illegible]

[illegible]

[illegible]

第8号　ひと花新聞　平成26年3月1日

詩の時間

仲間の人生模様を聞きながら
吾が身の人生を手ヨイと織りまぜて
詩をつくる。各人各様の人生模様は
百花繚乱、痛さいもの、哀しいもの、
楽しいもの、地球のエネルギーにあふれたもの、
とてもじゃないが余りにも生々しいので
申し訳ないとは思いつつ　軽くペーソスの味を
加え　詩をつくる　ちょっぴり泣きたくなるような
作品となる。でも何故か　温まるよ心が。

―吉田孝一―

ひと花句会

【ひと花句会　今月の俳句】

寒空に　鬼を追い出し　後悔す　（采人）

赤鬼が　お金おとして　青い顔　（池之辺）

福豆を　数えて悲し　老いにけり　（楚孝）

俳句の会は楽しいです

お猫の鳴きな人は、お猫の句を、まとめな人はまとめな句を、楽しい人は楽しい句が、句を見ただけで、誰の作か分かるようになりました。私は下手な句しか作れませんが、それでも毎月入れてくれて、ありがとう。（スミ）

ひと花

笑劇団

バレンタイン　もらった頃は　髪長し　（赤鬼）

ソチ五輪　最後のたのみ　高梨サラ　（やな筆）

ひと花ゼンターが3月の年度末を迎えて3月16日に「ひと花シンポジウム(仮)」を開催する。だったら利用者は去年7月に開所以来、様々な来客、手先を無器用な私は身ら詩や俳句の去年「第2芸術文化祭」で「ひと花笑劇団」と題打って20分程の寸劇を出したが、失敗やトチりの連続として名作「人生双六」をベースに聞きした物語ります。足下にも及ばないが、大阪の文化の香りをほんの少しでも感じていただけたらとの思いで、今年はこの真似をする。

3/20。サラ会は「ダメと叫ぶ」ソチ五輪　浅田　舞

土と戯る

地水火風　緑の地球に感謝　地田

① 土を耕す事は田返すと言い田畑に作物を植える準備として田畑を耕し返す事です。
土は自然の一部ですが愛情を持って土に接すれば土も答えてくれよい土に成ります。
畑に一度は天地返しを心掛け無いと土が締まって硬く成り、植物にとってはよい土とは成りません。

② 天地返しとは土の表層部と下層部とを入れ替えるため深く耕す事です。
天地返しは土の中に空気と栄養を均等にとどかせます。
植物は根から酸素、水分、栄養を吸収し、葉から太陽光で光合成をして酸素を排出して育つのです。
野菜もまた環境の浄化作用の一役を担っています。
天地返しは農業の基礎ですのでこれからも心掛けるつもりです。

ガード下のキリスト③

岡本　元晴

その日も上司とおさけをのんで　おそくなりました
いつものガード下をとうて　まんなかごろまでくると　教会のシスター
3人がかなあみにむかって　おいのりをしていました。

シスターの足元を見ると、ダンボール紙にキリストとじゅじかのえを
かいた物があり、白いきくの花束がおいてありました。
ぼくは　なにか　ありましたかと　きくと年をとった　シスターが
いつも　ここで　かなあみの目を　かぞえている、白いひげの　おとうさんが
あさのさむさで　とうし　したと言う事です。
ぼくは　びっくりして　シスター　に　いろいろ　しつもんを　しました。
あのヒゲのおとうさんは　あさと　夕方、教会で　おてつだいをして　パンを
もらっていたそうです。
年は70才で大会社の社長をしていた　そうです。
バブルがはじけて　少しあたまが　おかしくなって　ここにすみついたそうです。
ぼくは　なんで　かなあみの目を　かぞえて　いるのかと　きくと
あの人は　せいしょうの　1ページから　おわりまで　のおしえを　ブツブツ
いいながら　かぞえていたそうです。
ぼくは　あの　せいしょうを　ぜんぶ　あんきして　いると　きいて　びっくりしました。
シスターにゆかれをつげ、ガード下をでると　雪がふってきました。
今日は12月24日です。
あのヒゲのおとうさんが　今日　なくなったのも　かみさまの　おみちびき
かもしれません。
ぼくも　手を　あわせて　ひげの　おとうさん　天国で　しあわせになって下さいと
いのりました。（泉）

楽しい絵本の読み合わせ会

ひと花小説③

絵本のよみ合わせ会から発展！

紙芝居劇について

ほぼ読み合わせ会の中で、絵本の読み合わせしたり紙芝居を演じたりしていますが、どちらも一人ずつやる方が多かったと思い、同時に多数参加出来る紙芝居をやってみようと考え、今回の紙芝居「かぐや姫」を作ってみました。昔物語りの絵本を参考にし、セリフを振り分けし又追加し紙芝居としました。次回は独自の作品を作ってみたいと思っています。

（M.Y）

第9号　ひと花新聞　平成26年4月

ひと花新聞

第9号

平成26年4月4日
発行：NPO法人釜ヶ崎支援機構
ひと花センター
〒557-0016
大阪市西成区花園北1-2-19
電話：06-6649-7890

平成２５年度　ひと花プロジェクト

3/16 シンポジウム

みんなに会いに来ています。

3月16日（日）ひと花プロジェクト2013年度の締めくくりとなるシンポジウムを西成プラザにて行いました。朝から夕方までの長丁場。足を運んでいただいたみなさま、お話いただきましたゲストのみなさま、いろいろな部分で協力いただきましたみなさま、そして企画から準備・出演・カレー作りと会をつくりあげたひと花登録メンバーのみなさん、本当にありがとうございました。

シンポジウムを振り返って
釜ヶ崎地区で活動してる各団体が地区外の団体の方々や関心のある方々が来場下さって、実に有意義なシンポジウムだった思います。今後もどんどん取り入れて、花人花の存在を知らせるよい機会だと思います
サズ池田

スケジュール

9:30　開場
～第１部～
10:00　オープニングパフォーマンス
10:15　あいさつ
10:20　地域の現在・プロジェクトの背景（松本裕文）
10:45　ひと花プロジェクトの報告（廣谷 賢）
11:25　ひと花イタリア仮面劇発表（フラテルナル劇団＋ひと花メンバー）
11:50　お昼休憩　－メンバーでつくりのごはんがあります（カンパ制）－
～第２部～
13:00　ひと花笑劇団 劇「人生双六」上演（ひと花笑劇団）
13:25　地域の活動拠点のお話 地域8団体（予定）
14:40　休憩
14:50　北九州ホームレス支援機構での取り組み（鈴木しもん）
15:30　ひと花メンバー 座談会（西川 勝＋ひと花メンバー）
16:00　体ほぐしと会場全体でお話（岩橋由莉）
16:30　まとめ（西川 勝）

来場者　アンケートより

●西成のやさしさを感じた
●皆さん元気で続けて下さい
●朗読も仮面劇も上手で感動しました
●ひと花メンバーさんの座談会での言葉「和ができたらうまくすすむ」がひびきました。
●「人生双六」すごい感動をもらい、今日来てほんとうによかったと思います。

ひと花プロジェクト

あいりん地域にて単身高齢で生活保護を受給している方の社会参加、及び生活支援のプログラムを行う事業として2013年7月にスタートしました。プログラムを通して孤立を防ぎ、地域・社会とのつながりをつくり、ひとりひとりが生き生きと生きられるよう、またそれによって地域が生き生きとなるような活動をめざします。

ひと花 オープン週間 3/6～3/11

月に一回開かれていた夢ぎらばが今月はオープン週間として五日間、外部開放になった。我々利用者がどんな事をしているのか、知ってもらうための展示。フラワー、各プログラムの成果（絵、書道、工作、折紙など）の展示。など、各自出来ることで楽しみながら準備に追われました。当週間中は、寒い日が続き、日つ平日でもありながら、参加者もそこそこあり、ながらも連日来て下さる方も居り、無事終了でムデタシ、メデタシでした。

すずき

4月の「ひと花ゆめひろば」は4月12日（土）に行います。

三月十七日　月曜日
今宮工科高校の演そう会
本業生（三年生）三名、二年生
一年生で計六名での演奏
すばらしいかったですよ。
OBの方そして先生方の
飛びいりで、すごく盛り上がり
ましたね。途中三年生、三名に
寄せて、トーク。楽しかったです
一年生の方は、月程で、立派に
演奏。ガンバッテ下さり
新入部員の皆様ガンバレ
ガンバレ今宮工科高校
ブラスバンド部　岩井

ひと花メンバーで周辺道路の清掃をしている今宮工科高校のブラスバンド部の卒業コンサートに声をかけていただき演奏を聞きにおじゃましました。

今宮工科高校ブラスバンド部
クライマックスコンサート!!

イタリア仮面劇ワークショップ 3/14・3/15

3/14、15の２日間イタリアフラテルナル劇団のマッシモマッキャベッリさんによる、イタリア仮面劇ワークショップが行われました。仮面に魅了された２日間でした。

マッシモさん

大阪市立大学都市研究プラザ共催

参加メンバー感想

私は腹を減らした。腹筋をやりました。あー！ホッカホッカ亭の弁当が食べたい。念願の弁当を終えたつもりですが、果してその味はいかに？　ターシー

ひと花劇団「人生双六」公演を終えて一言

3月16日に、西成プラザにて第2作目となる「人生双六」を上演したひと花笑劇団のみなさんから、今回の公演の感想をひとこと。

芝居は演る者と観る者とのつながりで出来あがるという事が感じられました。
浅田 稔

新川役

僕女性の役で始めはそぐわなかったけどなんとか終る事が出来ました。
亀谷 長孝

静子役

当日迄セリフが半分も覚えていましたが、本番は緊張のあまりリードもありかろうじて云へました!!
夕田 雄一

小林社長役

2回目の公演「人生双六」主役の新川さんは別格として、我々大人数精一杯頑張りましたが、どうでしょうか。
吉岡 浩幸

浜田役

短かいセリフでも、覚えるのに相当苦労しましたけれど本番では半分くらいしか出えなかった。それでも、皆さんと、意気と合わせて、何とかやり切った。
鈴木 俊夫

通行人1役

小学生の時、学芸会で村人その4をやっていた。実力発揮かっこよかった。
井上 洋一

通行人2役

私は見おうにいきましたがなかなかセンスのある演技でしたでも足付とーしは最初でした。
菅 修

歌手役

書道　わんぱうを使って

工作　桜の木をつくりました

表現プログラムの3月作品

美術　壁画制作中!!

三月二十八日　金曜日　今宮小学校の草むしり

こうえんのわきの草むしりをやりました。ふさり草なかなかむしれない草。色々な草がすこしずつむしれた。ぼくは十一時なったらクリニック入へいきました。
押川

参加して始て作業の難しさ今までなんだなと感じていた野菜がこんな苦労して出来ると思うと農家の人々大変と思います。
自分も今ダイコン小松菜、ネギとり又、3月かまのぶトルそうり、夏野菜がたのしみです。
藤井

3月 さんぽの会

天王寺区

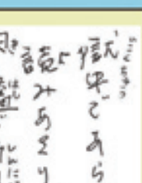
今月から、おさんぽエキスパート陸奥賢さんといっしょに、まちを歩きます。

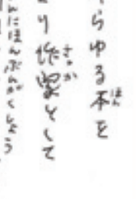
地下鉄大阪にトイレのベルリンがあるのじゃんじゃですか えんがあるのです 私は本物のベルリンのかべにふれました 大かんげきでした。
佐藤

天王寺にある統国寺のベルリンの壁↓

ひと花ペンパル　しゅみのおはなし

春ですね 山や海へ出掛けませんか 私は海ばかりですが 海は良いですよ あたたかい朝風きらきら光る水面 大声で歌っても叫んでも 運が良ければ魚達にも逢えます 釣りの楽しさ面白さを話しに来て下さい
(笑)でもこの新聞が出る頃私は病院のベットの上。





ふじやん

毎週月曜は映画！ ひと花メンバーおすすめ映画コーナー

はだか じゅうきゅうさい「裸の十九才」

出演：原田大二郎・乙羽信子
監督：脚本：新藤兼人
1970年10月31日公開

「就職でもあらゆる本を読みあさり作家として私の場で新日本文学賞受賞した死刑囚永山則夫の力強い人を射殺するという犯罪を犯かすまでを描いた傑作である。
ケン

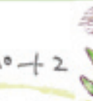
就業体験

今まで経験した事がない自転車の解体をしさびた部品をきれいにみがきわからない事ばかりで一つおしえてもらい自転車を組立ました。楽しい一週間でした。今自転車に愛着を感じ今その自転車に乗っています。
鹿島

絵本のよみ聞かせから発展!! ひと花小説 パート2

一郎と二郎の母のとり合い①　作：亀谷長孝

うるさい市場たかい物にいくようと母の声
そこで父が一言……いつも一郎ばかりつれてたかないで
たまには二郎もつれていけなと言うと
おくで遊んで居た二郎が一寸顔を出した
すると二郎もつれていってほしんだけどつれないそぶりをしてる
そこで母が二郎を置いて二郎をつれて買い物に市場に
いった……残された二郎が父に向かってぐずり出した
お父さん、なくてもいくな事言ったんだ。僕が一番行きたかったのにと父に知ったそこで父がゴメンゴメンたまにはお前とおるすばんをしたかったんだゴメンなー二郎
どうだったまにお父さんと出かけようかと僕がとりかけるなぜか。二郎が考えてジャガジャ屋に行きたいと言った
お母さんの前で絶対に言わない事だ!!よし行こう!



ひと花プロジェクト　掲載記事

2013年12月15日
センターだより

2013年11月28日
大阪日日新聞

皆と過ごす楽しさよ

西成区

日本の人口の４人に１人が65歳以上で、高齢者の社会的孤立が社会問題となる中、生活保護を受給する単身高齢者を対象にしたつながりづくりが、日雇い労働者の街として知られる大阪・釜ケ崎（西成区）で行われている。居場所となる施設を核に、農作業から芸術活動まで多彩なプログラムを支援団体が用意。登録者は100人を超え、笑顔の"花"を咲かせている。（加星街鷹、浜崎杏子）

釜ケ崎・高齢者孤立防止の取り組み

ひと花センターで演劇の練習に励む利用者ら

「居場所」を整備　演劇や農作業

「そこで客席の方を向いて…ありがとうございました！」

22日午前、歯科診療所を改装した明るい室内で、数人の男女が演劇の練習に励んでいた。釜ケ崎で生活保護を受給する単身高齢者が利用できる施設「ひと花センター」での取り組みの一環だ。

NPO法人釜ケ崎支援機構ら5団体が、西成区の事業を受託して7月からスタートさせた。

外部の専門家が講師となってプログラムを展開していたが、このほど演劇に詳しい利用者の男性（66）を中心に、地域イベントで演劇を発表したいとの声が上がった。

脚本や演出を手掛けるこの男性は、かつて老舗の役者の仕事などを経験。2年前から生活保護を受給し始めると、家でテレビを見たり、図書館で読書をする生活で「人付き合いは大幅に減った」。そんなときケースワーカーの紹介で施設を利用。「孤独に強いほうだが、やはりみんなでやるのは楽しい」と笑顔を見せる。

演劇は、28日の施設開放日にお披露目。12月6日の地域イベント「萩之茶屋文化祭」で発表する予定だ。

高齢社会白書などによると、高齢者人口に占める一人暮らしの割合は1980年から30年で男性は2・5倍、女性は2倍に増加。孤独死といった社会的孤立が問題となっている。

特に西成区・釜ケ崎（推計約2万5千世帯）では、生活保護受給者約92000世帯のうち、65歳以上の受給者は7割強。受給者全体の約9割が単身世帯のため、高齢者はほぼ独り暮らしの状況だ。

2005年度の大阪市らによる聞き取り調査では、生活保護を受給してアパートなどで暮らし始めた高齢者のうち、人との交わりや会話が減った人は34%、楽しみ事が減った人は23%に上るなど、対策が長年の課題となっていた。

同事業は、社会的に孤立する人が、人とのつながりの中で元気を取り戻し、ひいては区全体の活性化につなげるのが狙い。ひと花センターの取り組みでは、利用者が地域の学校の運動会の設営などに協力。その後、地域住民との交流に発展するケースもでている。

同センタースタッフの広谷賢さん（42）は「足を運ぶにつれて明るさを取り戻す人が多い」と話す。中には「やっぱり独りがいい」と言う人もいるものの、現在の利用登録者は100人強。「今後も利用者を増やしていきたいし、他の地域でもこうした取り組みが広がっていけば」と思いを寄せている。

センターだより

第463号
2013年12月15日発行
(公財)西成労働福祉センター
大阪市西成区萩之茶屋1-3-44
☎06-6641-0131

地域のさまざまな支援団体を不定期で紹介しているシリーズも、今回で８回目。
今月号では７月にできたばかりの『ひと花センター』を紹介します。

みなさんの俳句を発表しています。

「ひと花センター」ができて毎日が楽しく過ごせています

「ひと花センター」は、あいりん地域で生活保護を受給している65歳以上の単身高年齢者を対象に、社会参加や、生活支援のプログラムを行なう事業をしています。金銭管理や服薬管理、居場所づくりなどの支援を行なっています。

場所は、大阪社会医療センター歯科診療所の跡地にあり、毎日、９時から19時まで開いています。

居場所づくりの一環として、毎日様々な企画がされています。

取材当日は句会と農作業が開かれていました。句会では、秋の季語「紅葉」「どんぐり」「運動会・体育祭」を題材に俳句を作られていました。

スラスラと書きあげる人、これは違うと言いながら書き直す人、俳句だけではなく絵も描く人など思い思いに作られていました。

普段は和気あいあいとした雰囲気ですが、俳句を作っている間は、みなさん真剣な表情でした。

農作業では、雨の中での作業でしたが、これくらいの雨は関係ないとばかりに、みなさん雑草を抜いたり、ネットの張り替えをしていました。

畑には、ちんげん菜や小松菜などが植えられていました。

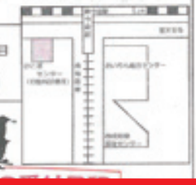
また、スタッフの小松さんからは、「毎日の色々な作業を通して、社会のつながりとか、日常の達成感を感じてほしい。ここを通して地域の色々なところとつながってほしい」という話がありました。

普段利用できるのは「ひと花センター」に登録している利用者だけですが、月に一度だけ地域のみなさんに開放される『ひと花ゆめひろば』が開催されています。

次回は12月21日の土曜日に開催されるということです。

興味を持たれた方は是非参加してみて下さい。

ひと花センター
西成区花園北１丁目
2-19
06-6649-7890



労働者のみなさんから聞いた センター版 今年の漢字

みなさんからたくさんの回答をいただいた、センター版「今年の漢字」

回答の全体的な傾向としては、2013年は厳しい世情の１年間だったと考える人や、厳しい世情だったからこそ、明るい気持ちを忘れたくないとプラスイメージの漢字を選ぶ人もいました。いくつか紹介します。

誠　誠実さが大切にされる世の中になってほしいから。

詐　詐欺行為、詐欺的犯罪が多かった。

感　東京オリンピックが決まったこと、東北楽天が優勝したことに感動した。

進　大変な状況だが、一歩でも前に進みたいから。

みなさんご協力ありがとうございました。

森先生の詰め将棋（五手詰）

答えは裏面に掲載

講習生募集　1月の受付日程

講習科目	選考・説明日 / 申込み期間	講習日程
車両系（整地ほか用）	1月7日（火）	1月14日（火）～1月18日（土）
大特免許所持者対象・2日間	受付 11/21～12/20	1月14日（火）～1月15日（水）
玉掛け	1月15日（水）	1月22日（水）～24日（金）
3日間	受付 12/9～1/8	
車両系（解体用）	1月21日（火）	1月28日（火）
車両系（整地ほか用）所持者対象・講習・1日間	受付 12/13～1/14	

11月の求人数

		対前月増減比	対前年同月増減比
現金（日払い）	32,291	7.4%	12.0%
契約（延べ数）	22,047	-2.2%	1.1%
センター窓口	5,389	-2.2%	8.7%
高齢者清掃ほか	5,544	-6.7%	-0.3%

求人情報

今年も残りわずか。今年で言えば、12月中旬から1月中旬までは、求人が極端に減少する。この時期からうしのごの、急種患が強まる時期でもある。気象予報では、今年の冬期の寒さは厳しくなるとのこと。インフルエンザ予防などの健康管理を含む、十分な備えを。

産業政策は、多くの事業所から「人手不足」との声が聞かれたが、働き手の労働条件改善には未だ至っていない。その要因は、当地域の今年を漢字に表すと、「不」や「未」となるのだろうか。

来年の干支は「うま」（午）。物事が（うま）くいく、幸運が駆け込んでくる年にと願う。

今後は東京オリンピックの基盤整備、消費増税前の駆け込みなどにより、建設業の増加が見込まれる。建設業界における人材確保の対応が、今後の「鍵」となっている。

2013年12月27日
毎日新聞

毎日新聞　2013年(平成25年)12月27日(金)

くらしナビ　カルチャー　暮らしの手帖

人は、生き延びられる。

釜ケ崎の巻

雨宮処凛と憲法生活

作家の雨宮処凛さん(38)が、大阪で憲法を考えてきたこの連載。今回は、日本最大の日雇い労働者の街とされる西成区(あいりん地区)へ。この街は厳しく、ホームレスの人が減り生活保護受給者が増えた。反貧困運動をしてきた雨宮さんだが、事実上の初訪問。テーマは「法の生存権」。【鈴木英生、写真・三浦博之】

反貧困のヒント満載

あまみや・かりん　1975年北海道生まれ。東京在住。2000年「生きさせる会」でデビュー。反貧困運動でも活躍。著書に「あいり入総合センター前で」

いただきものですが…

カマやんイラスト入り携帯ストラップ(ありがとうございます)

写真＝本文3人に、住所・氏名・年齢・電話番号・感想を明記、〒530-8251(住所不要)毎日新聞学芸部「憲法教室」係、osaka.gakugei@mainichi.co.jp。1月6日必着。発送をもって発表。

2013年12月29日
大阪日日新聞

2013年(平成25年)12月29日　日曜日　大阪日日新聞

迎春ムード 地域包む

ひと花センター 高齢者が門松づくり

西成区

西成区花園北1丁目のひと花センターで26日、正月飾りの門松づくりが行われ、場内はひと足早く迎春ムードに包まれた。

単身高齢者と地域コミュニティーを支援する同センターが初めて企画。完成品を消防署や警察署など区内の施設に飾ることで、地域交流を深めようと開いた。

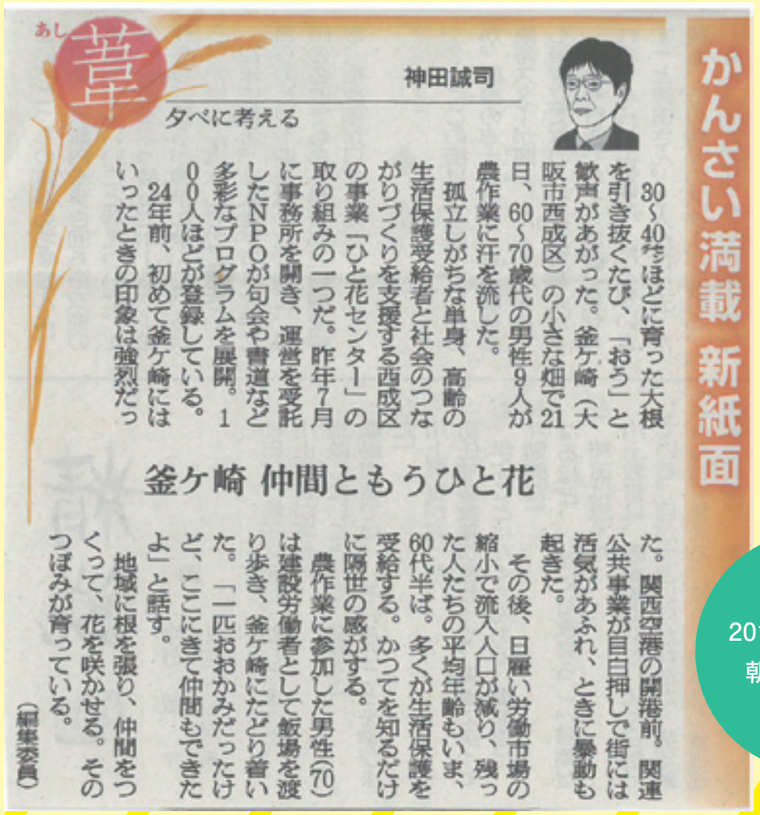
同センター利用者のうち高齢者約20人が参加し、園芸講師の藤口好博さん(63)の手ほどきで門松づくりに挑戦。荒縄を巻き付けたうえに約1㍍の長さに切った3本の竹を立てるなどして周囲を装飾した。

竹をまとめて縛る工程で「男結び」と呼ばれる特有の結び方もあり、苦戦していた男性(67)は、「仕事を離れて久しいので結び方を忘れて難しい。門松をつくっていると、いよいよ年の瀬だと感じる」と話していた。

会場に駆け付けた同区の臣永正廣区長は「立派なものができ感激。皆さんの思いが込められた門松を、成人式など区の各種行事で紹介したい」と激励した。(町中菜穂美)

園芸講師の藤口さん(右)の指導を受けて門松づくりに挑む参加者

2014年1月28日
朝日新聞夕刊



かんさい満載 新紙面

あし草

夕べに考える

神田誠司

釜ケ崎 仲間ともうひと花

30～40㌢ほどに育った大根を引き抜くたび、「おう」と歓声があがった。釜ケ崎(大阪市西成区)の小さな畑で21日、60～70歳代の男性9人が農作業に汗を流した。

孤立しがちな単身、高齢の生活保護受給者と社会のつながりづくりを支援する西成区の事業「ひと花センター」の取り組みの一つだ。昨年7月に事務所を開き、運営を受託したNPOが句会や青道など多彩なプログラムを展開。1000人ほどが登録している。

24年前、初めて釜ケ崎にはいったときの印象は強烈だった。関西空港の開港前。関連公共事業が目白押しで街には活気があふれ、ときに暴動も起きた。

その後、日雇い労働市場の縮小で流入人口が減り、残った人たちの平均年齢もいま、60代半ば。多くが生活保護を受給する。かつてを知るだけに隔世の感がする。

農作業に参加した男性(70)は建設労働者として飯場を渡り歩き、釜ケ崎にたどり着いた。「一匹おおかみだったけど、ここにきて仲間もできたよ」と話す。

地域に根を張り、仲間をつくって、花を咲かせる。そのつぼみが育っている。(編集委員)

あいりん・高齢保護受給者

生活に潤い「ひと花」活動

菜園作り、ボランティアなど

「社会に貢献うれしい」

大阪市西成区のあいりん地域（釜ヶ崎）で、高齢単身の生活保護受給者に菜園作りや文化活動、ボランティアなどに参加してもらう「ひと花プロジェクト」が成果を上げている。時間をもてあまし、孤立しがちな保護受給者に「やること」を提供し、生活の張りと仲間ができるようにするのが目的だ。参加者から「日々の暮らしが大きく変わった」「酒やパチンコが減った」といった声が出ている。（原昌平）

就労指導の対象にならない高齢の保護受給者を対象に、前向きの生活を支援する事業は全国初。地域再生を目指す市の「西成特区構想」の中で提案され、生活保護施策の一つである自立支援プログラム（厚生労働省が全額補助）として昨年7月に始まった。

65歳以上が対象で、福祉事務所の打診に応じた100人余りが登録している。菜園は通称三角公園近くの空き地を借りて大根、ネギ、キャベツなどを育てており、週2回、農作業をして収穫を食事会に利用する。公園の草刈り、体操、映画観賞、折り紙といった多彩なプログラムも開催。本人の希望に応じて参加する。

参加者の多田雄一さん(66)は保護を受けて3年になる。「以前は午前中から酒を飲んでいたが、生活スタイルが変わった。みんなの輪の中に入って少しでも社会貢献できたら、うれしい」と言う。

亀谷長孝さん(69)は「保護を受けて4年間、社会に引け目を感じていたが、今は人間らしい暮らしになっている。いろんな催しを手伝うことで、張り合いができた」と笑顔を見せる。

今年度の事業費は約2500万円。NPO釜ヶ崎支援機構など地元の5団体が共同で受託した。JR新今宮駅近くに拠点を置き、精神保健福祉士ら4人のスタッフが活動を支えている。

区の担当課長は「公園や集会所の清掃など地域に役立つ活動もあり、受給者に対する市民の見方が変わるかもしれない」と話す。

3月16日にはメンバーの活動発表を兼ねたシンポジウムが区内で開かれる。

松崎喜良・神戸女子大教授（公的扶助論）の話「就労による経済的自立だけが自立ではない。生活保護から抜け出せなくても、人が社会とつながり、生き生きと暮らせるようにするのが福祉。全国のモデルになりうる取り組みだ」

野菜を育てる「ひと花プロジェクト」の参加者ら（大阪市西成区で）

2014年2月27日
読売新聞

ひと花プロジェクト　テレビ放映情報

2013年

7月31日	関西のニュース	NHK	15：45～
8月1日	夕刊7チャンネル	テレビ大阪	17：13～
11月10日	新報道2001	フジテレビ	7：30～
12月23日	スーパーニュースアンカー	関西テレビ	17：10～

2014年

3月6日	キャスト	朝日放送	16：50～
3月16日	関西のニュース	NHK	18：45～

参加者数・プログラム数　一覧

紹介者数と登録者数

紹介者数　単位：人

	男性	女性	合計
紹介者数	155	11	166

登録者数　単位：人

	男性	女性	合計
社会参加プログラム	104	6	110
金銭管理等プログラム	4	0	4

登録者　年齢別人数　単位：人

	男性	女性	合計
80歳以上	2	0	6
75～79歳	15	2	17
70～74歳	40	2	42
65～69歳	47	2	49
合計	104	6	110

参加者数（プログラム実施回数）

	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	合計
地域活動										
一本綿公園草刈り	-	-	18(1)	-	15(1)	15(1)	15(1)	13(1)	-	61(4)
仏現寺公園草刈り	-	16(1)	19(1)	-	-	16(1)	14(1)	-	3(1)	68(5)
その他草刈り・花の植え替え※	-	-	22(2)	18(2)	17(1)	-	11(1)	-	16(1)	84(7)
今宮地域清掃	-	-	-	-	10(1)	-	-	13(1)	11(1)	34(3)
今宮工科高周辺清掃	-	-	-	-	-	-	55(4)	60(4)	41(3)	156(11)
ひと花ゆめひろば	-	-	-	15(1)	13(1)	15(1)	11(1)	-	-	54(4)
ゆめひろばを考える会・準備	-	-	-	48(5)	46(4)	34(3)	50(4)	36(3)	-	214(19)
地域の運動会・文化祭およびその準備	19(2)	-	-	19(3)	20(2)	52(6)	10(1)	-	-	120(14)
地域のイベント参加・準備①	3(2)	-	-	-	24(4)	8(1)	2(1)	11(1)	5(1)	53(10)
地域のイベント参加・準備②	-	-	-	-	10(1)	8(1)	-	-	-	18(2)
地域のイベント参加・準備③	-	-	-	-	8(1)	5(1)	-	-	-	13(2)
地域のイベント参加・準備④	-	-	-	-	4(1)	1(1)	-	-	-	5(2)
地域のイベント参加・準備⑤	-	-	-	-	-	10(1)	-	-	-	10(1)
シンポジウムおよびオープン通間発表等	-	-	-	-	-	-	-	-	38(3)	38(3)
合計	22(4)	16(1)	59(4)	100(11)	167(17)	164(17)	153(13)	133(10)	114(10)	928(87)

※　花園公園・今宮小学校など

	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	合計
金銭管理など										
金銭管理※1	-	-	-	-	-	-	15(13)	13(12)	21(17)	49(42)
その他※2	-	-	-	-	-	-	4(1)	0(0)	1(1)	5(2)
合計	-	-	-	-	-	-	19(14)	13(12)	22(18)	54(44)

※1　契約者は4名　※2　面談、問い合わせ

プログラム総計

参加者数（プログラム実施回数）

	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	合計
居場所	278(19)	379(29)	395(30)	429(31)	423(30)	418(29)	418(28)	415(28)	482(31)	3637(255)
レクリエーション	54(6)	119(13)	200(21)	168(21)	140(19)	122(16)	112(12)	125(16)	140(18)	1180(142)
表現プログラム	129(13)	94(13)	52(9)	55(9)	71(10)	77(10)	94(12)	112(15)	112(14)	796(105)
体験・学習	55(5)	112(12)	108(13)	117(17)	94(18)	112(13)	103(12)	105(14)	107(13)	913(117)
地域活動	22(4)	16(1)	59(4)	100(11)	167(17)	164(17)	153(13)	133(10)	114(10)	928(87)
就業体験	-	-	-	-	-	-	21(2)	42(28)	33(27)	96(57)
金銭管理など	-	-	-	-	-	-	19(14)	13(12)	22(18)	54(44)
合計	538(47)	720(68)	814(77)	869(89)	895(94)	893(85)	920(93)	945(123)	1010(131)	7604(807)

参加者数（プログラム実施回数）

	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	合計
居場所										
居場所	278(19)	379(29)	395(30)	429(31)	423(30)	418(29)	418(28)	415(28)	482(31)	3637(255)

	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	合計
レクリエーション										
ひと花映画館	15(1)	51(4)	55(5)	36(4)	34(4)	35(4)	35(4)	33(4)	34(5)	328(35)
ひと花句会	-	8(1)	8(1)	8(1)	4(1)	11(1)	0(0)	11(1)	10(1)	60(7)
散歩の会	-	10(1)	26(2)	19(2)	11(1)	11(1)	15(1)	8(1)	-	100(9)
ひと花カフェ	23(3)	49(6)	49(4)	49(4)	44(4)	34(4)	42(4)	41(4)	47(5)	378(38)
折り紙同好会	-	-	15(1)	5(1)	-	-	-	-	9(1)	29(3)
読み合わせ	-	-	15(2)	7(1)	6(1)	7(1)	10(1)	11(1)	9(1)	65(8)
さちの会	-	-	11(1)	7(1)	9(1)	11(1)	-	-	-	38(4)
カラオケ	-	-	-	14(1)	9(1)	9(1)	7(1)	7(1)	8(1)	54(6)
その他※	16(2)	1(1)	21(5)	23(6)	23(6)	4(3)	3(1)	14(4)	23(4)	128(32)
合計	54(6)	119(13)	200(21)	168(21)	140(19)	122(16)	112(12)	125(16)	140(18)	1180(142)

※　囲碁将棋、女性の茶会、気功など

	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	合計
表現プログラム										
からだとこころをほぐすワークショップ	84(7)※1	10(1)	7(1)	9(1)	7(1)	8(1)	8(1)	8(1)	6(1)	147(15)
今日の「出逢い」を体験する	-	51(7)※2	10(1)	9(1)	8(1)	9(1)	10(1)	9(1)	11(1)	117(14)
あっこちゃんの会	5(1)	5(1)	4(1)	6(1)	5(1)	7(1)	6(1)	6(1)	8(1)	52(9)
いくつになってもバントマイム	8(1)	-	3(1)	4(1)	6(1)	7(1)	4(1)	6(1)	7(1)	45(8)
ころころヨガ	4(1)	7(1)	4(1)	3(1)	6(1)	7(1)	5(1)	7(1)	5(1)	48(9)
詩の時間	10(1)	-	6(1)	-	7(1)	9(1)	12(1)	9(1)	14(1)	67(7)
書のワークショップ	10(1)	-	10(1)	7(1)	10(1)	9(1)	8(1)	7(1)	8(1)	69(8)
リラックス体操	-	5(1)	-	6(1)	6(1)	8(1)	11(1)	6(1)	5(1)	47(7)
工作の時間	-	8(1)	3(1)	6(1)	6(1)	7(1)	5(1)	5(1)	6(1)	46(8)
美術の時間	-	-	5(1)	5(1)	9(1)	8(1)	7(1)	9(1)	6(1)	49(7)
演劇ワークショップ	-	-	-	-	-	-	6(1)	40(5)	29(3)	75(9)
隣奥さんと散歩の会	-	-	-	-	-	-	-	-	7(1)	7(1)
紙芝居劇むすび	8(1)	8(1)	-	-	-	-	-	-	-	16(2)
その他	-	-	-	-	-	-	11(1)	-	-	11(1)
合計	129(13)	94(13)	52(9)	55(9)	71(10)	77(10)	94(12)	112(15)	112(14)	796(105)

※1　7月の全員参加プログラム　※2　8月の全員参加プログラム

	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	合計
体験・学習										
農作業	46(4)	79(8)	61(6)	69(9)	63(9)	80(8)	79(8)	70(8)	70(8)	617(68)
健康教室	9(1)	15(1)	12(1)	10(1)	10(1)	11(1)	10(1)	8(1)	10(1)	95(9)
ミシンを使ったエコバッグ作り	-	-	7(1)	5(1)	2(1)	6(1)	3(1)	5(1)	6(1)	34(7)
人づきあいの型りことをみんなで考える会	-	7(1)	10(2)	6(2)	8(2)	9(2)	7(1)	9(1)	18(2)	74(13)
空手・護身術	-	-	5(1)	3(1)	2(1)	6(1)	4(1)	3(1)	3(1)	26(7)
その他※	-	11(2)	13(2)	24(3)	9(4)	-	-	10(2)	-	67(13)
合計	55(5)	112(12)	108(13)	117(17)	94(18)	112(13)	103(12)	105(14)	107(13)	913(117)

※　医芸・彫刻講師等

	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	合計
体験・学習										
就業体験※	-	-	-	-	-	-	21(2)	42(28)	33(27)	96(57)

※　自転車リサイクル、囲碁・バター店舗にて接客

事業概要

事業名称：　西成区単身高齢生活保護受給者の社会的つながりづくり事業

愛称：　ひと花プロジェクト

事業主管：　西成区 保健福祉課

受託事業者：　ひと花プロジェクト連合体
代表事業者：　ＮＰＯ法人釜ヶ崎支援機構
代表　山田　實

構成団体一覧：　ＮＰＯ法人釜ヶ崎支援機構（代表）
ＮＰＯ法人こえとことばとこころの部屋
ＮＰＯ法人生活サポート釜ヶ崎
ＮＰＯ法人ＨＥＡＬＴＨ　ＳＵＰＰＯＲＴ　ＨＩＮＡＴＡ
ＮＰＯ法人まちづくり今宮
事務局：　ひと花センター
住所：　〒557-0016 大阪市西成区花園北1-2-19
電話：　06-6649-7890
FAX：　06-6649-7891
E mail：　info-hitohana@npokama.org
HP：　http://www.hitohanap.org/

開所日時：　月曜～日曜　午前９時～午後７時
（１２月２９日～１月３日を除く）

期間：　2013年7月1日～2014年3月31日（単年度契約）

予算：　2408万1750円（平成25年度）

登録者数　110名　男104名　女6名

スタッフ　常勤　４名
廣谷賢、原田麻以、小松稔、水野佐知

非常勤　３名
篠原史生、松本恵美、向原千夏

（すべて平成25年3月末時点）

平成25年度　西成区単身高齢生活保護受給者の社会的つながりづくり事業　ひと花プロジェクト　報告書

発行：　ひと花プロジェクト連合体
編集：　ひと花プロジェクト、NPO法人こえとことばとこころの部屋（ココルーム）
デザイン：　上浦智宏（ubusuna）
DTP：　大河原万唆博
表紙イラスト：　菅 修
発行日：　2014年3月31日

平成25年度　西成区単身高齢生活保護受給者の社会的つながりづくり事業　ひと花プロジェクト

事業主管：　西成区役所　保健福祉課（事業調整）
受託事業者：　ひと花プロジェクト連合体